

城山公園整備事業に伴う
県史跡 浜田城跡発掘調査報告書

2020年3月
島根県 浜田市教育委員会

序

浜田市は、全国に誇れる海、山などの美しい自然と、石見神楽やユネスコ無形文化遺産に記載された石州半紙などの伝統文化、また大学、美術館をはじめとする教育文化施設が充実した、人と文化と自然の調和のとれた島根県西部の中核都市です。

奈良時代には石見国を中心地として、国府や国分寺が置かれ、鎌倉時代の在地領主は日本海に面した港を利用した海外貿易により栄えました。

江戸時代になると、海岸部に浜田藩、山間部に津和野藩が置かれ、現在の市街地には浜田藩の城下町が建設されました。山間部で生産された半紙、鉄などが海岸部の港から輸出され、浜田藩・津和野藩領とも一体的に発展してきました。

現在の浜田城跡は、県の史跡として保護を受けるとともに、都市公園として市民の憩いの場になっています。特に春には、市内屈指の桜の名所として、多くの方が訪れてています。

本市では、令和元年に浜田開府400年の節目を迎えることから、城山公園の魅力をより一層引き出すために、遊歩道の再整備や駐車場の設置などの城山公園整備事業を実施してきました。

本書は、整備事業に先立ち実施した発掘調査の成果を記録としてまとめたものになります。本書が学校教育や生涯学習・開発事業との調整などひろく活用され、文化財保護思想の普及、地域史研究への一助となることを願っております。

おわりに、発掘調査等に際しまして、ご指導、ご協力を賜りました地元の皆様、島根県教育委員会をはじめとした関係機関・各位に厚くお礼を申し上げます。

令和2年3月

浜田市教育委員会

教育長 石本一夫

例　　言

1. 本書は、平成 28 年度～平成 30 年度において浜田市教育委員会が実施した城山公園整備事業にかかる発掘調査報告書である。

2. 調査は以下の組織で行った。

　調査主体　浜田市教育委員会教育長　石本 一夫

　調査指導　島根県教育庁文化財課

　岡崎雄二郎：松江市史編纂委員会 松江城部会専門委員

　西尾 克己：松江市史編纂委員会 松江城部会長

　乗岡 実：岡山市教育委員会

　(所属は指導当時のものを記載)

　調査員　藤田 大輔：浜田市教育委員会

　事務局　浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係

　渡邊 敏明：文化振興課長（平成 28 年度）

　外浦 和夫：文化振興課長（平成 29・30 年度）

　川本 裕司：文化財係長（平成 28 年度）、専門企画員（平成 29・30 年度）

　榎原 博英：主任主事（平成 28 年度）、文化財係長（平成 29・30 年度）

　小松 真人：主事（平成 29・30 年度）

3. 調査にあたり協力および従事していただいた方々は次のとおりである。

　調査協力　鍵本 俊朗（浜田市誌編纂室専門員）

　調査参加　岩元 進、岩元美恵子、小澤 佑介、近藤 清文、佐々木邦文、高原久美子、

　中田 貴子、桧垣 友孝、山中 茂明

4. 遺物実測図は基本的に 1/4 スケールを用いている。

　出土遺物、実測図及び写真、台帳類の記録は浜田市教育委員会に保管してある。

5. 本書の編集は藤田がおこなった。

本文目次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯と法的手続き	
第2節 城山公園整備事業の概要	
第3節 発掘作業と整理作業の経過	
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 浜田城跡の概要	7
第1節 浜田城跡の築城	
第2節 浜田城跡の城郭施設	
第3節 浜田城跡の石垣	
第4節 近代以降の浜田城跡	
第4章 調査の方法と成果	17
第1節 調査の方法	
第2節 山頂部調査の成果	
第3節 中ノ門谷部調査の成果	
第4節 浜田護国神社南斜面部調査の成果	
第5節 庭園部調査の成果	
第5章 浜田城跡の軒瓦分類	81
第1節 対象の瓦	
第2節 軒丸瓦	
第3節 軒平瓦・軒棧瓦	
第6章 自然科学分析	90
第1節 はじめに	
第2節 分析試料について	
第3節 分析方法	
第4節 分析結果	
第5節 まとめ	
第7章 総括	95
第1節 発掘調査で得られた事実関係の整理	
第2節 歴史的評価	
第3節 課題	

挿 図 目 次

第1図 城山公園整備事業の概要.....	2
第2図 浜田城跡法規制図 (S = 1/3,000)	4
第3図 浜田城跡の位置.....	5
第4図 浜田城跡と周辺の遺跡(S=1/20,000).....	6
第5図 発掘調査エリア設定図.....	17
第6図 本丸部トレーンチ配置図 (S = 1/1,000)	18
第7図 本丸トレーンチ1平面図・土層図 (S = 1/40)	19
第8図 本丸トレーンチ2平面図・土層図 (S = 1/40)	19
第9図 本丸トレーンチ3平面図・土層図 (S = 1/40)	20
第10図 本丸トレーンチ4平面図・土層図 (S = 1/40)	22
第11図 本丸トレーンチ5平面図・土層図 (S = 1/40)	22
第12図 本丸トレーンチ1出土遺物実測図 (S = 1/4)	24
第13図 本丸トレーンチ2出土遺物実測図 (S = 1/4) (S = 1/2)	24
第14図 本丸トレーンチ3出土遺物実測図 1(S = 1/4)	25
第15図 本丸トレーンチ3出土遺物実測図 2(S = 1/4)	26
第16図 本丸トレーンチ4出土遺物実測図 1(S = 1/4)	27
第17図 本丸トレーンチ4出土遺物実測図 2(S = 1/4)	28
第18図 本丸トレーンチ4出土遺物実測図 3(S = 1/4)	29
第19図 本丸トレーンチ4出土遺物実測図 4(S = 1/4)	30
第20図 本丸トレーンチ5出土遺物実測図 1(S = 1/4)	31
第21図 本丸トレーンチ5出土遺物実測図 2(S = 1/4)	32
第22図 二ノ門・三丸・出丸トレーンチ配置図 (S = 1/1,000)	34
第23図 二ノ門トレーンチ1平面図・土層図 (S = 1/40)	35
第24図 二ノ門トレーンチ2平面図・土層図 (S = 1/40)	35
第25図 二ノ門トレーンチ3平面図・土層図 (S = 1/40)	36
第26図 二ノ門トレーンチ4平面図・土層図 (S = 1/40)	37
第27図 二ノ門トレーンチ4幕末遺構図 (S = 1/40)	38
第28図 三丸トレーンチ1平面図・土層図 (S = 1/40)	40
第29図 三丸トレーンチ2平面図・土層図 (S = 1/40)	40
第30図 二ノ門トレーンチ1出土遺物実測図 (S = 1/4)	42
第31図 二ノ門トレーンチ2出土遺物実測図 (S = 1/4)	42
第32図 二ノ門トレーンチ3出土遺物実測図 (S = 1/4)	43
第33図 二ノ門トレーンチ4出土遺物実測図 1(S = 1/4)	44
第34図 二ノ門トレーンチ4出土遺物実測図 2(S = 1/4)	45
第35図 三丸トレーンチ1出土遺物実測図 (S = 1/4)	46
第36図 三丸トレーンチ2出土遺物実測図 (S = 1/4)	46
第37図 出丸トレーンチ1平面図・土層図 (S = 1/40)	49

第38図 出丸トレンチ2平面図・土層図(S=1/40)	50
第39図 出丸トレンチ1出土遺物実測図1(S=1/4)	51
第40図 出丸トレンチ1出土遺物実測図2(S=1/4)	52
第41図 出丸トレンチ1出土遺物実測図3(S=1/4)	53
第42図 出丸トレンチ1出土遺物実測図4(S=1/4)	54
第43図 出丸トレンチ2出土遺物実測図(S=1/4)	54
第44図 中ノ門谷部トレンチ配置図(S=1/1,000)	56
第45図 中ノ門谷部トレンチ1平面図・土層図(S=1/40)	57
第46図 中ノ門谷部トレンチ2平面図・土層図(S=1/40)	59
第47図 中ノ門谷部トレンチ3平面図・土層図(S=1/60)	60
第48図 中ノ門谷部トレンチ4平面図・土層図(S=1/40)	61
第49図 中ノ門谷部トレンチ5平面図・土層図(S=1/60)	63
第50図 中ノ門谷部トレンチ1出土遺物実測図(S=1/4)	65
第51図 中ノ門谷部トレンチ2出土遺物実測図(S=1/4)	66
第52図 中ノ門谷部トレンチ3出土遺物実測図1(S=1/4)	68
第53図 中ノ門谷部トレンチ3出土遺物実測図2(S=1/4)	69
第54図 中ノ門谷部トレンチ4出土遺物実測図1(S=1/4)	70
第55図 中ノ門谷部トレンチ4出土遺物実測図2(S=1/4)	71
第56図 中ノ門谷部トレンチ5出土遺物実測図(S=1/4)	71
第57図 浜田護國神社南斜面部トレンチ配置図(S=1/1,000)	73
第58図 浜田護國神社南斜面部トレンチ平面図・土層図(S=1/40)	74
第59図 浜田護國神社南斜面部トレンチ出土遺物実測図(S=1/4)	74
第60図 庭園部調査区配置図(S=1/1,500)	76
第61図 庭園部調査区1平面図・土層図(S=1/200)	77
第62図 庭園部調査区2平面図・土層図(S=1/200)	78
第63図 庭園部調査区1出土遺物実測図(S=1/4)	79
第64図 庭園部調査区2出土遺物実測図(S=1/4)	79
第65図 浜田城跡の軒丸瓦1(S=1/4)	83
第66図 浜田城跡の軒丸瓦2(S=1/4)	84
第67図 浜田城跡の軒平瓦(S=1/4)	87
第68図 浜田城跡の軒平瓦・軒棧瓦(S=1/4)	88

表 目 次

表1 発掘調査概要表	3
表2 石垣石材利用	11
表3 近世石垣修理規模一覧	11
表4 本丸T3~5出土瓦器種別点数	33
表5 本丸T3~5出土瓦器種別重量比	33

写 真 図 版 目 次

- | | | | |
|------|---|-------|---|
| 図版 1 | 本丸 T1 調査前状況（南から）
本丸 T1 完掘状況（南西から）
本丸 T1 北東壁土層堆積状況
本丸 T2 完掘状況（南東から）
本丸 T3 調査前状況（南から）
本丸 T3 2 層中瓦出土状況（東から）
本丸 T3 完掘状況（南から）
本丸 T3 北壁土層堆積状況 | 図版 6 | 三丸 T1 調査前状況（南から）
三丸 T1 表土除去後状況（北から）
三丸 T1 完掘状況（南から）
三丸 T2 調査前状況（北から）
三丸 T2 完掘状況（北から）
三丸 T2 南壁土層堆積状況
出丸 T1 調査前状況（南から）
出丸 T1 2 層瓦検出状況（北から） |
| 図版 2 | 本丸 T4 調査前状況（北から）
本丸 T4 2 層瓦出土状況（南から）
本丸 T4 完掘状況（南から）
本丸 T5 調査前状況（東から）
本丸 T5 完掘状況（北東から）
本丸 T5 東壁土層堆積状況
二ノ門 T1 調査前状況（西から）
二ノ門 T1 完掘状況（北から） | 図版 7 | 出丸 T1 土堀基礎遺構（東から）
出丸 T1 南壁土層堆積状況
出丸 T1 SX01 近景（東から）
出丸 T1 SX01 瓦鉄釘遺存状況
出丸 T1 SX01（北から）
出丸 T1 完掘状況（南から） |
| 図版 3 | 二ノ門 T2 調査前状況（西から）
二ノ門 T2 完掘状況（東から）
二ノ門 T3 調査前状況（北から）
二ノ門 T3 2 層瓦出土状況（南から）
二ノ門 T3 完掘状況（南から）
二ノ門 T1 石垣基礎状況（南から）
二ノ門 T2 石垣基礎状況（西から）
二ノ門 T3 石垣基礎状況（北から） | 図版 8 | 出丸 T2 検出石垣（南から）
出丸 T2 完掘状況（南東から）
中ノ門谷部 T1 調査前状況（北から）
中ノ門谷部 T1-1 石材散布状況（東から）
中ノ門谷部 T1-1 東壁土層堆積状況
中ノ門谷部 T1-1 完掘状況（北から） |
| 図版 4 | 二ノ門 T4 調査前状況（北から）
二ノ門 T4 4 層焼土検出状況（北から）
二ノ門 T4 西側礎石（南から）
二ノ門 T4 西側礎石上炭化柱根遠景（東から）
二ノ門 T4 西側礎石上炭化柱根近景（南から）
二ノ門 T4 東側礎石（南から）
二ノ門 T4 排水溝（北から）
二ノ門 T4 敷石（南から） | 図版 9 | 中ノ門谷部 T1-2 Pit（南から）
中ノ門谷部 T1-2 西壁土層堆積状況
中ノ門谷部 T1-2 完掘状況（東から）
中ノ門谷部 T2 Pit 検出状況（東から）
中ノ門谷部 T2 調査前状況（東から）
中ノ門谷部 T2 完掘状況（東から） |
| 図版 5 | 二ノ門 T4 階段西側（南から）
二ノ門 T4 階段東側（南から）
二ノ門 T4 西側石垣下部状況（東から）
二ノ門 T4 東側石垣下部状況（西から）
二ノ門 T4 完掘状況（南から） | 図版 10 | 中ノ門谷部 T3 調査前状況（南から）
中ノ門谷部 T3 6 層土器出土状況（東から）
中ノ門谷部 T3 5 層・6 層上面状況（北から）
中ノ門谷部 T3 完掘状況（南から）
中ノ門谷部 T4 調査前状況（南から）
中ノ門谷部 T4 4 層上面石列（南から） |
| | | 図版 11 | 中ノ門谷部 T4 水路石列（南西から）
中ノ門谷部 T4 北東壁土層堆積状況
中ノ門谷部 T4 完掘状況（東から）
中ノ門谷部 T5 調査前状況（北西から）
中ノ門谷部 T5 北端礎石（南東から） |

- 図版 11 中ノ門谷部 T5 石組状況 1 (東から)
中ノ門谷部 T5 石組状況 2 (南から)
中ノ門谷部 T5 浜田町境界杭 (南から)
中ノ門谷部 T5 作業風景
- 図版 12 中ノ門谷部 T5 検出石垣 (南から)
中ノ門谷部 T5 完掘状況 (南から)
浜田護国神社南斜面 T1 調査前状況(西から)
浜田護国神社南斜面 T1 完掘状況(東から)
浜田護国神社南斜面 T2 調査前状況(東から)
浜田護国神社南斜面 T2 完掘状況(東から)
- 図版 13 庭園部調査区 1 調査前状況 (西から)
庭園部調査区 1 西側岸状況 (北東から)
庭園部調査区 1 中嶋・池状況 (西から)
庭園部調査区 1 東側南壁土層堆積状況
庭園部調査区 1 東壁土層堆積状況
庭園部調査区 1 完掘状況 (西から)
庭園部調査区 2 調査前状況 (西から)
庭園部調査区 2 杭列検出状況 (北から)
- 図版 14 庭園部調査区 2 碓石 (東から)
庭園部調査区 2 西側完掘状況 (西から)
庭園部調査区 2 中央～東側完掘状況(西から)
明治 40 年頃の庭園部の絵葉書
庭園部調査区 2 中嶋状況 (北から)
- 図版 15 本丸 T1 出土遺物 1・2
本丸 T2 出土遺物 1・2
本丸 T3 出土遺物 1～4
- 図版 16 本丸 T4 出土遺物 1～7
本丸 T5 出土遺物 1
- 図版 17 本丸 T5 出土遺物 2～4
二ノ門 T1 出土遺物
二ノ門 T2 出土遺物 1・2
二ノ門 T3 出土遺物 1・2
- 図版 18 二ノ門 T4 出土遺物 1～8
- 図版 19 二ノ門 T4 出土遺物 9
三丸 T1・T2 出土遺物
出丸 T1 出土遺物 1～6
- 図版 20 出丸 T2 出土遺物 1・2
中ノ門谷部 T1 出土遺物 1～3
中ノ門谷部 T2 出土遺物 1～3
- 図版 21 中ノ門谷部 T3 出土遺物 1～5
図版 22 中ノ門谷部 T4 出土遺物 1～3
中ノ門谷部 T5 出土遺物 1・2
浜田護国神社南斜面部出土遺物
庭園部出土遺物 1・2
- 図版 23 軒丸瓦
図版 24 軒平瓦・軒棟瓦

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯と法的手続き

元和5年（1619）、伊勢国松坂城主であった古田重治は5万4千石で石見国浜田への転封となり、浜田藩が成立する。令和元年（2019）は、浜田藩成立400年の節目となるため、浜田市により、城山公園等の再整備が計画された。

城山公園整備事業の対象地は、島根県指定史跡及び周知の埋蔵文化財包蔵地としての浜田城跡に該当するため、浜田市教育委員会において事前に整備箇所の確認調査を実施することになった。

島根県指定史跡浜田城跡としての現状変更申請（発掘調査）については、平成28年度及び平成29年度調査分を平成28年11月1日付け教文第338号で島根県教育委員会教育長に提出し、同日指令島教文財第61号の93により許可を得た。平成30年度調査分は平成31年1月17日付け教文第489号で提出し、平成31年1月29日付け指令島教文財第13号の144により許可を得た。

周知の埋蔵文化財包蔵地浜田城跡としての文化財保護法第99条第1項の規定による通知については、庭園部の調査区を平成29年7月11日付け教文第169号で、浜田護國神社南斜面部の調査区を平成30年2月21日付け教文543号で島根県教育委員会教育長に提出している。

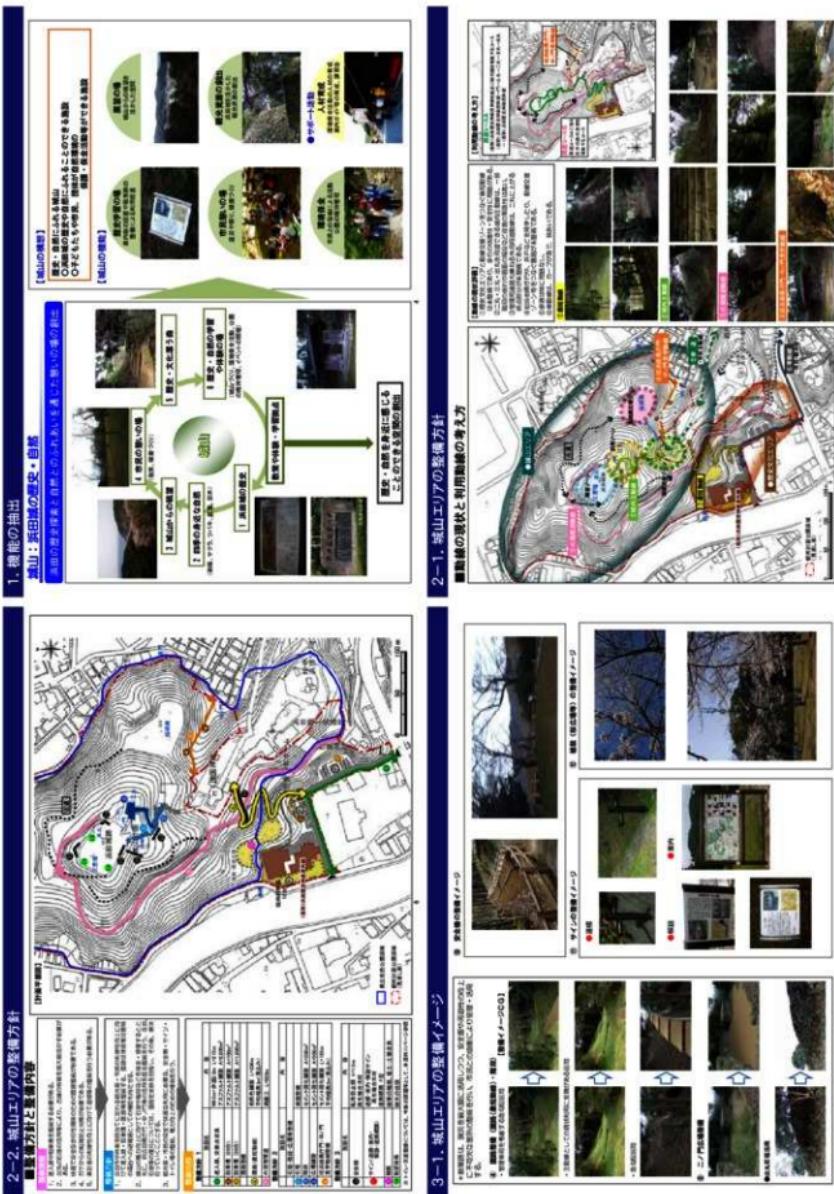
また、発掘調査地は保安林及び島根県立自然公園指定を受けている。保安林内作業許可申請書については、平成28年度及び平成29年度調査分を平成28年10月31日付け教文第335号で島根県知事に提出し、平成28年11月17日付け指令西農第2194号により許可を得た。平成30年度調査分は、平成31年1月17日付け教文第487号で提出し、平成31年1月22日付け指令西農第2452号で許可を得た。島根県立自然公園内における特別地域内土地形状変更許可申請書については、平成28年度及び平成29年度調査分を平成28年11月8日付け教文第346号で浜田市長に提出し、平成28年11月9日付け浜田市指令観第173号で許可を得た。平成30年度調査分は、平成31年1月17日付け教文第488号で提出し、平成31年1月23日付け浜田市指令観第269号で許可を得ている。

第2節 城山公園整備事業の概要

平成26年2月、浜田市により「元気な浜田」をつくるために取り組むべき重点政策として、浜田藩が成立した元和5年（1619）から400年にあたる令和元年（2019）に、浜田開府400年記念事業を実施する計画がなされた。この記念事業は、記念イベント事業と浜田城周辺整備事業からなり、後者の中に城山公園整備事業が位置付けられている。

城山公園整備事業の方針は、「1 浜田市や神楽を目当てに訪れる観光客・市民の利便性向上に向けて進入路・駐車場・園路等を整備する。園路は津波等災害時の高台への避難路としての機能も持たせる。2 城山の魅力向上に向けて石垣や階段などの保全・修復とともに、旧浜田県庁の門・中ノ門等の活用を図る整備を行う。なお、石垣等の復元については、国指定史跡を目指し、その後、順次行っていくこととする。3 観光客・市民の安全で快適な利用に必要な、安全柵・サイン・トイレ等の整備、魅力向上のための植栽を行う。」となっている。

基本的にこの城山公園整備事業は、都市公園としての浜田城跡の整備であり、その内容は既存遊歩道の再整備、危険箇所への安全対策、来訪者の利便性向上のための進入路・駐車場整備及びサイン設置などであり、この整備を通じて、浜田城周辺を歴史文化の保存と継承、学習・憩いの場、教育・観光・交流の拠点とすることを目的としている。



第3節 発掘作業と整理作業の経過

城山公園整備は浜田城の各地点で実施される計画となっていた。このため、発掘調査地点を大まかに山頂部、中ノ門谷部、浜田護国神社南斜面部、庭園部エリアに区分し、整備工程を勘案して発掘調査を実施した。なお、島根県指定史跡地には山頂部、中ノ門谷部が該当し、浜田護国神社南斜面部、庭園部エリアは周知の埋蔵文化財包蔵地のみが該当する。各エリアの発掘調査面積・期間等は下表のとおりである。

発掘の調査指導に関しては、島根県教育庁文化財課担当職員により中ノ門谷部を平成29年3月10日、庭園部を平成29年8月16日、山頂部を平成30年1月12日及び平成31年3月5日に受けた。

平成30年2月3日及び4日には山頂部の調査を中心に、城郭全般にわたる指導を乗岡実氏より受けた。また、門の礎石が検出された二ノ門T4では、平成31年2月25日に西尾克己氏、平成31年3月14日に岡崎雄二郎氏の調査指導を受けた。

なお、中ノ門T4周辺はカスミサンショウウオなどの重要種の生息地となっていたため、平成29年4月26日に浜田市文化財審議会委員である藤田樹夫氏の指導を受け、重要種に配慮した調査方法の指導も受けている。

調査中には現地説明会を2回実施している。第1回目の平成30年3月18日には65人、第2回目の平成31年3月24日には80人の参加を得た。

整理作業については、現地調査に並行して、雨天時に遺物の水洗・注記・接合作業などを実施していたが、遺物の実測やトレース、整理などは平成30年度の前半期に集中的に実施した。遺物の調査指導に関しては、瓦関係を平成30年2月3日及び4日に乗岡実氏、平成31年3月14日に岡崎雄二郎氏より受け、陶磁器類関係を平成31年2月25日に西尾克己氏より受けた。

調査の総合的な整理検討、報告書作成作業は令和元年度に実施した。

表1 発掘調査概要表

エリア名	トレンチ	調査規模	調査面積(m ²)	調査期間
中ノ門谷部	中ノ門T1	(3m × 2m) + (2m × 0.4m) + (2.5m × 2m)	11.8	20170216～20170428
	中ノ門T2	8.5m × 1m	8.5	20170131～20170427
	中ノ門T3	10m × 1.5m	15	20161207～20170420
	中ノ門T4	(2m × 2m) + (1m × 0.5m)	4.5	20170427～20170601
	中ノ門T5	15m × 1m	15	20161202～20170326
	小計		54.8	
山頂部	本丸T1	3m × 2m	6	20170515～20171121
	本丸T2	5m × 1m	5	20170516～20181005
	本丸T3	5.5m × 1.5m	8.25	20170503～20180208
	本丸T4	3m × 2m	6	20170605～20180208
	本丸T5	2m × 1.5m	3	20170530～20180208
	出丸T1	7m × 2m	14	20170613～20180323
	出丸T2	(2 × 1.5) + (1.3 × 0.25)	3.325	20171128～20180328
	二ノ門T1	2m × 1.5m	3	20171107～20180323
	二ノ門T2	(2m × 1m) + (3m × 0.3m)	2.9	20171113～20180208
	二ノ門T3	(1.4m × 1m) + (1m × 1m)	2.4	20171115～20180323
	二ノ門T4	(6m × 1.4m) + 2 (0.7m × 0.4m)	8.96	20190218～20190329
	三丸T1	4m × 1m	4	20190212～20190308
	三丸T2	3.5m × 1m	3.5	20190212～20190308
	小計		70.335	
浜田護国神社南斜面	T1	3m × 1.5m	4.5	20170226～20170312
	T2	2m × 1m	2	20170226～20170302
	小計		6.5	
	調査区1	25m × 6.5m	162.5	20170724～20170801
庭園部	調査区2	(25m × 9m) + (28m × 5m)	365	20170802～20170926
	小計		527.5	
	合計		659.135	



第2図 浜田城跡法規制図 (S=1/3,000)

第2章 遺跡の位置と環境

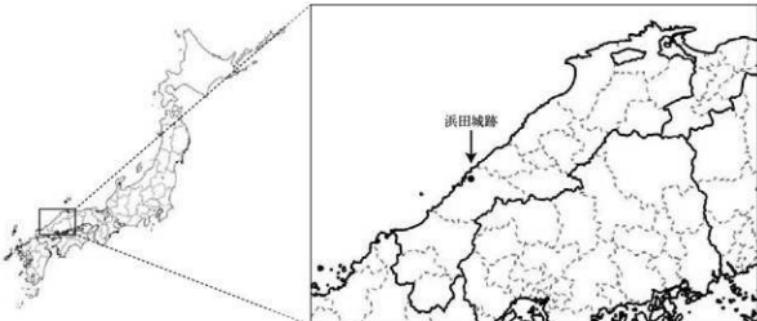
第1節 地理的環境

浜田城跡は島根県浜田市殿町に所在する。

浜田市は島根県西部・石見地方のほぼ中央にあり、北は日本海に面し、南は中国山地となる。中国山地が日本海まで迫っているためにまとまった平地は少ないが、浜田川、周布川、三隅川といった主要河川の下流域に沖積平野が形成されている。

殿町は浜田川下流の沖積平野である浜田平野に位置する。浜田川は浜田市金城町の雲城山周辺に源を発し、北流して松原湾に注ぐ流域約20kmの河川である。下流部に関しては近世に現流路に落ち着いたとされ、それまでは様々な流路があったと推定されている。

浜田城跡は浜田平野内に立地する独立丘陵である標高67mの亀山に所在する。北側は松原湾に接し、西側と南側には浜田川が流れる。東側には平地が広がり、この平地の北側には松原浦の砂州がある。このため、浜田川の古流路は亀山の東側にあった可能性がうかがえ、砂州で隔てられた小規模な沼沢地・湿地を近世時に埋め立て平地とし、侍屋敷地を形成したと考えられる。



第3図 浜田城跡の位置

第2節 歴史的環境

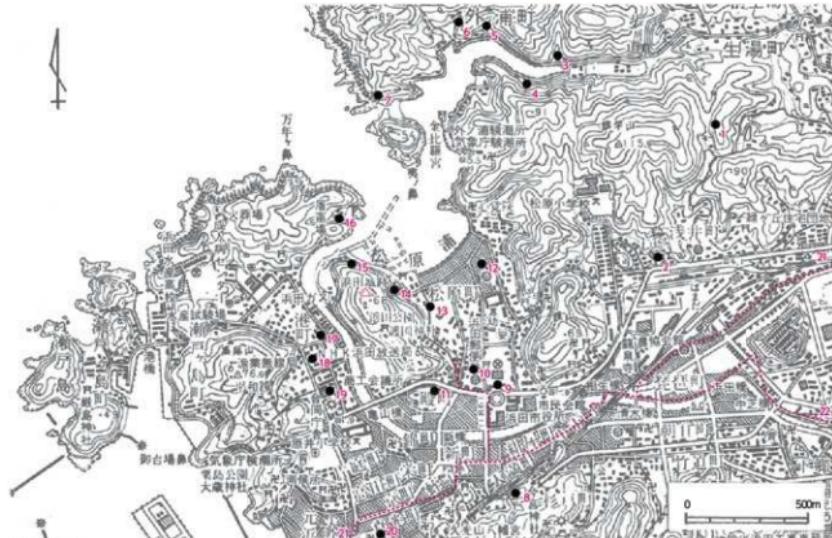
浜田城跡が位置する浜田市街地では旧石器時代の遺跡は知られていなく、また明確な縄文・弥生時代の遺跡は確認されていない。ただ、浜田城跡では、以前に磨製石斧が2点表採され、後述する城山東麓の中ノ門谷部の発掘調査でも弥生時代後期の土器が数点出土している。

古墳時代の遺跡としては、夕日ヶ丘古墳(11)が浜田城山の南西側にあったとされる。現在は消滅し、遺物も確認できないが、石組があったとされる。本発掘調査においては、中ノ門谷部で、古墳時代後期の須恵器や土師器が一定量出土しており、集落の存在がうかがえる。

古代から中世にかけては那賀郡小石見郷にあたり、式内社の天豐足柄姫命神社が殿町に所在するが、古代の遺物が出土する遺跡は確認できない。中世の遺跡は、中世山城として堀切が確認される三重城跡(8)があり、浜田城山の北側にも中世山城の痕跡が指摘されている。また本調査では、中ノ門谷部で中世前期の遺物が出土している。また城山東麓や裏門の近くには地蔵を彫った中世末期の小型板碑が多くみられ、浜田城築城時に、城山から移転した伝承のある寺院も多くある。

近世になると、浜田城を中心に城下町が形成され、浜田川の南側に山陰道（21）がはしる。浜田川北側には侍屋敷地が広がっており、浜田城下町遺跡が3地点で確認されている（9、10、12）。浜田城下町遺跡（殿町 79 番地 47）では、大手通と侍屋敷の区画と見られる石列及び被熱した陶磁器・瓦を伴う焼土が検出され、焼土は遺物の年代観から幕末の第二次幕長戦争の時期に比定されている。浜田城下町遺跡（松原町 268 番地 5）では、屋敷地後背の空閑地の可能性が指摘され、遺構は検出されなかつたが、九陶編年肥前 I 期にあたる胎土目積の肥前系陶器が出土していることが注目される。浜田城下町遺跡（殿町 78 番地 2）では、浜田城外堀の西側石垣が検出されている。

城山周辺にはお庭焼きの伝承もあり、いくつもの窯跡が存在しているが、遺跡として明確に確認できるものは少ない。その中でも動木窯跡（16）は、近世後期から昭和 34（1959）年まで継続した丸物窯であり、1号窯から3号窯までの3基の登り窯が確認されている。1号窯は、大口手前の作業場と思われる平坦地が廃窯後に墓地にされており、最も古い墓には天保 9 年（1838）の銘があり、1号窯の下限は天保 9 年と考えられる。なお、典拠は不明であるが、「島根縣史」などに「文化年中松平周防守康任の家老某浜田外ノ浦及動木にて陶器製造を創む」とあり、文化年中（1804～1818）に製陶が始まったとしている。なお、「石見粗陶器史考」に「那賀郡原井村で、弘化年間（1844～1847）に三沢治八が丸物窯を開窯した」、「浜田市の川下地区で、明治年間に三沢金治が丸物窯を開設した」とあり、それぞれ2号窯、3号窯を指していると考えられる。



△浜田城跡

1. 森脇窯跡 2. 富島窯跡 3. 皿山窯跡 4. 矢島窯跡 5. 内藤窯跡 6. 西山窯跡 7. 日和山方角石 8. 三重山城跡 9. 浜田城下町遺跡（殿町 78 番地 2）
10. 浜田城下町遺跡（殿町 79 番地 47） 11. 夕日ヶ丘古墳 12. 浜田城下町遺跡（松原町 268 番地 5） 13. 浜田城裏門跡 14. 浜島窯跡
15. お庭燒跡 16. 動木窯跡 17. 某窯跡 18. 三沢窯跡 19. 某窯跡 20. 東海藤先生之墓 21. 山陰道 22. 浜田広鳥街道

第4図 浜田城跡と周辺の遺跡 (S=1/20,000)

【参考文献】

島根県 1930『島根縣史 九』

平田正典 1979『石見粗陶器史考』石見地方史研究会

第3章 浜田城跡の概要

第1節 浜田城跡の築城

(1)浜田城築城以前

浜田城築城以前の石見国を中心地は、浜田城跡より東に5km程度離れた浜田市国府地区にあった。国府地区では、国衙の遺跡は確認されていないが、台地上に石見国分寺跡や石見国分尼寺跡、平野部に石見府中の一拠点と見られる古市遺跡などが所在している。古代から中世にかけての浜田城跡周辺は那賀郡小石見郷にあたり、その状況は不明確ではあるが、石見国の中心地ではなかった。

浜田城跡周辺の状況が見え始めるのは、16世紀後半以降となる。『籌海図編』(1562年)には、「番馬塔」(はまだ)とあり、また島津家久の日記『中書家久公御上京日記』(天正3年・1575年)や細川幽斎の紀行文『九州道の記』(天正15年・1587年)などにも記載が確認できる。特に『中書家久公御上京日記』では、浜田において島津家久を歓待する薩摩国の諸港の人名が見え、多数の船が来航していたことがわかり、また家久は浜田に10日余り滞在し、町の見学などに出向いている。

また、元和5年(1619)に初代浜田藩主古田重治が幕府代官から引き継いだ「元和五年八月石見国古田領船役水夫帳」には、浜田、三隅、益田の3組ごとの各港の船の規模・水夫数などが記されている。浜田港には、積載量の大きな船は少ないが、船数・積載量・水夫数の面で他の港に比べて突出しており、浜田藩領内で最大の港であったといえる。

このように、築城以前の浜田は、港町として繁栄を見ていたことがうかがえる。ただ、築城以前の浜田の港町の場所については、諸説あるものの特定に至っていない。

浜田城山に関しては、天保10年(1839)頃の「浜田城記」「新修島根県史 史料篇3」などに吉川(繁沢)元氏が陣屋を設けていたとあり、城山北側に堀切や加工段らしきものが確認できる。

(2)浜田城跡の築城

元和5年(1619)、当時松坂城主であった古田重治は5万4千石で石見国浜田への転封となり、浜田藩が成立する。それ以前は銀山領であった。

前述の「浜田城記」によると、浜田に入部した重治は、現在の元浜町の極楽寺に入り、その後仮御館に移り、城地の選定にとりかかる。選定にあたっては益田や周布などを検討した後、現所在地である浜田の亀山を選んでいる。理由として、土地は狭いが左右に濠があり便利であること、山麓の浜田川では大小の船が通行可能であること、北に沼があることなどが挙げられている。

一方で、伊勢の地誌類である「松坂權輿雑集」(宝暦2年・1752)や「親類書」(寛政8年・1796)には、元和5年の上洛時に「浜田」へ国替えを仰せ付けられたと記してある。転封の発令日や領地請取の日付を鑑みると、幕府は当初から浜田への転封を命じていたと考えられる。

浜田城の築城は元和6年(1620)2月に着手し、同年11月に地普請が終了、元和9年(1623)5月には城及び城下が整い、その後に重治は家督を重恒に譲ったとされる。浜田城の築城は、新規築城を禁止した武家諸法度以降であるが、無城地であったことなどから、新規築城が可能であったと思われる。

築城の経過は、一次史料がないため信頼性に欠けるが、城の縄張り設計にあたっては、軍師滝川一学が防ぎ方、古市久馬が攻め方となり、これに北条家浪人松田武太夫と今村一正が加わったとされている。なお、今村一正是浜田城の設計、監督を受け持ったとされ、重治の兄で当時松坂城主であった古田重勝に従って、秀吉の朝鮮出兵に参加している。また、石垣工人は芸州と長州から、その他の石

工などは隣国から招いたとされている。一方で、瓦職人に関しては、一次史料が確認されており、元和 8 年（1622）の浅井神社（浜田市浅井町）棟札に揖州大坂住南都の瓦師富島吉右衛門尉家次が「御帳被仰付」と記され、大坂から職人が招聘されたことが判明している。

第 2 節 浜田城跡の城郭施設

古田重治によって元和 9 年（1623）に築城がひとまず終了したと考えられる浜田城は、前期松井松平家（周防守家）、本多中務家、後期松井松平家、越智松平家（右近将監家）の管理を経て、慶応 2 年（1866）の第二次幕長戦争による落城に至る。現在の浜田城跡には石垣があるのみで、建物は一切残っていないが、城下町絵図や地誌類をみると、多くの城郭施設があったことがわかる。文献等により、詳細が明らかなものを下記に記す。

(1) 本丸

山頂の本丸には、三重櫓と呼ばれる望楼型天守と玉蔵、六間長屋、一ノ門が設けられていた。

(ア) 三重櫓

各資料によれば、「天守」「殿守」「三重櫓」「櫓」の記述が見えるが、一貫して使用される名称は「三重櫓」であり、省略されて「櫓」とも称されている。規模に関しては、『国目付差出書付（控写）』には、「櫓高サ四丈六尺壱寸 但棟丸瓦迄間数 上之重 五間四面 中之重 七間四面 下之重 東西九間南北七間」とあり、『浜田御城内外浦町惣間数書付』には、「一 三重櫓 上ノ重 二十五坪五厘三毛 五間四面 中ノ重 六十七坪二厘五毛 七間四面 下ノ重 六十七坪九厘四毛 東西九間 南北七間 右櫓高サ四丈六尺壱寸」とある。

これらによれば、東西方向は各重が上に順次通減、南北方向は下・中重が同大で上重が通減、床面積は下・中重が同大で上重が減ということになる。この点について、三浦正幸氏は「浜田城考察」（『復元体系 日本の城』6 中国）において、入母屋造りであることを指摘し、「元和年間の天守としては古式な形をしていたらしい」としている。

(イ) 玉蔵

『浜田御城内外浦町惣間数書付』に「玉蔵 本城ノ内ニ有」及び「本丸坪数 八百二十一坪半 横玉蔵下引残七百四十九坪」とある。前述にあるとおり、同資料内に櫓の面積が記載してあるため、それを差し引くと玉蔵の面積は 4 坪程度が想定できる。

(ウ) 六間長屋

『浜田御城内外浦町惣間数書付』に「一 城内建坪 二百三十坪四分四厘 右ハ本丸櫓玉蔵 六間長屋 ニノ門 中番所ニヶ所 塩硝蔵 中ノ門 同長屋 磨部屋番所等之坪数ナリ」とあるのみで、その名称から長込（桁行）が六間と想定する以外、詳細は不明である。絵図には一ノ門に接する位置に描かれる。

(エ) 一ノ門

『浜田御城内外浦町惣間数書付』に「一 本城之門 二間ニ七間 門見付外形石垣高サ六間 外形三間四方」とあり、『浜田城地目録』（『浜田会誌』第武號・第三號）では、「一 門九ヶ所 本丸一門 冠木門」と記される。また、『自安政三年丙辰 格例録三編中 自三十六 至五十七』（旧久松家文書）には、安政 5 年（1858）5 月 22 日に「一、御本丸堀之御門御普請請出來（并）見分有之」とあり、安政 5 年に建替えられたことがわかる。

(2)二ノ丸

城山中腹の二ノ丸には、二ノ門や櫓台、焰硝蔵、時打番所などが設けられていたとされる。

(ア)二ノ門

『浜田御城内外浦町惣間数書付』に「一 二ノ門 長サ二十九間 幢サ二間三間四間×四間は四方
かゝ門見附外形石垣高サ二間半 所ニヨリ壹間半」とあり、『浜田城地目録』（『浜田会誌』第貳號・
第三號）では、「二門 渡門」と記される。二ノ門は発掘調査により、礎石等の遺構が検出されて
いる。また、絵図には入母屋造りの渡門の形式で描かれ、下見板張が見られるものもある。

(イ)焰硝蔵

名称が記載された資料は幾つか知られているが、外観や構造を知りうる資料は知られていない。
絵図には、平面長方形の入母屋造の建物が描かれている。中でも詳細に描かれているのは中根家
所蔵城郭図で、平面長方形で戸口が北側長辺の中央にあり、建物の位置は曲輪中央、やや丘陵先
端側に描かれている。

(ウ)木戸

木戸、竹戸については『浜田城地目録』（『浜田会誌』第貳號・第三號）に「一 城内木戸四ヶ所
水ノ手木戸 本丸一ノ門エ向右ノ方外通り堀ヨリ出口 水ノ手竹戸 上ニ同 脱出木戸 二ノ門エ向
右ノ方外通り堀ヨリ出口 出丸木戸 本丸脇千人溜リノ内西ノ方堀ヨリ出口」と記載されている。

(3)三ノ丸

山麓の三ノ丸には御殿や中ノ門をはじめ、多くの蔵や役所、番所等が置かれ、西側山麓には回遊式
庭園や茶屋も設けられていたとされる。

(ア)御殿

『浜田御城内外浦町惣間数書付』には、「一 御館 間数 四十九間 此疊数五百六十二枚外ニ
百六十一枚板敷竹エン共」とあり、また「四百壹坪半ハ居宅四十九間分之建坪也」ともある。絵
図では、「浜田城下町絵図」に平面図が描かれているが、文字記載はなく、部屋については、一部の史料に記載が見られるが、不明確な部分が多い。

(イ)南御屋敷

「浜田南御屋敷之事」「御家譜附録梅田家文書」によれば、元来より城内の役所が手狭であると
ころに、宝永6年(1709)に城内に統く隣地に空屋敷がでたため、これを改修して南御屋敷とし
たと記されている。また、文化元年(1804)の「道の記」では、この南御屋敷に高殿の新築をは
じめとする建て替えをしたとある。幕末から明治初期の『石見国龟山城図』や『浜田城図』には、
三層の高層建築物が南御屋敷の南隣に描かれている。

(ウ)中ノ門

『浜田御城内外浦町惣間数書付』に、「一 中ノ門 多門ノ事 三間ニ九間 外形石垣高サ四間」と
あり、『浜田城地目録』（『浜田会誌』第貳號・第三號）では、「中門 渡門 本丸迄長サ百二十間横
五間」と記される。文献史料によれば、浜田城最大の城門であり、「石見国浜田城引渡帳」(天保
7年・1836年)によれば、家老が詰める場所であり、「諸御門番所定」(天保7年)には、「中之
御門内御武器役所」と記載されるなど、重要な位置を占めている。

(エ)庭園

古田時代の庭園の様子は不明であるが、『松井家家譜』(浅野家)によれば、「寛文三年ノ秋ヨ

リ内片庭へ御茶屋被成御立候付 将屋敷四五軒河原町御引セ御普請出来 鳥（鳴）ノ御茶屋唐笠茶屋杯ト名ツケ都合七ヶ所ニ御茶屋有之候 御船モ屋形二艘被仰付…』とあり、寛文3年（1663）秋に普請が行われ、延宝3年（1675）3月に作事に入り、延宝4年4月に完成をしている。

絵図などには、瓢箪形をした池に大小の島が描かれ、大きな島には「中嶋」と記されたものもある。

第3節 浜田城跡の石垣

(1)石材

石垣の石材鑑定は、平成13年及び平成27年に実施している。鑑定の結果、浜田城跡石垣の主石材は流紋岩であり、他の石材としては流紋岩質凝灰角礫岩、安山岩、ディサイトが確認されている。主石材である流紋岩は、非破碎観察によるが、A灰色の石基に斜長石が入るもの、B特に斜長石が目立つもの、C貫入岩で花崗岩に近いもの、D自破碎岩と4種に分類される。

石切場は、文献によれば浜田城山麓と松原町の心覚院境内地の2説あるが、どちらも江戸後期の地誌類によるものである。

前者に関しては、「浜田城記」に「城地既ニ定リ、芸州長州ノ工匠ヲ招キ人夫ヲ催シ、石垣ヲ高ク築キ、麓ヨリ荷車ヲ以テ石ヲ運ヒ、数百人夫ヲシテ引上シム、」とあり、また年代不詳の「已面白」「島根縣史 第9巻」にも「藝州長州より工匠を招き穴夫を集め石垣高く築上させられ、石は城山の麓より取出し、数百人の人夫にて之を引上る、其外石工等隣国より招き築かれるよし、」とある。

後者に関しては、典拠は不明であるが「那賀郡史」に、古来運上場と称した地から築城用の石を切り出してその地を広げ、ここに心覚院を移したとある。浜田城本丸から心覚院までは直線距離で0.6kmを測る。なお、心覚院は、もとは浜田城山内にあった天台宗来迎寺とされ、来迎寺が築城時に替地され、延宝年間（1673～1680）に淨土宗となり、心覚院と改名したとされている。

現地踏査においては、城山西麓及び東麓（中ノ門付近）で流紋岩Aの分布が確認されたが、露頭面に細かい節理が観察され、石垣石材としては不適格と判断される。一方の心覚院境内地付近では、心覚院から外ノ浦にかけての海岸線に流紋岩の露頭があり、流紋岩A・B・Dが確認され、流紋岩質凝灰角礫岩も分布する可能性が高い。この海岸線は石材量も豊富であり、石材輸送を考えても、石切場の可能性が高いと考えられる。また、江戸時代後期になるが、「角郭経石見八重葎」「石見国拾式ヶ所名所」に千江の浦として外ノ浦が掲載されており、図中に「石トリバ」と記される箇所もある。

なお、地質図によると、流紋岩C及び安山岩類も浜田城山より2km圏内に分布が確認できる。

(2)石垣の石材の分布

平成27年の石材鑑定にあわせて、石材の分布の調査を実施した。

本丸及び二ノ丸の石垣は、流紋岩が主体となり、流紋岩A～Dが確認される。またその他の石材となる流紋岩質凝灰角礫岩、安山岩、ディサイトも一定量利用されている。

三ノ丸に位置する中ノ門では、流紋岩A～Cが確認され、その中でも流紋岩Aが主体となる。流紋岩B及びCに関しては、鏡石や隅角部緑石など比較的大型石材として利用されるという特徴が見られる。なお、鏡石には流紋岩Cが利用されており、石材の風化前は白色を呈していたと考えられ、視覚的な効果を考えた石材選択であると評価できる。

また、本丸・二ノ丸で一定量利用されている流紋岩質凝灰角礫岩、安山岩、ディサイトが確認され

ていないことから、場所による石材選択の可能性はうかがえる。

城内と城下町の境に位置する裏門の石垣では、流紋岩質凝灰角礫岩が主体となり、その他には流紋岩Dが確認できる。

上記のように、石垣の立地場所で石材利用の差があることが判明している。

表2 石垣石材利用

	流紋岩A	流紋岩B	流紋岩C	流紋岩D	凝灰角礫岩	安山岩	ディサイト
三丸櫓以上	○	○	○	○	○	○	○
中ノ門石垣	○	○	○				
裏門石垣	○	○		○	○		

○…主利用、○…利用

(3)石垣修理

江戸時代における石垣修理を示す史料として、「石垣補修図」がある。これは、城郭内の石垣修理を幕府に伺う際に作成されたもので、浜田城跡には文化10年(1813)と嘉永3年(1850)の2種類が確認されている。文化10年には二ノ門虎口北石垣南面、嘉永3年には出丸の石垣3か所及び二ノ門南面の孕みを報告し、補修を願い出ている。その規模は下表のとおりである。

表3 近世石垣修理規模一覧

石垣補修図	場所	高さ	長さ
文化10(1813)年	二ノ門虎口北石垣南面	2間(3.636m)	6間(10.908m)
	二丸南面	4間(7.272m)	10間3尺(19.089m)
嘉永3(1850)年	出丸東面	3間(5.454m)	6間(10.908m)
	出丸南面	3間(5.454m)	19間(34.542m)
	出丸西面	2間2尺(4.242m)	5間(9.09m)

*1間を1.818m、1尺を0.303mで換算

なお、文化10年には「石見國濱田城二之丸北之方石垣壻ヶ所孕候付而繪圖朱引之通如元修補仕度奉願候以上 文化十年癸酉五月 松平周防守書判」。嘉永3年には「石見國濱田城二之丸東之方石垣壻ヶ所 南之方石垣壻ヶ所 西南之間石垣壻ヶ所 西北之間石垣壻ヶ所 孕候付繪圖朱引之通以速々如元修補仕度奉願候以上 嘉永三庚戌年十一月 松平十郎磨 印形書判」と記されている。

近代以降の石垣修理は、昭和33~35年度にかけて大規模な石垣修理が実施されている。これは昭和31年(1956)に浜田市の失業対策事業の一環として城山公園整備事業が決定され、この事業のなかで実施されたものである。残念なことに行政側にこの石垣修理の全容をうかがうことのできる資料は残っておらず、該当年度の事務報告書にも事業を実施した旨の記載のみである。ただ、郷土史家である山口博三郎氏の資料によると、浜田県庁の門から一ノ門にかけての登城道沿いの石垣すべてが修理されたとされ、図面に記されている。

また、週刊『石見タイムズ』昭和34年1月31日号には下記のとおり記されている。「焼けくづれてごろごろしている石を集め運び上げ、積み建てる訳であるが、昔の城壁修築の権威者の指導によるわけでもなく、また浜田地方の郷土史家など或る程度の知識人の指導や知恵にあづかっているわけでもないので浜田市が出来るだけ立派な城壁を作ると云う、努力をしているとは思われないようだ。(中略)。また一般の人もこの城の文化財的観念もあまりないようで土台となる礎石を、馬鹿力で動かして見たり、つけ物石にちょうどよいと云うので持ってかえり、だんだん石は少なくなった。」とある。なお、この記事では石垣修理は昭和32年1月から着手されたとある。また石垣修理中に2体の石造觀音像、檜先とその金具など3点が発掘されたとも記されている。この記事によれば、修理前の石垣は焼け崩れており、修理の際には礎石の移動と石垣部材の散逸があった可能性をうかがうことができ

る。現時点では、当時の写真等の良好な資料が確認できておりず、今後の課題である。

昭和 50 年（1975）4 月には、三丸南石垣南面及び東面が大雨により崩落し、昭和 51 年に修理されている。当時の仕様書をみると、長さ 6m、面積 42m² の規模で、在石による修理が実施されている。現在、該当箇所の角石東面にはドリル痕が確認できる。

なお、上記までの昭和に修理された石垣を観察しても、石材利用の差は見られないため、基本的に在石を利用して修理を行っている。

平成 4 年（1992）には、中ノ門東側石垣の孕み対策として、中ノ門東側石垣東面及び南面の一部を防護ネットにより補強している。また、平成 27 年 1 月には、孕みの顕著であった裏門石垣北東面の修理を実施している。

（4）石垣の特徴

現在浜田城跡には、近代以後に造られた石積み等を含めると、90 基以上の石垣（石積）が確認される。

（ア）築城期の石垣

前段で修理が実施された石垣を挙げた。築城期の石垣は、現地観察によても、各資料に見えない箇所と推定できる。つまりは中ノ門・本丸・三丸東側の石垣などは概ね元和 6 ~ 9 年の築城時の形態をとどめているものと考えらえる。

中ノ門石垣は一部で横目地が通る布積み崩してあり、直方体の石材による横置き指向が見て取れる。また巨石を配置することも特徴的であり、登城道の正面にあたる位置には鏡石とも言える 160 cm × 125cm 程度の石を用いている。隅角部には本丸石垣でも確認できる縱石を用いており、角石の横に角脇石を配置するような定型的な算木積は見られない。石材の加工については、矢穴を二石で確認できるのみで、積極的に割石加工を行っている痕跡は見られない。恐らく節理面で割れた石材を一部加工するなどして利用している。ただ、角石にはノミ調整が確認され、隅角部に稜を作出している。総合すると、中ノ門石垣は全体的には、石材加工をほとんど行わず、また未発達の算木積など慶長期の石垣に見られる古い要素を備えるが、角石のノミ調整などで一部元和期相応の要素が見られる。

本丸石垣及び三丸東石垣は崩落や埋没により残存状況が悪く、特徴を抽出することは困難であるが、縱石を確認することができる。石積みとしては、横目地の通らない乱積みである。築石に関しては、中ノ門に見られるような巨石の配置は見られず中型石材を用いている。ただ本丸南面石垣に関しては、岩盤が近いためか小型の石材も貼り付けるように用いている。

上記のように築城期の石垣は、築石に加工をほとんど加えず、また隅角部に縱石を用いるなど、総体的に慶長期の石垣の特徴を有している。また、中ノ門と本丸等の石垣では、積み方や使用石材の大きさなどで、その特徴が異なっており、場所による石垣普請への力点の差が見て取れる。

（イ）近世の修理石垣

近世の石垣補修団は文化 10 年及び嘉永 3 年の 2 種が確認できるが、このうち前者の該当箇所は昭和 30 年代の石垣修理により更新されている。このため近世の修理石垣が残っているのは嘉永 3 年のものである。

嘉永 3 年の修理は出丸石垣と二丸南面石垣の一部で実施しているが、出丸西面以外の石垣は崩落等により、その痕跡を確認することはできない。

出丸西面石垣は南側が崩落しているが、崩落部直北に修理された石積みを確認することができる。

その規模は高さ約4m、長さ約8mを測る。石垣補修図には高さ2間2尺（約4.2m）、長さ5間（約9m）の規模と記載されており、この箇所が嘉永の修理石積みと推定される。修理部の右側は崩落しているため、全容をうかがうことはできないが、築城時の石垣には見られない谷積みが散見され、昭和の修理石垣ほどその頻度は高くない。また、小型石材を多用している。

（ウ）昭和の修理石垣

昭和33年度から35年度にかけて実施された大規模修理が挙げられる。その際は、在石によって修理されており、江戸時代の石垣と使用石材に明確な差は見受けられない。ただ、積み方に谷積みが顯著にみられることを特徴として抽出できる。特に直方体の石材を積極的に谷積みとしており、築城期の石積みとは対照的である。

角石に関しては、登城道に面する部分にはノミ調整が確認できる石材を利用しているが、登城道から外れる部分には粗い割石を使用し、隅角部の稜は不明確である。

なお、昭和51年の石垣修理箇所は小型の石材を充填するように築かれ、隅角部の稜はほとんどない。

第4節 近代以降の浜田城跡

（1）幕末から近代初頭 慶応2年（1866）～

浜田は幕長戦争以後長州藩預地となり、明治2年（1869）8月に、大森県が設置されると、浜田など石見国における長州藩預地は大森県管轄となった。翌3年（1870）1月には、大森県庁が石見地域において東に寄りすぎているという理由などから、本庁を石見の中央である浜田に移し、浜田県と改称される。（注1）

上記のような推移を辿り、浜田城跡の所管は幕末から明治初頭にかけてめまぐるしく変わるが、明治4年（1871）8月の太政官布達（注2）により、浜田城跡は兵部省の所管となる。

明治5年（1872）3月に浜田県は陸軍省に対して、津和野城は壊れたところが数多くあるため、陸軍省において不要な場合は解体、売却をしたい旨、また必要な場合は修繕の手筈について伺っている。ただ、浜田城跡に関する記載は確認されない。時代は後になるが、明治7年には浜田藩の台場の一つである青川台場を旧持主への払い下げの伺いをだし、払い下げが認められている。

同じく明治5年にマグニチュード7.1の浜田地震が起こり、浜田町周辺は甚大な被害を受けたが、浜田城跡に関する記述は見当らない。

明治6年（1873）1月14日の太政官布達「全国城郭存廃ノ処分並兵営地等撰定方」（注3）、いわゆる「廃城令」により、浜田城跡は存城の一つに選定され陸軍省の所管（工兵第5方面）となる。ただ、この際に木更津や新潟などとともに「必要ノ区域相定大蔵省協議ノ上地所可受取事」とされ、明確に陸軍省必要地が定まっていなかった。また、このなかの「諸国存城調書」において、「現今城郭ナシトイヘトモ新規ニ受取ルヘキ所」を表す○印付きで記載されていることから、この時には城郭の体をなしていなかったと推察される。

（2）第一次公園化計画 明治7年（1874）～

明治6年（1873）1月の公園設置に関する太政官布達第16号を受け、全国的に旧城郭を公園化する動きがみられる。浜田県においても、明治7年（1874）4月に内務省へ浜田城跡を含めた5か所（浜田城跡・物部神社境内・高野寺境内・鷲原八幡宮境内・柿本神社境内）の公園化申請を行っている。

この申請に対する返答は同月にあり、浜田城跡及び高野寺境内は広漠であるので、管理の面を考えて面積を縮小し、再度伺い出るようとの指令が下された。これを受けた浜田県は、浜田城跡等を再び取り調べ、同年6月に再度内務省へ伺い出ている。(注4)

この公園化申請の流れの中で、浜田県は明治7年12月に陸軍省へ、浜田城跡の公園化申請をしているため、陸軍省として浜田城跡に城塞屯營を新たに建築するかどうかを伺い出している。翌8年(1875)1月の陸軍省からの指令には、浜田城跡は鎮台營所の地ではあるが、未だ防衛線や諸兵の配置が定まっていないため、城塞屯營等を建築するか否かの決定は難しいとある。(注5)

明治8年2月には内務省からも浜田城跡は陸軍省所管地の可能性もあるため、地所について整理を行った後に、再度公園化への申請をするようにとの指示がでている。浜田県は、浜田城跡は慶応2年(1866)以降官林に取り組まれているために、陸軍省所管地という認識はなかったが、その後に工兵第5方面と協議を行い、他日入用のときに速やかに引き渡せば差支えないと回答を得た。(注6)

なお、『浜田市誌』上巻に典拠は不明であるが、明治8年(1875)11月には浜田県は城山の一部を公園として開放したとある。しかし、明治9年(1876)2月においても、浜田県で公園設置に関する稟議がとられるなど、公園化の許可は下りていない。(注7)また、その後の資料においても、公園化が認められたという記録は確認できない。

明治9年以降、島根県は浜田城跡が陸軍省所轄地であるという認識をもち、地所等を取り調べた。しかし、慶応2年以後の長州藩支配中にその土地を民間人に貸与や払い下げており、また払い下げを受けた人には浜田県が地券を交付している問題もあり、(注8)最終的に浜田城郭内における陸軍省所轄地が確定したのは、明治15年(1882)になってからである。(注9)

なお、浜田県は明治9年4月に島根県へ合併されている。

(3)第二次公園化計画 明治31年(1898)~

明治22年(1889)に旧城郭・不用土地の旧藩主への積極的払い下げ方針が決定されると、明治23年(1890)に浜田城跡の18町1畝14歩が旧藩主の嗣子松平武修氏へ払い下げられた。

明治31年(1898)には歩兵第二十一連隊が浜田に転営し、城山麓に司令部が設置された。そして、翌32年(1899)、連隊長竹中安太郎氏により浜田城本丸を公園化し、忠魂碑を建立する計画がなされた。

明治23年以降、旧城郭は松平家所有となっていたため、明治34年(1901)1月に旧藩主松平武修氏より島根県へ「地所貸渡之証」が、島根県浜田城山記念碑建設有志者より旧藩主松平武修へ「地所借受証書」が提出された。貸与期間は30年とされている。翌2月に公園起工式、明治36年(1903)9月に本丸において忠魂碑除幕式が執り行われ、浜田公園(亀山遊園)として公開されるに至った。この時に、本丸に至る登城道(階段)整備が実施され、出丸東面石垣が撤去されたと思われる。

浜田公園公開以降、上記の有志者が公園管理を行っていたが、明治44年(1911)8月に浜田公園井記念碑建設有志者より浜田町へ、公園管理を町で実施して欲しいとする要望書が提出された。理由として、財源がないために管理が行き届かず、浜田町としての体面にも及ぶことを要いたためであった。

これを受けて浜田町が公園管理を実施していたが、明治45年(1912)4月に、土地を貸している松平武修氏より浜田町へ、明治34年に交わした地所貸渡の期限は明治65年までであるが、明治45年度限りで契約を解除したいという申し出があり、浜田町は大正2年(1913)4月1日に地所を松平武修氏へ引き渡し、以後は松平氏によって、浜田城山の公園管理が実施された。

(4)第三次公園化計画 昭和6年（1931）～

昭和6年（1931）3月に浜田町は浜田城山買収を決定し、昭和8年（1933）に浜田城山に招魂社建設・公園化計画を立てる。浜田町は公園化に際して、内務省衛生局保健課にその設計を依頼し、同年10月、同課国立公園嘱託稻垣龍一農学士が来浜し、城山一帯を見分した。その後、時期は不明であるが、「島根県浜田町城山公園計画説明書」が林学博士田村剛・農学士稻垣龍一の連名で提出された。田村氏は稻垣氏の上司にあたり、日本の国立公園、海中公園制度の確立と発展に尽くした人物でもある。

この説明書を見ると、両氏は城山が記念物であるという認識をもっている。一文を引くと「抑モ浜田町ハ元和六年濱田城ノ築造ニ依リ、城下八町トシテ発展ノ基礎ヲ拵ラヘタルモノニシテ濱田町ノ現在ヲナス原動ハニ濱田城ニ依ルモノナリ。従テ今日濱田城跡ヲ公園トスルニ当リテ此レヲ紀念物トシテ保存スベキハ計画者ノ想ヒ到ルベキ事実ナリ。斯ル見地ヨリ現存スル遺構ハ努メテ此等ヲ完全ニ保存スル如ク計画ノ方針ヲ定メタリ。」とある。この公園化計画は結果的に実施されなかったが、招魂社（現浜田護国神社）は昭和13年（1938）10月に竣工した。

(5)第四次公園化計画 昭和31年（1956）～

昭和15年（1940）11月に浜田町・石見村・長浜村・周布村・美川村の1町4村が合併し、浜田市が誕生する。浜田城跡の管理は浜田市に引き継がれ、昭和31年（1956）に失業対策事業の一環として城山公園整備事業が決定される。この事業の中で、昭和33年度から35年度にかけて延べ人數約13,500人をもって石垣修理が実施された。詳細は次節で後述するが、当時の新聞記事によると浜田市には石垣を含め城山が文化財であるという認識が欠けており、上記の田村・稻垣両氏とは対照的であった。

この石垣修理終了後、昭和37年（1962）3月に都市公園の計画決定、6月には島根県史跡（指定範囲：174,900m²）に指定される。

その後、昭和39～42年度にかけて城山廻遊道路建設が実施される。廻遊道路は城山の南中腹を始点とし、城山を周回した後に本丸にとりつくように建設された。この現状変更は島根県教育委員会への許可手続きを経ないで実施されたために、昭和43年（1968）8月に島根県教育委員会より、遺跡への被害の大きい部分（二ノ門周辺）に関しての復旧指示がだされ、翌44年（1969）3月に復旧している。

昭和40年（1965）には、国道9号線が城山を横断して建設されるなど、指定時以降、社会情勢の変化から現状変更が相次ぎ、昭和45年（1970）に指定範囲が一部解除となった。（指定範囲：81,420m²）

その他の指定としては、昭和39年（1964）に浜田海岸県立自然公園第2種特別地域、昭和50年（1975）に風致保健保安林の指定を受けている。

(6)第五次公園化計画 平成26年（2014）～令和元年（2019）

平成26年2月、浜田市により「元気な浜田」をつくるために取り組むべき重点政策として、浜田藩が成立した元和5年（1619）から400年にあたる平成31年（2019）に、浜田開府400年記念事業を実施する計画がなされた。この記念事業は、記念イベント事業と浜田城周辺整備事業からなり、後者の中に城山公園整備事業が位置付けられている。なお、城山公園整備事業は都市公園としての整備内容となっている。

【注】

- (1)「大森県ヲ浜田ニ移シ浜田県と改称ス」(国立公文書館デジタルアーカイブ 請求番号: 太 00062100)
- (2)「地方城郭兵部省ニテ管理並徵兵差出シ期限」(国立公文書館デジタルアーカイブ 請求番号: 太 00436100)
- (3)「全国城郭存廃ノ処分並兵營地等撰定方」(国立公文書館デジタルアーカイブ 請求番号: 太 00436100)
- (4)「第二課演説書」「明治九年 浜田縣事務引渡書 秘書課」より
- (5)「12月 14日 濱田県令 濱田城趾に榮城有無の義伺」(アジア歴史資料センター レファレンスコード: C09121559200)
- (6)注 (4)と同じ
- (7)「浜田城歴史政治部 自明治八年至明治九年」より
- (8)「工兵第5方面の浜田城境界に関する何」(アジア歴史資料センター レファレンスコード: C07080667400)
- (9)「工兵第5方面の申出に関する本部意見通知」(アジア歴史資料センター レファレンスコード: C07080667300)
※国立公文書館デジタルアーカイブ及びアジア歴史資料センターで原資料画像を公開されている資料については、それぞれの請求番号、レファレンスコードをもって出典標記とした。

【参考文献】

- 井上寛司 2001『中世の港町・浜田』浜田市教育委員会
- 大島幾太郎 1935『浜田町史』一誠社
- 大庭千里 1985『浜田城山紀念碑』『亀山』第12号 浜田市文化財愛護会
- 株式会社いき出版 2018『島根県の合戦』
- 川本裕司 2017『浜田藩成立過程の再検討－古田家の浜田転封を中心として－』『島根史学会会報』第55号島根史学会
- 工藤忠孝編 1977『石見国名所和歌集成』
- 倉恒康一 2018『戦国期の石見国浜田と領主権力』『石見の中世領主の盛衰と東アジア海域世界』島根県古代文化センター
- 島根県 1930『島根県史 九』
- 島根県 1965『新修 島根県史 史料篇 3 近世（下）』
- 島根県 1968『新修 島根県史 通史篇 1』
- 島根県 1967『新修 島根県史 通史篇 2』
- 島根県古代文化センター 2015『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究』
- 全国城跡等石垣整備調査研究会 2014『第11回全国城跡等石垣整備調査研究会資料集』
- 第42回山陰考古学研究集会 2014『山陰の近世城郭と城下町～遺跡調査と遺物組成から～』第42回山陰考古学研究集会事務局
- 高屋茂男編 2017『石見の山城』ハーベスト出版
- 同成社 2015『石垣整備のてびき』
- 鳥取市教育委員会 2013『資料でみる鳥取城（近代編）』
- 濱田会 1882『濱田城地目録』『濱田会誌』第弐號・『濱田城地目録』『濱田会誌』第三號
- 浜田市 1973『浜田市誌』上巻
- 浜田市 1982『写真集 はまだ』
- 浜田市教育委員会 1992『ふるさとを榮いたひとびと』
- 浜田市教育委員会 2004『松平右近将監家とその家臣』
- 浜田市教育委員会 2007a『浜田城跡（庭園跡の調査1）』
- 浜田市教育委員会 2007b『浜田城跡（庭園跡の調査2）』
- 浜田市教育委員会 2014『島根県浜田市遺跡地図IV・浜田市旭町重富宮跡調査』
- 浜田市教育委員会 2015『平成26年度 浜田市内遺跡発掘調査報告書』
- 浜田市教育委員会 2017『平成28年度 浜田市内遺跡発掘調査報告書』
- 原裕司 2001『浜田城調査について－中間報告として－』『シンポジウム 浜田城を語る』浜田市文化財愛護会・山陰中央新報社
- 藤田亨 2002『浜田城址公園の変遷』『亀山』第28・29号 浜田市文化財愛護会
- 三浦正幸 1992『浜田城考察』『復元体系 日本の城』6中国
- 三浦正幸 1999『城の鑑賞基礎知識』至文堂
- 雄山閣出版 1990『藩史大事典』第6巻 中国・四国編

第4章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

(1)調査区の設定

城山公園整備は、浜田城跡内の各地点で実施されることから、便宜上、発掘調査地点を山頂部、中ノ門谷部、浜田護国神社南斜面部、庭園部エリアの4つに区分した。また、各エリア内でのトレントンチ設定にあたっては、整備工事が及ぶ箇所に設定した。



第5図 発掘調査エリア設定図

(2)表土・包含層・遺構の掘削

山頂部・中ノ門谷部・浜田護国神社南斜面部の表土掘削には、ジョレンや草削りを使用した。出土する遺物の粗密に応じて適宜、移植ゴテ等も用いた。遺構の埋土掘削には草削りや移植ゴテを使用した。掘削にあたっては、土層観察を行いつづり下げ、土層断面については写真撮影を行い、必要に応じて断面図を作成した。

庭園部については、既往調査により、表土及び造成土の厚さが判明していたため、バケットに平爪を装着したバックホウを使用し、少しづつ面上に掘り下げる行った。遺構面に関しては、ジョレン・草削り等を使用した。また、湧水や雨水の排水のために水中ポンプを利用した。

出土した遺物については適宜、出土状況を記録した後、取上げた。

(3)記録の作成

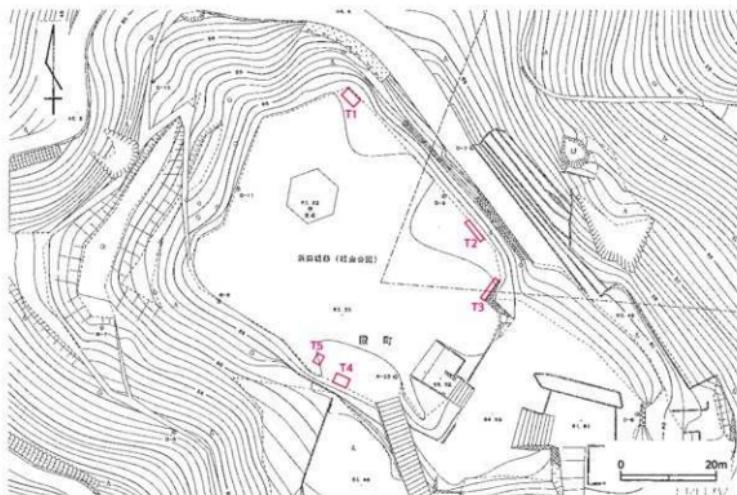
各トレントンチは狭小なため、遺構等の実測作業には釘、水糸、巻尺、コンベックス、下げ振りなどを使用した。土層断面図にはレベル、土層観察には標準土色帖を用いた。写真はデジタルカメラにより撮影した。

第2節 山頂部調査の成果

(1)本丸部の調査

城山公園整備では、本丸縁部において崖面となっている箇所及び比高差のある石垣がある箇所に安全柵を設置する計画となっていた。このため安全柵設置予定箇所である本丸北側縁にT1、東側縁にT2、南東側縁にT3、南側縁にT4及びT5の5箇所のトレンチを設定した。

本丸には、三重櫓・玉蔵・六間長屋・一ノ門の建物が存在していたが、今回のトレンチ設置箇所は、これらの建物付近ではなく、本丸縁部を巡る土塀があった箇所となる。



第6図 本丸部トレンチ配置図 (S=1/1,000)

(ア)本丸トレンチ1

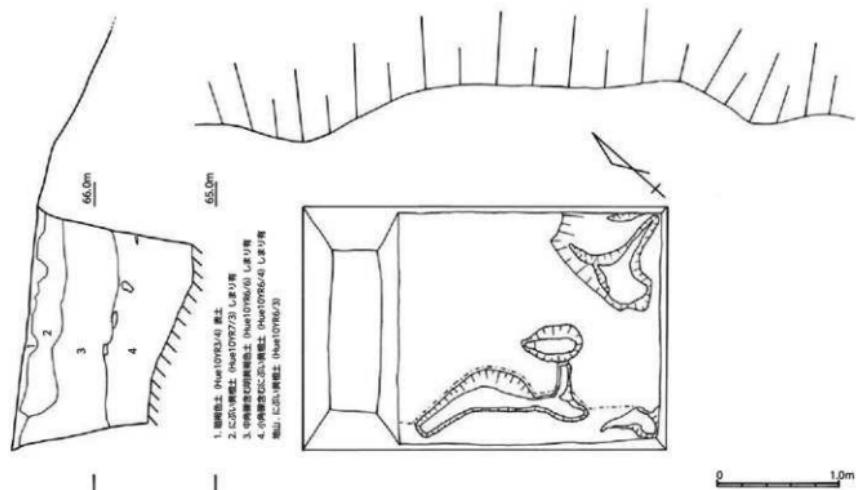
本丸北側縁にあたり、長辺（北西 - 南東方向）3m × 短辺（北東 - 南西方向）2mの調査区を設定した。付近の石垣はすでに崩落し残存していないため、トレンチを設定した場所は本来土塀が設置されていた箇所よりも内側にはいった場所であると推定される。

地表面の標高は66.5～66.7mで、北東方向に向かってさがる。地山は、南西側で65.6m、北東側では65.2mで検出している。表土から3層までは、近世の瓦とともに、石見焼と思われる近代以降の遺物が出土し、近代以後に手が加えられている。標高66.9m付近に4層上面があり、造成土と思われるが、4層からは小破片の瓦4点のみの出土であり。時期は不明である。また遺構は検出されなかった。

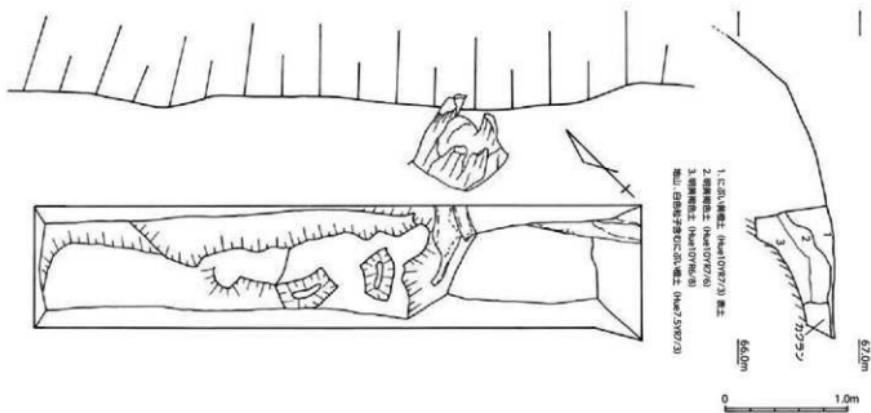
(イ)本丸トレンチ2

本丸東側縁にあたり、長辺（北西 - 南東方向）5m × 短辺（北東 - 南西方向）1mの調査区を設定した。付近の石垣はすでに崩落し残存していないため、トレンチを設定した場所は本来土塀が設置されていた箇所よりも内側にはいった場所であると推定される。

地表面の標高は66.8m程度で、北東方向に向かってさがる。地山は66.5～66.8mで確認された。表土から地山直上の3層までガラスなどが出土し、近代以降の改変を受けている。また遺構は確認されなかった。



第7図 本丸トレント1 平面図・土層図 (S=1/40)



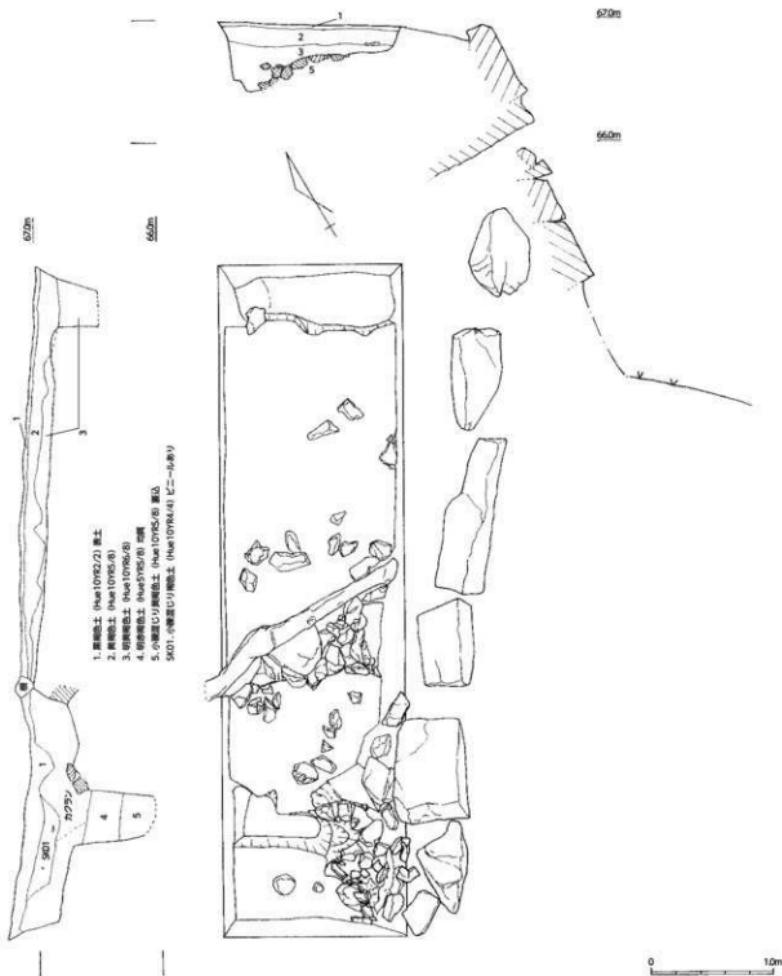
第8図 本丸トレント2 平面図・土層図 (S=1/40)

(ウ)本丸トレント3

本丸南東側縁にあたり、長辺（北東 - 南西方向）5.5m × 短辺（北西 - 南東方向）1.5m の調査区を本丸東面石垣の天端部分に設定した。土壌が設置されていた部分にあたるが、調査前からすでに石垣天端部分より地表面が下がっていた。

地表面の標高は、66.9 ~ 67.2m。表土から3層まではガラスなどが出土し、近代以降の改変を受けている。特にトレント中央の桜の樹根以南は大きな擾乱を受けており、昭和に写された写真を見ると、該当地には樹木が存在しているため、その樹木の倒木による可能性もある。

トレント北側では、3層下に小砾を含む黄褐色土が堆積し、石垣の裏込と判断できる。



第9図 本丸トレント3 平面図・土層図 (S=1/40)

また地山検出を目的にトレント南側を掘り下げた。本来であれば、攪乱を受けていないトレント北側を掘り下げるべきではあるが、石垣の北側は孕みが大きく、また天端石もずれていることから、安全性を考慮して、南側において深い掘り下げを実施した。

表土下約50cm、標高66.6mで4層となるやや均質な明赤褐色土を検出し、5層は小礫を多く含む黄褐色土となる。5層がトレント北側で検出された裏込となり、4層は攪乱土の可能性もある。4層及び5層からの出土遺物はなく、石垣の修繕等の情報は得られなかつた。

なお、遺物は2層中から多く出土し、特にトレントの北側に集中が見られた。

(e)本丸トレント4

本丸南側縁にあたり、長辺（北西・南東方向）3m×短辺（北東・南西方向）2mの調査区。トレント南側には本丸南面石垣の天端石の一部が確認でき、天端石より1m程度離れた箇所に設定した。

地表面の標高は67.3m。表土下に2層となる赤・白色粒子含む黄橙土が堆積し、瓦が大量に出土した。これらの瓦は土壌の瓦の可能性が高く、また完形品も多かつたため出土状況を記録しながら瓦を取り上げた。ただ、同器種の瓦であっても出土位置は様々であり、瓦の出土状況に有意性を見出すことはできなかつた。

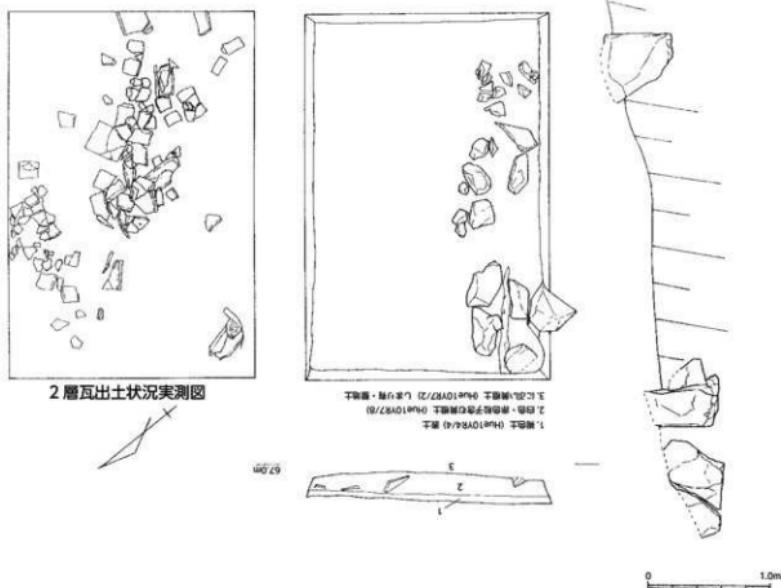
瓦を取り上げると、しまりのあるにぶい黄橙色土（3層）が検出され、近世の整地土と考えられる。掘削は近世遺構面と思われる3層上面で終了したが、遺構は確認されなかつた。

(f)本丸トレント5

本丸南側縁にあたり、長辺（北東・南西方向）2m×短辺（北西・南東方向）1.5mの調査区。本丸トレント4の北側5mに位置する。トレント南側には本丸南面石垣の天端石が見られるが、一部は崩落して崖となっているため、安全に配慮し、天端石より1.5m程度離れた箇所に設定をしている。

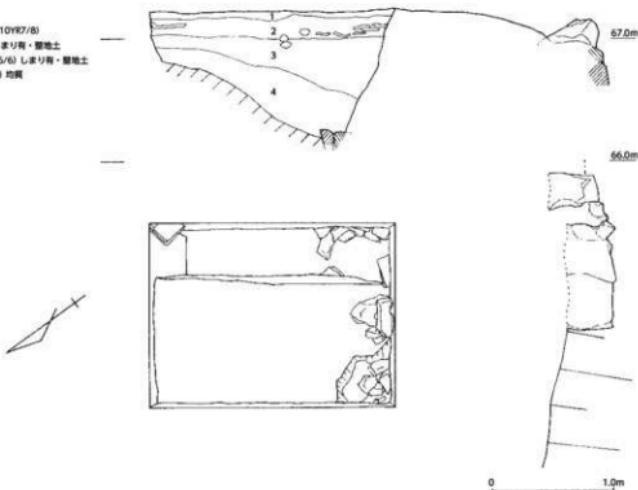
地表面の標高は67.2m。表土下には本丸トレント4と同じく2層となる赤・白色粒子含む黄橙土が堆積し、完形品を含む瓦が多く出土した。瓦を取り上げると、しまりのあるにぶい黄橙色土（3層）が検出された。本トレントにおいては、地山の確認をする目的で、3層以下の掘削を実施した。3層上面はほぼ水平に堆積をしており、石垣側となる南に向かって厚くなる。4層ではしまりのある白色粒子を含む橙色土となり、3層同様に南に向かって厚く堆積する。4層下は均質なしまりのあるにぶい黄橙色土であり地山と判断される。

なお、3層以下からは遺物は出土せず、近世の造成土と思われる。



第10図 本丸トレーンチ4 平面図・土層図 (S=1/40)

- 1.褐色土 (Hue10YR4/4) 良土
- 2.白色・赤色粘子きじ萬能土 (Hue10YR7/6)
- 3.にじく萬能土 (Hue10YR7/2) しまり有・整地土
- 4.白色粘子きじ萬能土 (Hue10YR6/6) しまり有・整地土
地山にじく萬能土 (Hue10YR7/4) 均質



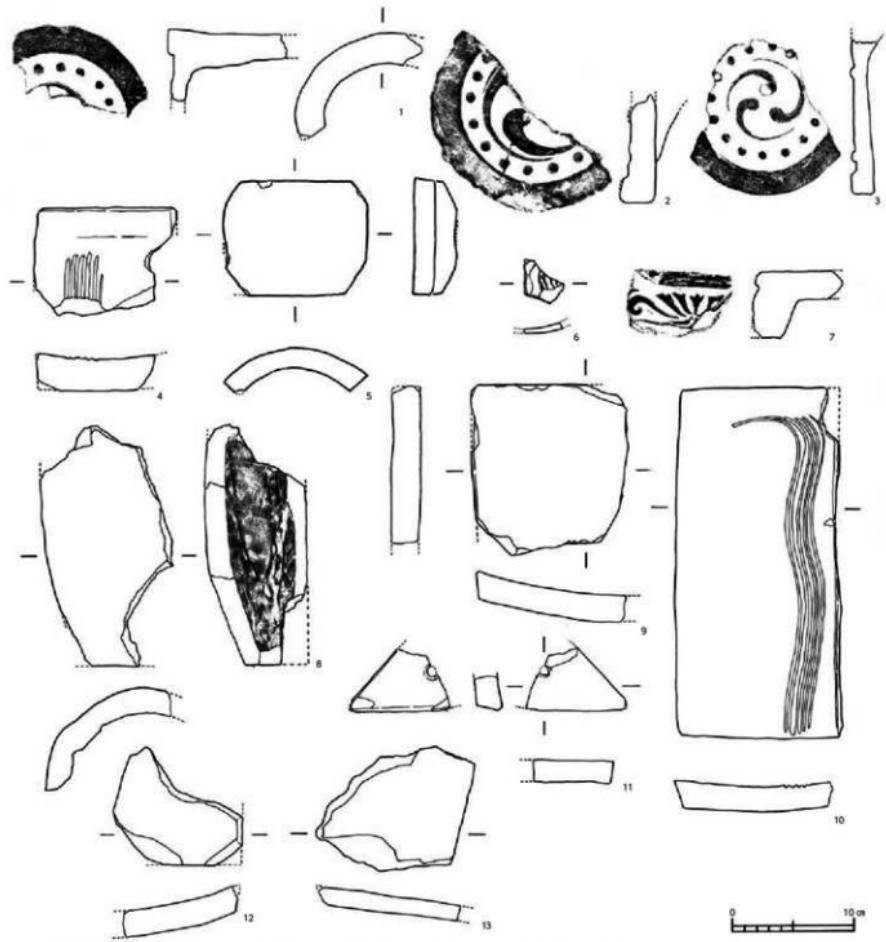
第11図 本丸トレーンチ5 平面図・土層図 (S=1/40)

(2)本丸部の出土遺物

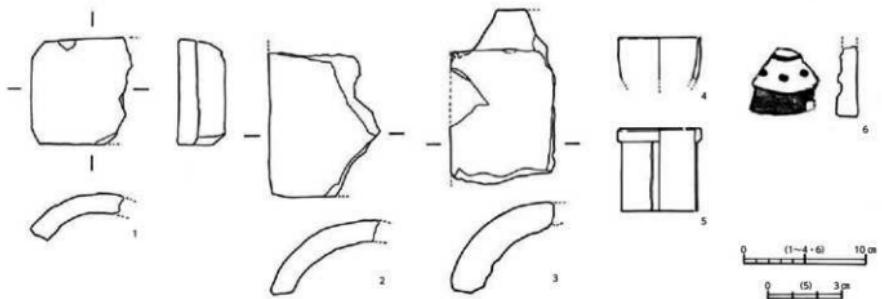
第12図は本丸トレンチ1出土遺物。1は1層出土の軒丸瓦A-3類B(軒瓦の分類は第5章参照)。焼成はやや悪く、胎土には1~2mm程度の長石を含む。瓦頭部上部にやや反りを持つ。2~6は2層出土。2は軒丸瓦A-3類A。筋状の范傷が確認できる。焼成は不良で、胎土には1~2mm程度の長石を含む。3は軒丸瓦A-3類B。瓦当上部は文様区に沿って剥離し、上部にはカキヤブリが確認される。焼成・胎土は1と同様である。4は熨斗瓦。6条1単位の熨斗目がつく。焼成は不良、胎土は粗く5mm程度の白色粒子を含む。厚さは2.6cmあり、他の熨斗瓦に比べると厚手である。5は輪違い。焼成は良く、胎土も密。四隅を切っている。凹面はナデ調整がなされるが、コビキBの痕跡が見える。6は陶器。器種は皿か。外面は露胎、内面は緑釉などで波状模様が描かれている。7~10は3層出土。7は軒平瓦上向五葉文B類A。中心飾りの側葉が直線気味に開く。焼成は普通で、胎土はやや粗く1mm程度の長石が含まれる。8は丸瓦。先端部に向って下がるように歪み、凹面先端の面取りも粗雑な印象を受ける。焼成はよく銀化している。胎土はやや粗く、1~3mm程度の長石を含む。9は平瓦。焼成は普通で胎土は密。厚さは2.5cmあり、やや厚手である。10は割削斗瓦。5条1単位の熨斗目がつく。長さ28.8cm、幅13.0cm、厚さ2.1cmを測る。焼成はやや悪く、胎土には1~2mm程度の長石が含まれる。裏面の剥離部分には、植物痕が確認される。11は器種不明瓦。直径1cmの円孔がある。焼成は普通で、胎土は密である。12・13は4層出土の平瓦。12の焼成はやや悪く、胎土には1~2mm程度の長石を含む。13の焼成は普通で、胎土は密であるが、凹凸の両器面には微細な長石や雲母等が多くあり、きらきらと光る。

第13図は本丸トレンチ2出土遺物。1は1層出土の輪違い。焼成は良く、胎土も密。凸面は不定方向のナデ、凹面は未調整。隅を切り、側部上面は面取りされている。2~5は2層出土。2・3は丸瓦。2は先端部片で焼成は良く、胎土も密。凸面は縦ミガキ、凹面は棒タタキ痕とコビキBが確認できる。3は後端部片で焼成はやや悪く、胎土は密。風化が激しく、凸面調整は不明だが、凹面には吊紐痕とコビキBが確認できる。厚さは2.7cmあり厚手である。4は陶器の小碗。内外面とも白化粧土に青色で模様を描く。在地の製品か。5は銅製容器の口縁部か。厚さ5mm程度の銅板に用い、口縁端部は折り曲げ、筒状部は接合により形作っている。口径3.3cm、高さ3.4cmを測る。6は3層出土の軒丸瓦A-3類B。焼成は普通、胎土はやや粗く1~2mm程度の長石が多く含まれる。

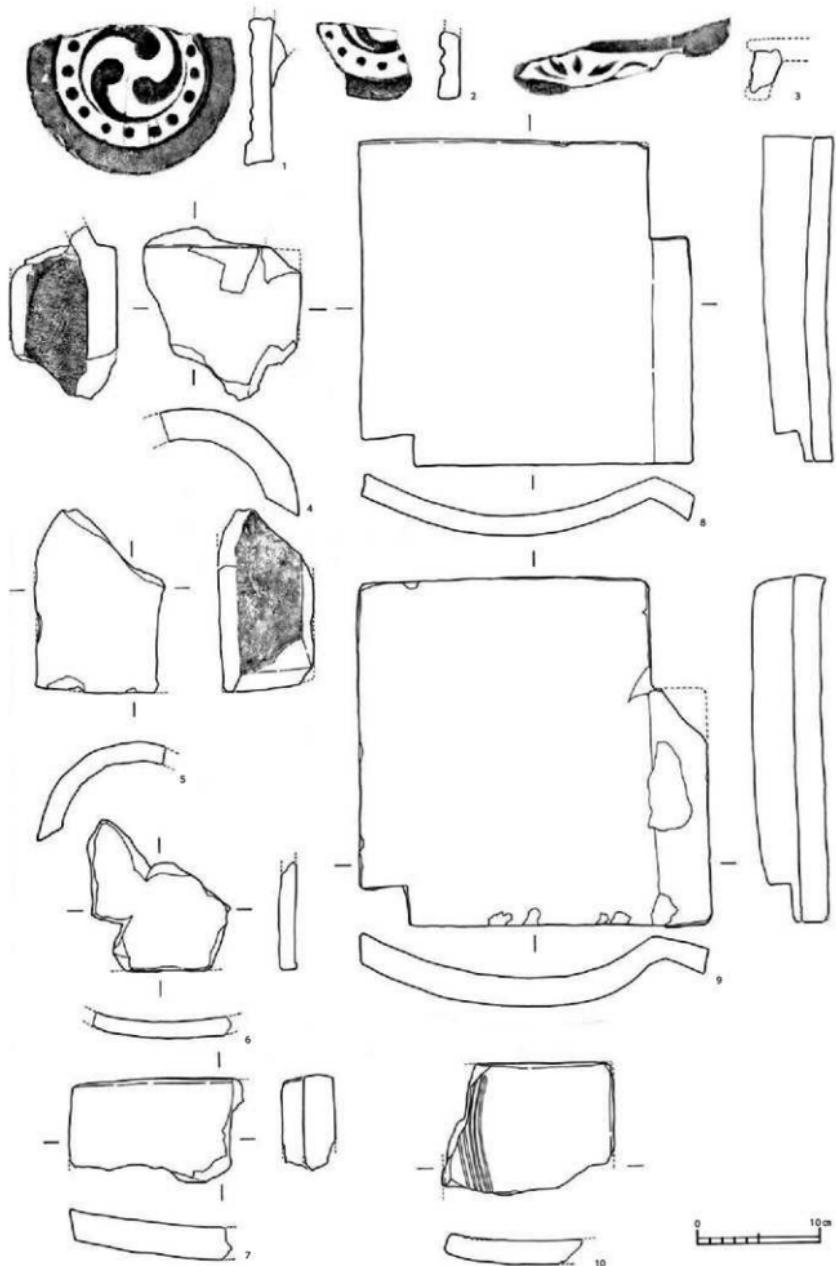
第14・15図は本丸トレンチ3出土遺物。第14図1~10は2層出土遺物。1は軒丸瓦A-3類A。焼成は不良、胎土はやや粗く5mm程度の長石を含む。瓦面に劣化が見られ、珠文は潰れ気味で范傷も多く見られる。2は軒丸瓦A-3類C。焼成はやや不良、胎土は密である。3は上向三葉文の軒平瓦。残存状態は悪く、形式分類は不可。焼成はやや不良で、胎土は粗く5mm程度の長石が含まれる。4は丸瓦。焼成はよく、胎土は密であるが、1~2mm程度の長石が見られる。凸面はミガキにより仕上げられているが、一次調整として格子タタキ痕が確認できる。凹面は未調整でコビキBが見られる。5も丸瓦。焼成は普通で胎土も密である。凸面は縦ミガキ、凹面は未調整。6は平瓦。焼成は普通で、胎土はやや粗く5mm程度の長石が見られる。厚さが1.4cmと薄手。7も平瓦。焼成はやや悪く、胎土もやや粗い。厚さは2.6cmあり厚手である。8・9は左棟瓦。8の方が法量も小さく、薄い。10は熨斗瓦。5条1単位の熨斗目がつく。焼成はやや悪く、胎土は密だが1~2mm程度の長石が見られる。第15図1は2層出土の割削斗瓦。6条1単位の熨斗目を交差させる。焼成はよく、胎土も密である。2~3は3層出土遺物。2は丸瓦で、焼成は普通、胎土はやや粗く1~4mm程度の長石を含む。凸面は縦ミガキにより仕上げられるが、一次調整の格子タタキ痕が確認できる。凹面は未調整で、吊紐痕がある。3は左棟瓦。4は熨斗瓦で、焼成はやや悪く、胎土もやや粗い。



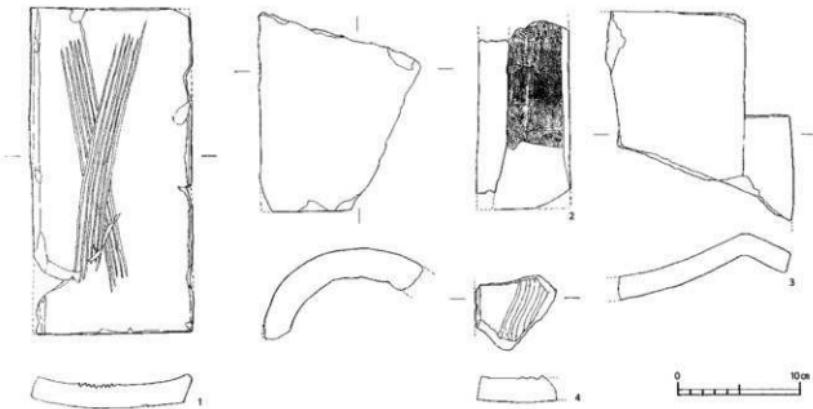
第12図 本丸トレーンチ1 出土遺物実測図 ($S=1/4$)



第13図 本丸トレーンチ2 出土遺物実測図 ($S=1/4$) ($S=1/2$)



第14図 本丸トレンチ3 出土遺物実測図1 (S=1/4)



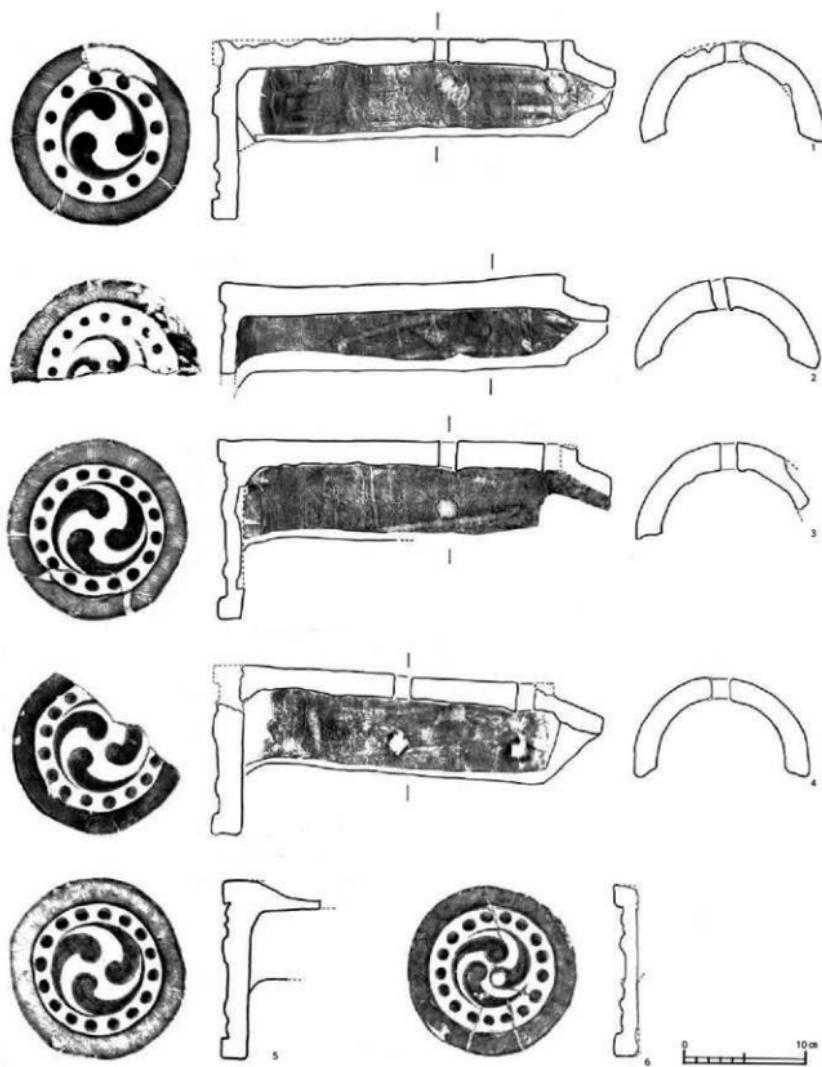
第15図 本丸トレレンチ3 出土遺物実測図2 (S=1/4)

第16～19図は本丸トレレンチ4の2層出土遺物。第16図1～6は軒丸瓦。1はA-2類C。焼成は良く、胎土も密。瓦当にはキラコが確認され、瓦頭部と丸瓦部は水平に接合される。釘孔は2箇所にある。凸面は縦ミガキ後横ナデ、凹面は後側に棒タタキが見られる。2はA-3類B。焼成はやや悪く、胎土は粗く5mm程度の長石が含まれる。瓦頭部上面にやや反りを持つ。凸面は縦ミガキ、凹面は未調整で細い吊紐痕とコビキBが見える。釘孔は1箇所のみ。3・4はA-3類F。焼成は良く、胎土も密。凸面は縦ミガキ、凹面の後側は幅3cm程度の板状工具による縦方向のナデが見られ、前側は未調整でコビキB痕が見える。釘孔は2箇所にある。5もA-3類F。焼成は良く、胎土も密。瓦当にはキラコが確認できる。6はA-4類A。焼成は良く、胎土も密。瓦当裏面上半にカキヤブリがある。

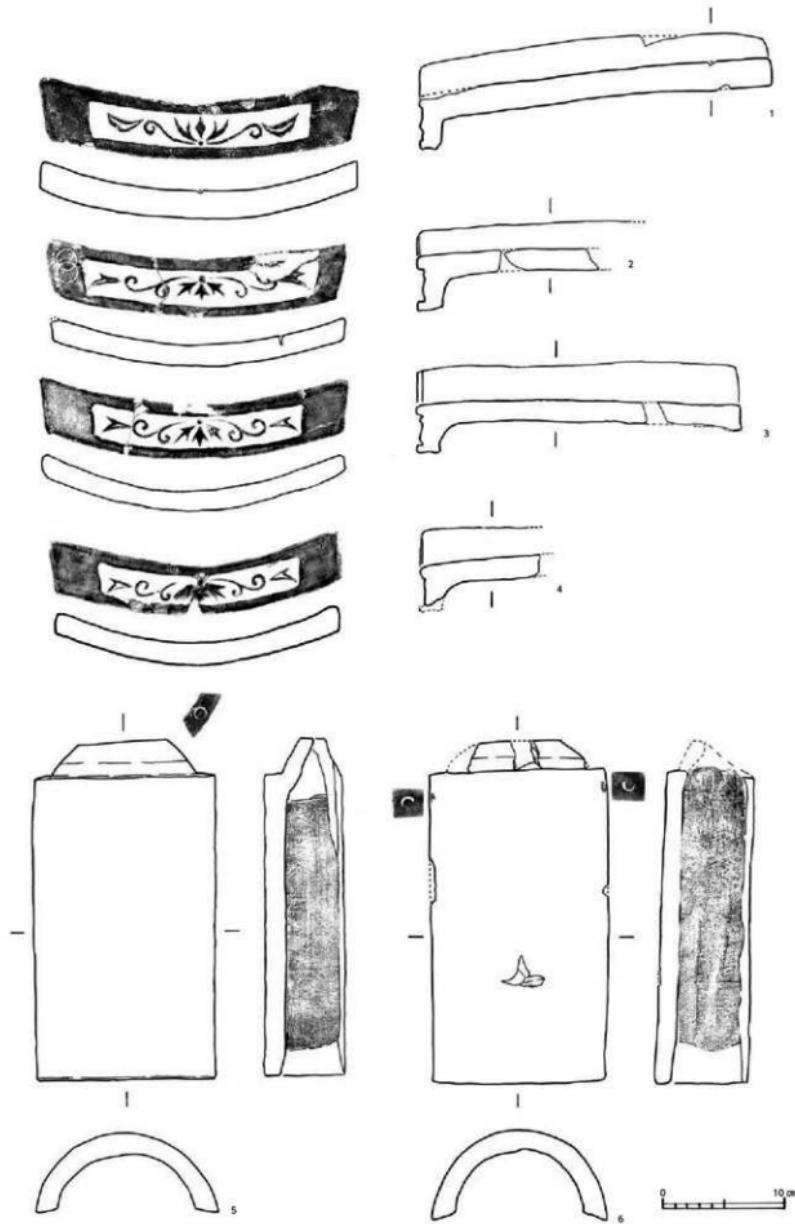
第17図1～4は軒平瓦。1は上向三葉文B類A。焼成はやや悪く軟質、胎土はやや粗く1～3mm程度の長石が含まれる。2は下向三葉文B類A。焼成は普通で、胎土は密。瓦当にはキラコが確認できる。瓦当側面に輪違文が刻印される。3・4は下向三葉文B類B。焼成は普通で、胎土は密。4の瓦当中心飾りは浅く、瓦筋の摩耗がうかがえる。5・6は丸瓦。5の焼成は良好で銀化、胎土も密。凸面は縦ミガキ後に横ナデ。段部に輪文の刻印が1つ押される。凹面は板状工具痕が確認される。6の焼成は良好で銀化、胎土も密である。凸面は縦ミガキ後にナデがはいる。後部側面に半円状の刻印が2つ押される。凹面は板状工具が確認される。吊紐痕はない。段部は別粘土で作られ、接合されている。

第18図1・2も丸瓦。1の焼成は良く、胎土も密。凸面は縦ミガキ。凹面は棒タタキと吊紐痕が確認できる。2の焼成は良く、胎土も密。凸面は格子タタキ後縦ミガキ。凹面は未調整で吊紐痕が見られる。3・4は平瓦。3の焼成は不良で、胎土は粗く1～2mm程度の長石が見られ、10mm大の白色粒子もある。中央に長辺に平行した1条の凹線があり、熨斗瓦利用時の分割線にも見える。4の焼成も不良で、胎土も粗く1～2mm程度の長石が見られる。風化が激しく調整は不明。

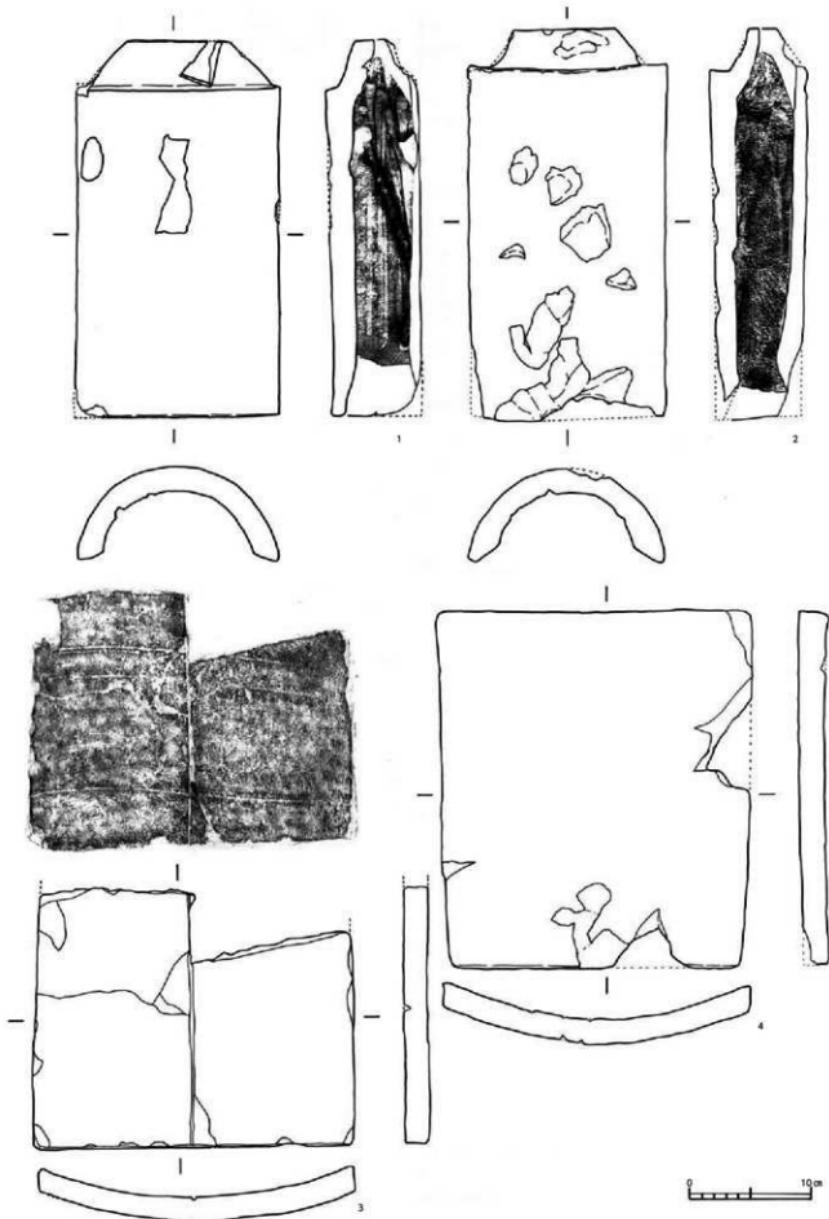
第19図1も平瓦。焼成はよく、胎土も密である。凸面は未調整と思われ、凹面の周囲は四辺に沿ったナデ、中央部は不定方向のナデで仕上げられている。2・3は割熨斗瓦。2は6条1単位の熨斗目が入り、長さ23.5cm、幅10.6cm。焼成は良く、胎土も密である。3はヘラ状工具で長軸方向に2条、短軸方向に3条の熨斗目が入り、長さ27.4cm、幅13.5cm。焼成は良く、胎土も密。4・5は輪違い。4の



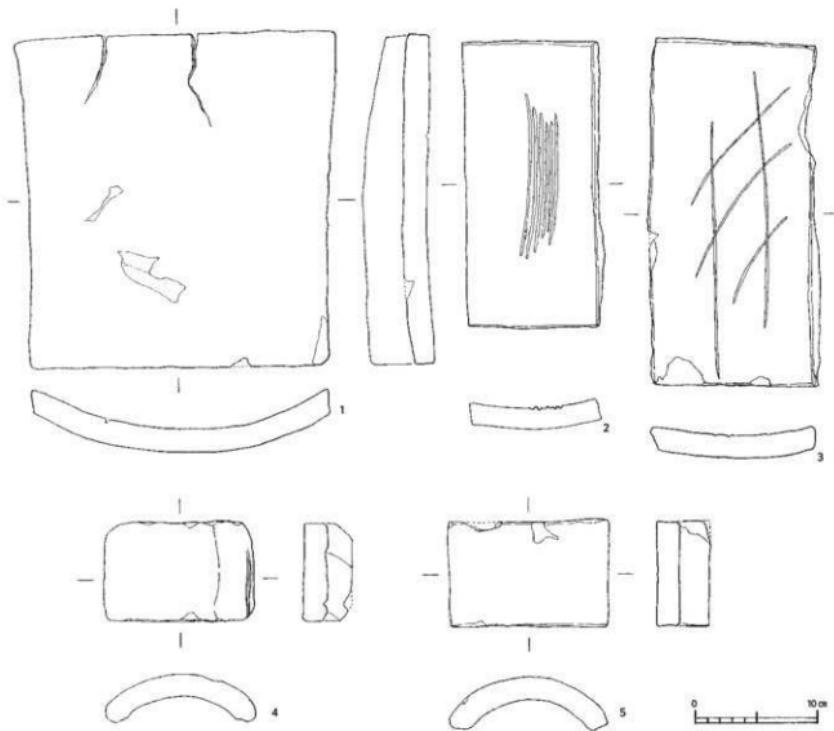
第16図 本丸トレーンチ4 出土遺物実測図1 (S=1/4)



第17図 本丸トレンチ4 出土遺物実測図2 (S=1/4)



第18図 本丸トレンチ4 出土遺物実測図3 (S=1/4)

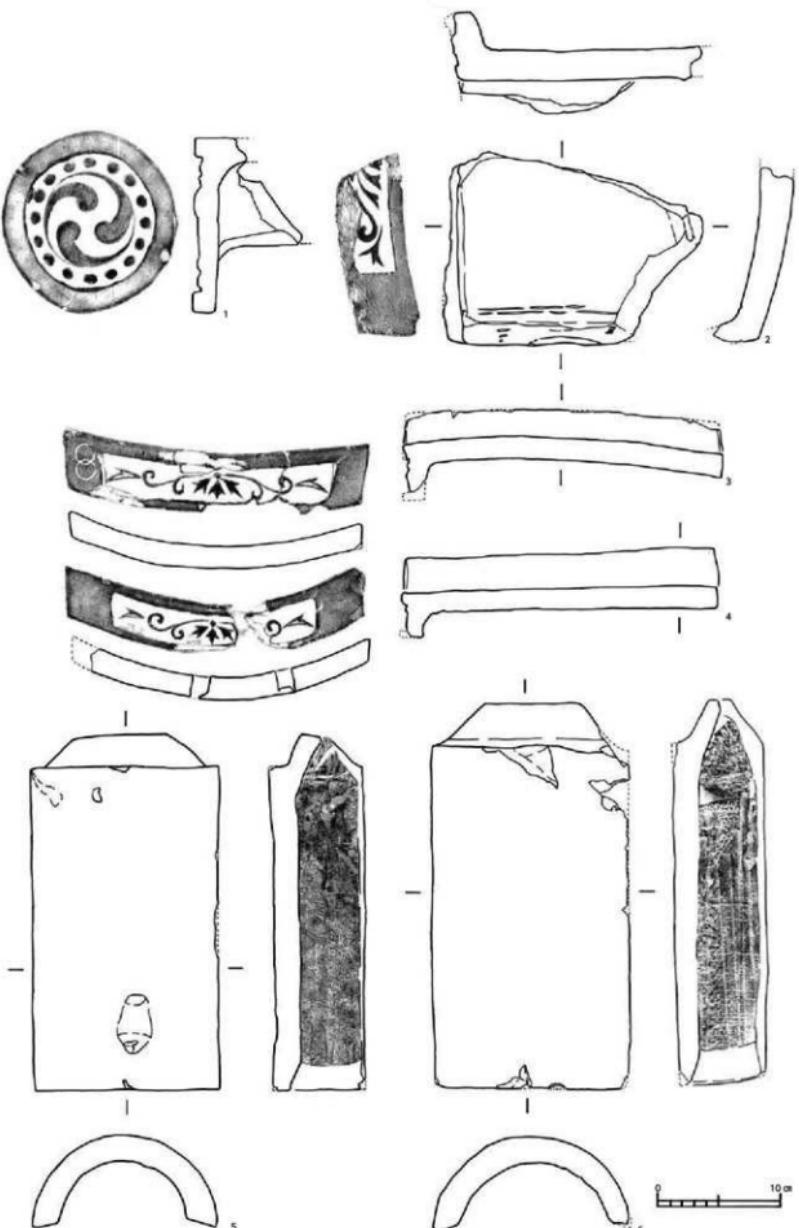


第19図 本丸トレント4 出土遺物実測図4 (S=1/4)

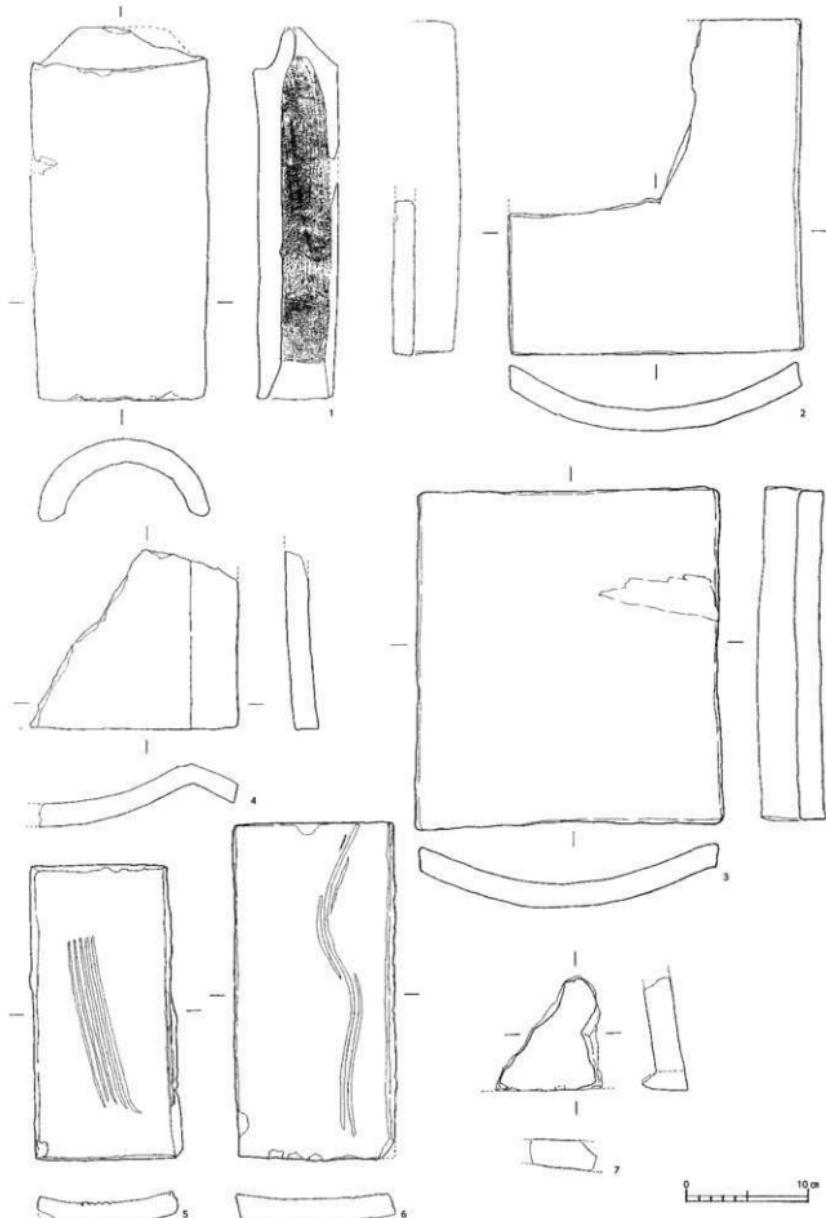
焼成はやや悪く、胎土もやや粗い。凸面調整は風化により不明、凹面の周縁は面取りをしているが、中央は未調整で吊紐痕が確認できる。四隅を切っている。5の焼成は良く、胎土も密である。凸面はナデ、凹面は未調整でコビキBが見える。四隅も切らずに、丸瓦を輪切りにしたような形状である。

第20・21図は本丸トレント5の2層出土遺物。第20図1は軒丸瓦A-3類F。焼成は良く、胎土も密。瓦当にはキラコが確認できる。2~4は軒平瓦。2は上向五葉文A類A。焼成は普通で、胎土はやや粗く1~2mm程度の長石を含む。左側部が立ち上がり、また凹面中央にも突起が見られるため、水切突起と考えられる。3は下向三葉文B類Aで瓦当側区に輪違文の刻印がある。焼成は普通で胎土は密。瓦当にはキラコがつく。4は下向三葉文B類B。焼成は良く、胎土も密。釘孔は2箇所にあるが、ともにきちんと貫通はしていない。瓦当にはキラコがつく。5・6は丸瓦。5の焼成は良く、胎土も密。凸面調整は継ミガキ、凹面は未調整でコビキBと吊紐痕が見える。6の焼成も良く、胎土も密。凸面調整は継ミガキ、凹面は一部で棒タタキがあり、コビキBと吊紐痕も確認できる。

第21図1も丸瓦。焼成は良く、胎土はやや粗く5mm程度の長石も含む。凸面調整は継ミガキ、凹面は未調整でコビキBと吊紐痕が見える。側面観はやや反りをもつ。2・3は平瓦。2・3ともに焼成は良く、胎土も密。凸面は未調整、凹面の周縁は四辺に沿ったナデ、中央部は不定方向のナデがなされている。4は左棟瓦。焼成は普通で胎土は密である。5・6は割熨斗瓦。5は5条1単位の熨斗目。



第 20 図 本丸トレンチ 5 出土遺物実測図 1 (S=1/4)



第21図 本丸トレンチ5 出土遺物実測図2 (S=1/4)

焼成は良く、胎土も密である。6は3条1単位の熨斗目と思われるが、熨斗目は浅く、ところどころで途切れている。焼成は良く、胎土も密である。7は器種不明瓦。厚さ2.3cmの板状の瓦に、箱式状に側面を接合させている。焼成はやや悪く、胎土もやや粗く2mm以下の長石を含む。

(3)本丸部調査の小結

本丸部では5箇所のトレンチを設定して調査を実施したが、想定された土壙に関する遺構は検出されなかった。トレンチ1とトレンチ2は調査区設置箇所が本丸縁より内側に入った箇所であったが、表土から0.7m程度は近代以降の改変を受けていることを確認した。トレンチ1に関しては、造成土と考えられる4層から、近世の瓦のみが4点出土した。どれも小破片で時期決定はできないが、4層に近代以降の遺物が含まれないのであれば、本丸に瓦が葺かれた後に造成されたことになり、江戸時代における本丸の改変も視野に入る必要がある。今回は狭い調査区であり、断定はできないため、今後の課題となる。トレンチ3に関しては、表土から30cm程度下で裏込を検出し、裏込以上は近代以降の改変を受けていることを確認した。トレンチ4とトレンチ5では、標高約67.0mに近世の整地土となる3層上面を検出したが、土壙に関わる遺構は検出されなかった。

また、遺物に関してはトレンチ3～5で一定量の瓦が出土した。各トレンチにおける器種別点数及び重量比は下表となる。

表4 本丸T3～5出土瓦器種別点数

点数	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦	棟瓦	熨斗瓦	輪違瓦	総点数
本丸T3	3	5	156	253	36	21	1	475
本丸T4	8	6	91	88	1	40	4	238
本丸T5	3	3	94	167	3	22	1	293

表5 本丸T3～5出土瓦器種別重量比

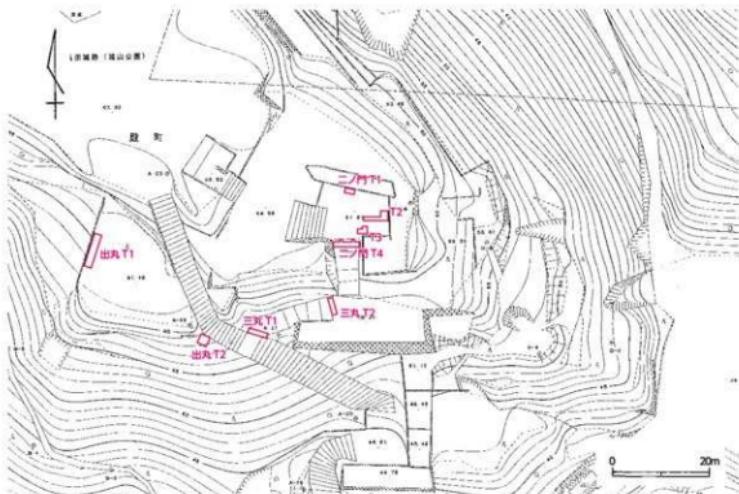
重量比	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦	棟瓦	熨斗瓦	輪違瓦	総重量(kg)
本丸T3	0.86%	24.5%	18.48%	39.02%	32.97%	6.06%	0.16%	74.24
本丸T4	8.34%	6.85%	33.07%	30.79%	29.4%	17.00%	10.1%	99.32
本丸T5	2.14%	3.03%	39.59%	30.97%	3.00%	21.01%	0.26%	62.64

全トレンチの器種構成は同じであるが、各器種の出土点数及び重量比に違いが見られる。重量比でみると、違いが顕著なのは棟瓦であり、トレンチ3では32.97%であるのに対して、トレンチ4及びトレンチ5では2.94%及び3.00%にとどまる。トレンチ3は本丸南東側、トレンチ4及びトレンチ5は南側の土壙付近の調査区となり、ある程度土壙に葺かれた瓦の状況を示していると思われる。このことを鑑みると、本丸南東側の土壙はいつかの時点で棟瓦葺きが導入された可能性が考えられる。また浜田城跡では、雁振瓦の出土がなく、棟瓦とともに丸瓦が出土していることから、丸瓦を雁振瓦の用途として利用していたと思われる。

(4)二ノ門・三丸

城山公園整備では、三丸から二ノ門へいたる遊歩道を土系舗装する計画となっていた。このため、三丸では舗装予定路面に2箇所、二ノ門では4箇所のトレンチを設定した。

三丸は二ノ門へ至る通路となるが、浜田城跡には精確な城内の平面図がないため、江戸時代の通路に階段があったかは不明である。二ノ門に関しては、「濱田御城内外浦町惣間数書付」に「一 二ノ門 長サ二十九間 幅サ二間三間四間<四間は四方か> 門見附外形石垣高サ二間半 所ニヨリ壹間半」とあり、ほとんどの絵図に入母屋造りの渡門の形式で描かれている。



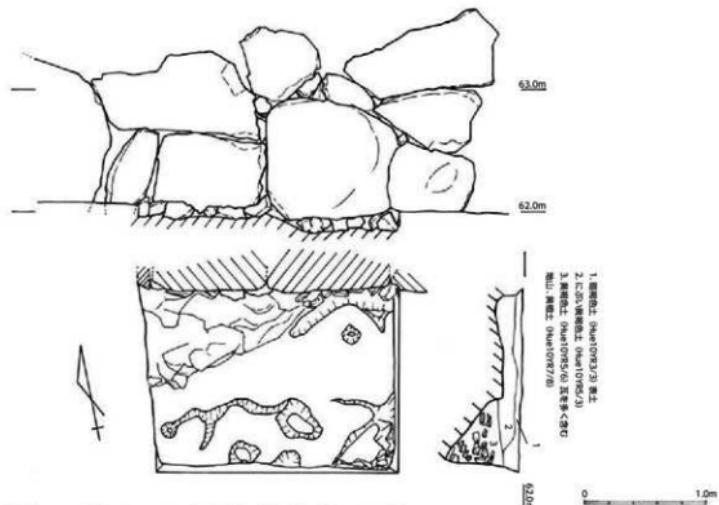
第22図 ニノ門・三丸・出丸トレンチ配置図 ($S = 1/1,000$)

(ア)二ノ門トレンチ1

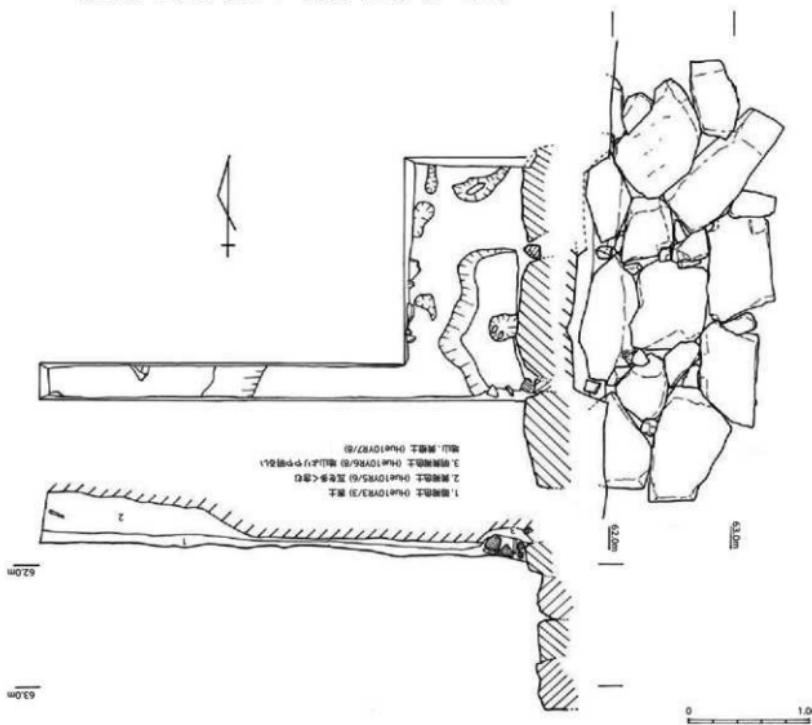
二ノ門外形内の北側石垣裾部にあたり、長辺（東西）2m × 短辺（南北）15mの調査区を設定した。トレンチ北側の石垣裾では表土下すぐに地山である岩盤及び風化礫層が確認され、石垣は岩盤上に小さな根石で水平を保ち、その上に築石を積み上げている。石垣から離れた場所は、表土下にガラスを含む2層（にぶい黄褐色土）が10cm程度堆積する。トレンチ北半の2層下は地山であるが、南側は地山が落ち込み、3層となる瓦を多く含む黄褐色土が堆積する。なお、3層は瓦のみの出土であるため、時期の特定はできていない。

(イ)二ノ門トレンチ2

二ノ門外形内の東側石垣裾部にあたり、長辺（南北）2m × 短辺（東西）1mの調査区を設定した。その後、二ノ門トレンチ1で確認された地山の落ち込みの延長を確認するため、トレンチ南側に3m × 0.3mのサブトレンチを追加した。石垣裾部に関しては、表土下25cm程度で地山である風化礫層が確認された。二ノ門トレンチ1で確認されたような明確な根石は確認されなかったが、石垣から50cm程度離れた地点から、地山をわずかに掘り込み築石を積み上げている。石垣から離れた場所は、表土下に瓦を多く含む2層（黄褐色土）が堆積し、地山は西側に向って下がっていく。



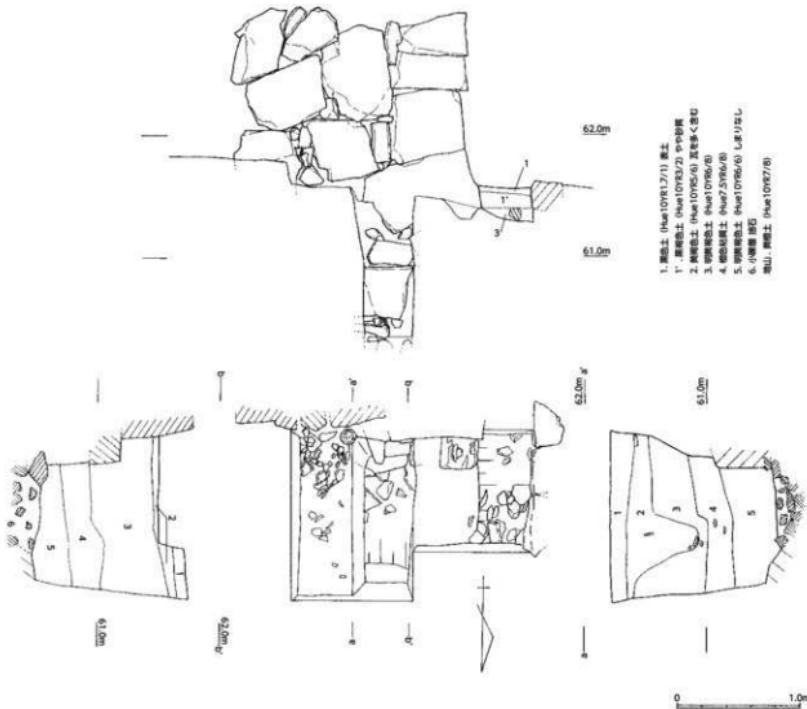
第23図 ニノ門トレンチ1 平面図・土層図 ($S = 1/40$)



第24図 ニノ門トレンチ2 平面図・土層図 ($S = 1/40$)

(x)二ノ門トレントンチ3

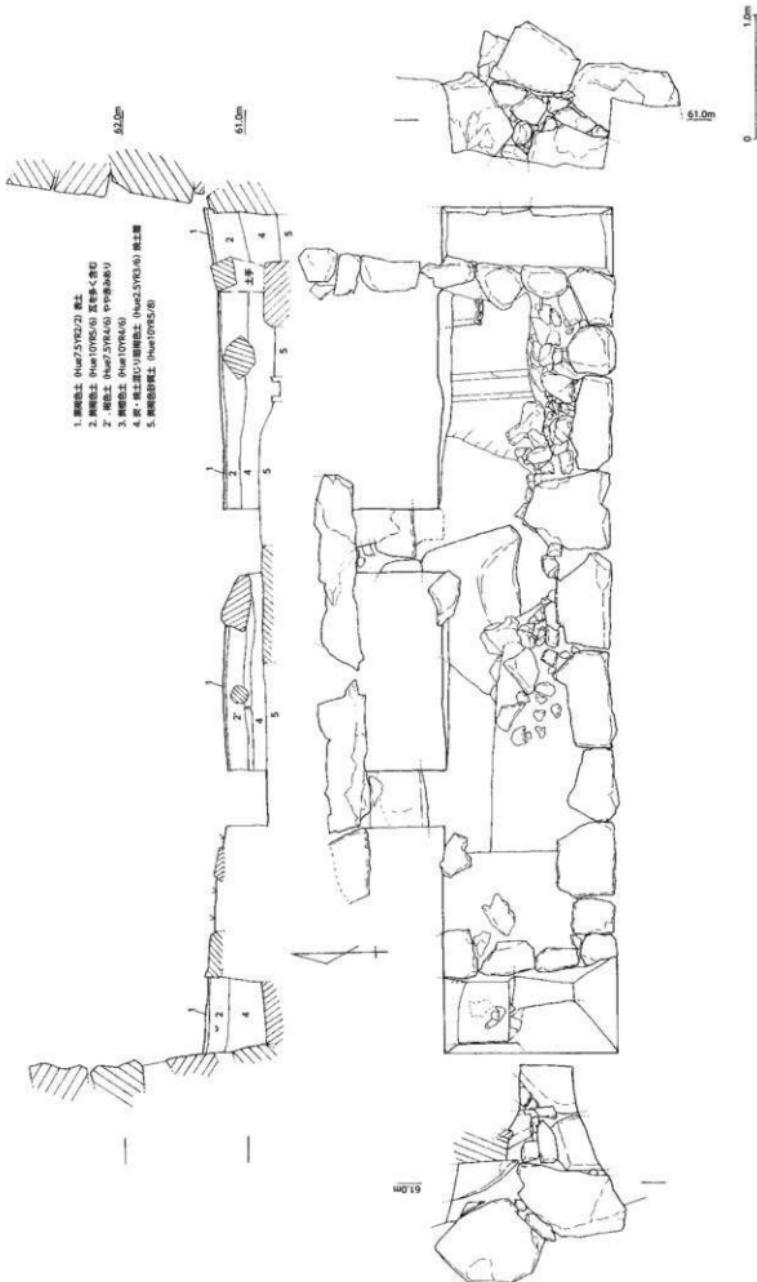
二ノ門外形内の南側石垣裾基部にあたり、長辺（東西）2m × 短辺（南北）1mの調査区を設定した。その後、地山を確認するため、トレントンチ北側に1m × 0.4mのサブトレントンチを追加した。石垣裾部では、二ノ門トレントンチ1・トレントンチ2とは異なり、表土下すぐには地山は検出されず、地表下1.3m程度で確認された。地山のレベルは二ノ門トレントンチ1及びトレントンチ2と比べ1.3m程度低いため、石垣を築くためには造成が必要となり、小角礫による捨石を入れた後に根石を据え、築石を積み上げている。捨石直上の5層から3層は造成土と考えられるが、4層（橙色粘質土）及び3層（明黄褐色土）からは瓦の細片が出土しており、近世のいくつかの段階で石垣の修理が行われている可能性がある。表土下の2層は二ノ門トレントンチ1及びトレントンチ2でも確認された瓦を多く含む黄褐色土が堆積する。



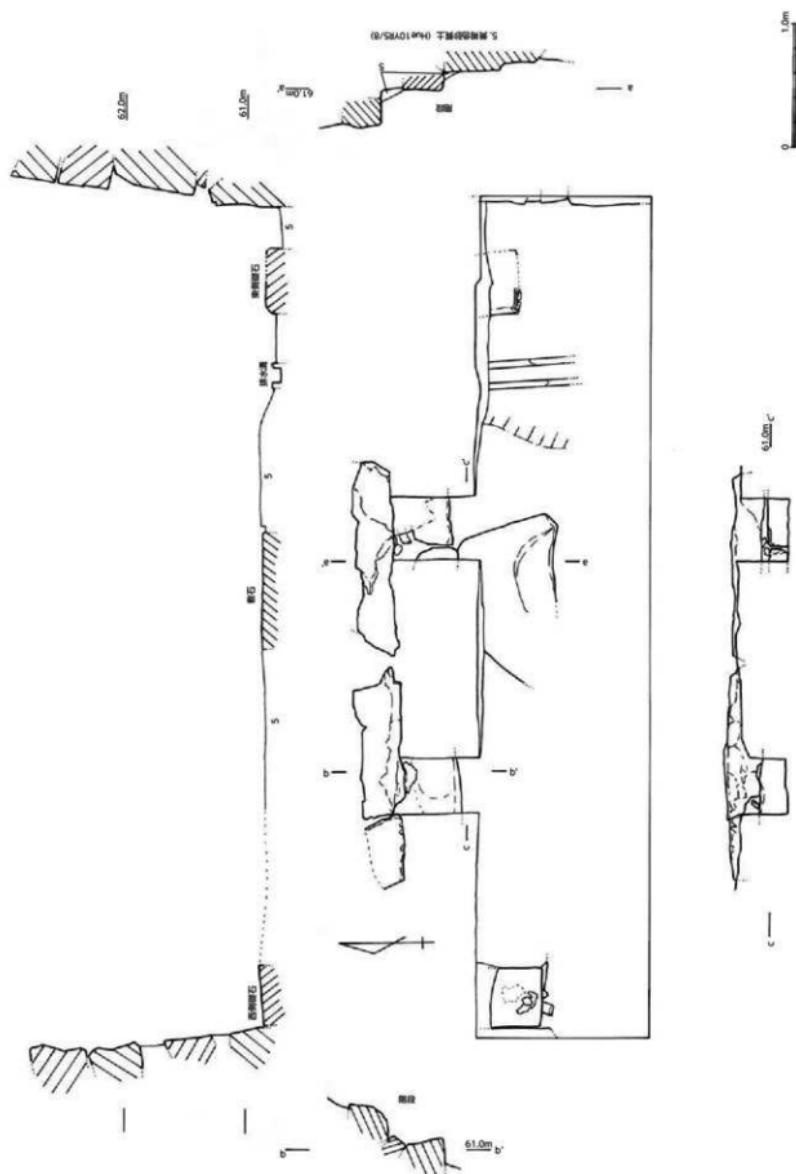
第25図 二ノ門トレントンチ3 平面図・土層図 (S = 1/40)

(x)二ノ門トレントンチ4

二ノ門が設置されていた石垣間に長辺（東西）6m × 短辺（南北）1.4mの調査区を設定した。その後、段石遺構が確認されたため、トレントンチ北側に0.7m × 0.4mのサブトレントンチを2箇所追加した。表土下に小・中疊・瓦を含む黄褐色土（2層）が堆積し、トレントンチ西側の一部に黄褐色土（3層）が見られる。これらの下層には炭・被熱瓦・被熱陶器を含む焼土層（4層）が堆積する。4層出土の陶器の年代は19世紀後半にあたるため、第二次幕末戦争の浜田城落城時に被熱したものと



第26図 ニノ門トレーンチ4 平面図・土層図 (S = 1/40)



第27図 ニノ門トレンチ4 葬末遺構図 ($S = 1/40$)

判断できる。4層下は幕末の遺構面である黄褐色砂質土（5層）となる。5層上面で門の礎石2基、階段、排水溝、敷石を検出した。礎石の規模は、階段との関係を考えると縦50cm×横50cm程度と推定できる。西側の礎石は石垣と接しているが、東側は石垣から40cm離れた位置に設置してある。なお、西側の礎石上には炭化した柱根が遺存しており、松材が柱として利用されている。礎石上面のレベルは、西側・東側とも60.85mで揃っている。階段はサブレンチの2箇所で確認し、幕末の遺構面からの蹴上は約20cmとなる。1段目を上ると50cm程度のステップがあり、再び約20cmの蹴上がある2段目となる。なお、2段目の上面は調査前の地表面に露出をしていた。排水溝はトレンチ中央より東側で検出され、排水溝周辺の5層上面レベルは約8cm下がっている。排水溝は石材を刎りぬいて作られており、外幅22cm、内幅12cm、深さ7cm、検出した長さは約70cmを測る。検出した範囲では、排水溝の石材の継ぎ目は見えないため、長さ70cm以上の石材により作られている。敷石はトレンチ中央で検出された横150cm、縦80cm程度の平面台形状の石材である。上面には石材加工のノミ痕が確認でき、石材の南側は半円状に抉られた形状をしている。上面のレベルは60.86mと両礎石と揃うが、礎石としては長大であり、また門の中央に位置することから、敷石の性格を想定している。

トレンチ西側の石垣沿いでは5層以下の掘削を実施し、6層となる明黄褐色土を確認した。6層からは遺物がなく、また色調等も地山に似るが、掘削停止面以下も石垣の築石が続くため、整地土となる。

二ノ門は文献によると二間三間四方とある。現場状況や同文献の他施設の法量の記載順を考えると、奥行き（南北方向）2間、幅（東西方向）3間と推定できる。5層上面で検出した礎石は、背後に階段が検出されたことから、二ノ門裏側の礎石列にあたり、櫓を支える柱を載せる用途と推定できる。また、文献や絵図からは小門の存否は不明であるが、排水溝の位置を考えると、小門がある構造であれば、大門が西側、小門が東側にあったと推察される。

なお、調査により現在利用している階段は近代以降に新しく作られた階段であることが判明した。また表側となる礎石に関しては、中央部では今回検出した裏側の礎石上面レベルと同じレベルの場所がなく、削平を受けている可能性があり、石垣沿いでは同レベルの場所があるため、まだ遺存している可能性がある。

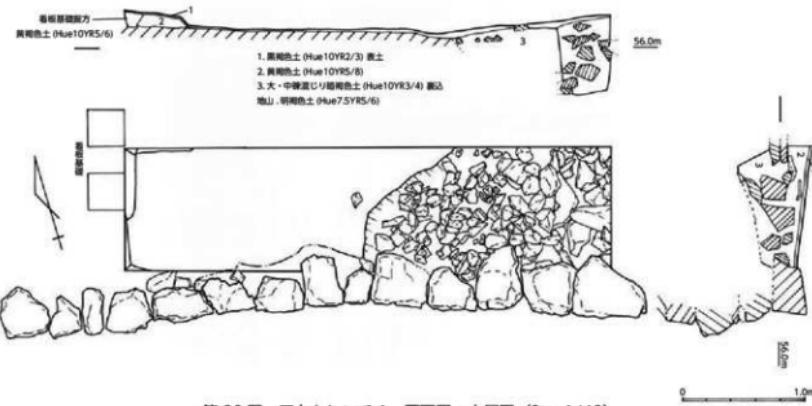
トレンチの埋め戻しには、遺構面保護のために砂を敷いている。

(f)三丸トレンチ1

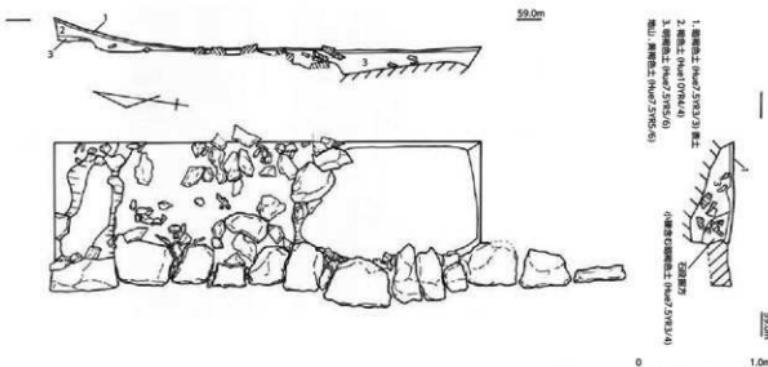
本丸まで続く近代以降に作られたと考えられている石段から二ノ門方向へ折れる箇所に、長辺（東西）4m×短辺（南北）1mの調査区を設定した。トレンチ南側には東に向かって高くなる水路を兼ねた石垣があるが、近世の石垣補修図に記載はない。トレンチ西側は表土直下に地山を確認した。削平を受けているか不明であるが、遺構は確認されなかった。東側は表土直下から小角礫の堆積が見られ、石垣の裏込となる。ただ隣接する近世の石垣のラインとは合わないため、近代以降に築かれたものと推定される。なお、裏込からは、江戸後期以降の軒桟瓦・棟瓦などが出土し、軒桟瓦の文様をみると、後述する出丸調査区で主に出土している文様であり、明治30年代に陸軍歩兵第二十一連隊が出丸石垣を撤去した際の石材などを用いて、該当石垣を築いている可能性が高いと判断される。

(カ)三丸トレーニチ 2

二ノ門前面の平坦面へ上がる階段背後に長辺（南北）3.5m × 短辺（東西）1m の調査区を設定した。トレーニチ南側は表土下に小砾を含む3層明褐色土が堆積する。北側は表土下に北側法面流土の2層褐色土が堆積し、以下が3層となる。3層は瓦を含む整地土で、3層下は黄褐色土の地山となり、なだらかに西に向かい傾斜する。階段踏石は3層上面から掘り込まれ据えられており、掘方埋土からも瓦が出土する。少なくとも築城期の階段ではなく、3層や掘方から出土した瓦には棧瓦や銀化したもののが見受けられることから、週っても江戸後期以降の阶段である。



第28図 三丸トレーニチ1 平面図・土層図 (S = 1/40)



第29図 三丸トレーニチ2 平面図・土層図 (S = 1/40)

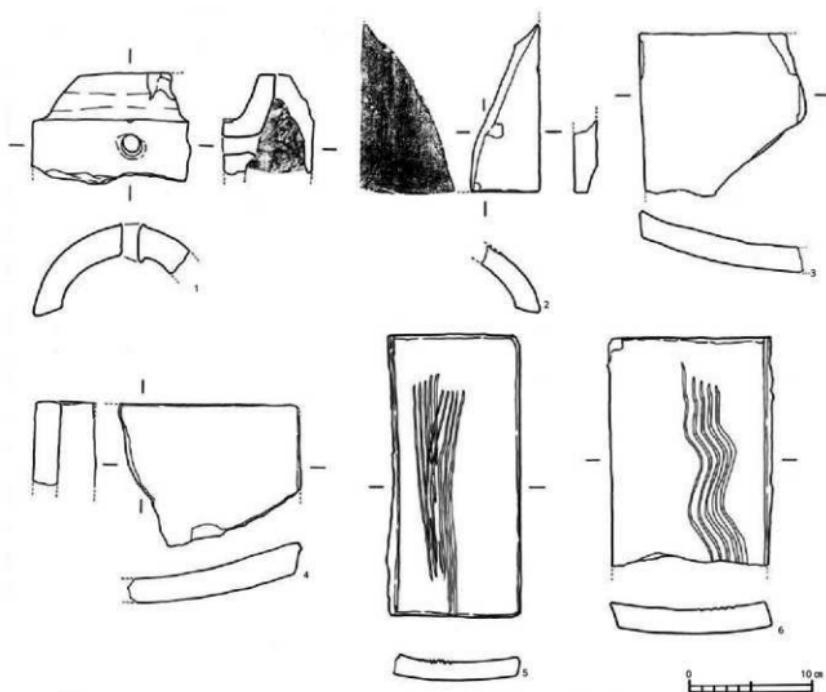
(5)二ノ門・三丸の出土遺物

第30図は二ノ門トレンチ1の3層出土遺物。1と2は丸瓦。1は焼成は良く、胎土も密。凸面は縦ミガキ、凹面は板状工具痕が見える。2も焼成は良く銀化し、胎土はやや粗く1~2mm程度の黒色粒子が含まれる。側辺端部には線状痕がある。凸面は縦ミガキ後ナデか、凹面には目立った調整はみられない。3と4は平瓦。3の焼成はやや悪く軟質。胎土はやや粗く、1~2mm程度の長石を含む。風化のため調整は不明。4の焼成は不良で、胎土も粗く、1~3mm程度の長石などを多く含み、中には10mm大の長石も含む。風化のため調整は不明だが、広端部をわずかに面取りしている。5と6は割熨斗瓦。5は5条1単位の熨斗目をわずかに交差させる。焼成は良く銀化し、胎土も密。6は5条1単位の熨斗目が入り、焼成は良く銀化し、胎土はやや粗く1~2mm程度の黒色粒子が含まれ、練りが甘いためか層状になる。

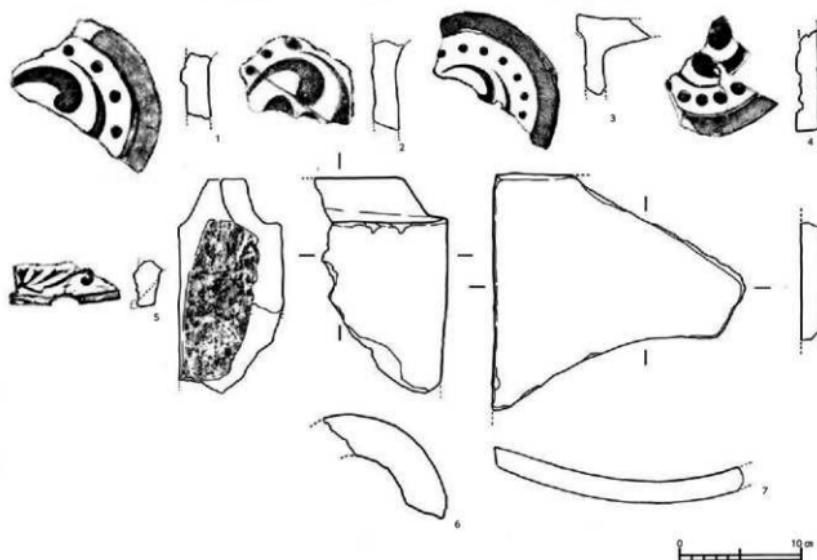
第31図は二ノ門トレンチ2の2層出土遺物。1~4は軒丸瓦。1はA-2類A。焼成はやや悪く、胎土もやや粗く1~2mm程度の長石を含む。2はA-3類A。焼成は不良で軟質、胎土もやや粗く1~2mm程度の長石を含み、中には5mm程度の長石も含む。范傷はかなり確認できる。3はA-3類B。焼成はやや悪く、胎土も粗く1~3mm程度の長石を多く含む。瓦当上部には反りを持つ。丸瓦部凸面は縦ミガキか。凹面は棒タタキ状の痕跡がみえる。4はA-4類A。焼成は良く銀化し、胎土も密。瓦筒の摩耗が進み、珠文の輪郭も不整圓となっている。5は軒平瓦の上向五葉文B類B。焼成はやや悪く、胎土は密。瓦頭部下半に、粘土の継ぎ目が見られ、瓦当裏面には対応するようなナデが見られる。6は丸瓦。焼成は良く、胎土はやや粗く10mm程度大の褐色粒子が見られる。凸面は縦ミガキ、凹面は未調整。厚さが3.3cmと厚手である。7は平瓦。焼成はやや悪く軟質、胎土は密。凸面の調整は風化のため不明で、凹面は幅3cm程度の板状のナデが見られる。

第32図は二ノ門トレンチ3出土遺物。1~3は1層出土。1・2は軒丸瓦。1はA-4類A。焼成は良く、胎土はやや粗く1~2mm程度の長石を含む。瓦当裏面の外縁は強いナデが見られる。2はB-5類A。焼成は良く銀化し、胎土も密。瓦当にはキラコが確認できる。3は平瓦。二次被熱を受けており、凸面・凹面とも燃しの黒色が退色し、灰白色となっている。調整は風化のため不明。4~6は2層出土。4・5は軒丸瓦。4はA-3類A。焼成は不良で軟質、胎土は密。范傷はかなり確認できる。5はA-3類B。焼成は悪く、胎土も粗く1~2mm程度の長石を多く含む。文様区上辺の破面にはカキヤブリがみえる。6は平瓦。焼成は良く、胎土は密。凸面は未調整で、凹面は横ナデか。抉端隅部には焼成前の欠損があり、釘孔も1箇所確認できる。厚さは2.5cmと厚い。7・8は3層出土。7は丸瓦で、焼成は良く、胎土は密。凸面は縦ミガキ、凹面は未調整でコビキBが確認できる。側面端部には工具痕により凹む。8は平瓦。焼成はやや悪く、胎土はやや粗く1~2mm程度の長石を多く含む。調整は風化により不明である。9は4層出土の丸瓦。焼成はやや悪く軟質、胎土は密である。凸面は縦ミガキか。

第33・34図は二ノ門トレンチ4出土遺物。第33図1~5は2層出土。1は軒丸瓦B-4類A。焼成は良く銀化し、胎土も密で1mm程度の黒色粒子を含んでいる。2は軒平瓦の下向三葉文B類B。焼成は良く、胎土も密。瓦当にはキラコが付着する。凸面は横方向の工具によるナデ、凹面はミガキ。瓦当中央で顎貼付。3は軒棧瓦の橋A類Eか。焼成は良く銀化し、胎土も密で2mm程度の黒色粒子を含み、層状をなす。瓦当にはキラコが付着し、瓦当下側はナデにより少し凹む。凸面調整は横方向のナデと思われ、凹面は縦方向の板状工具によるミガキ。4は鰐の鱗部。焼成は良く、胎土も密である。内側はナデ、外側には、半円の中に上部頂点が鋭角な五角形を刻印し、鱗を表現している。中央左側には意匠は不明であるが、楕円形の凹みがある。5は三鳥手の陶器碗。高台と見込に砂目が付着し



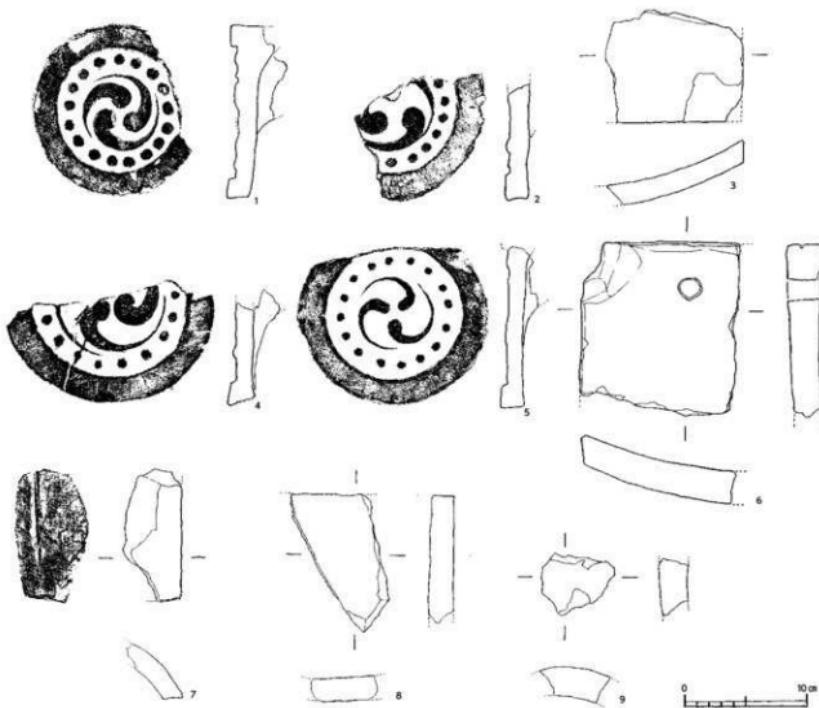
第30図 ニノ門トレンチ1 出土遺物実測図 (S=1/4)



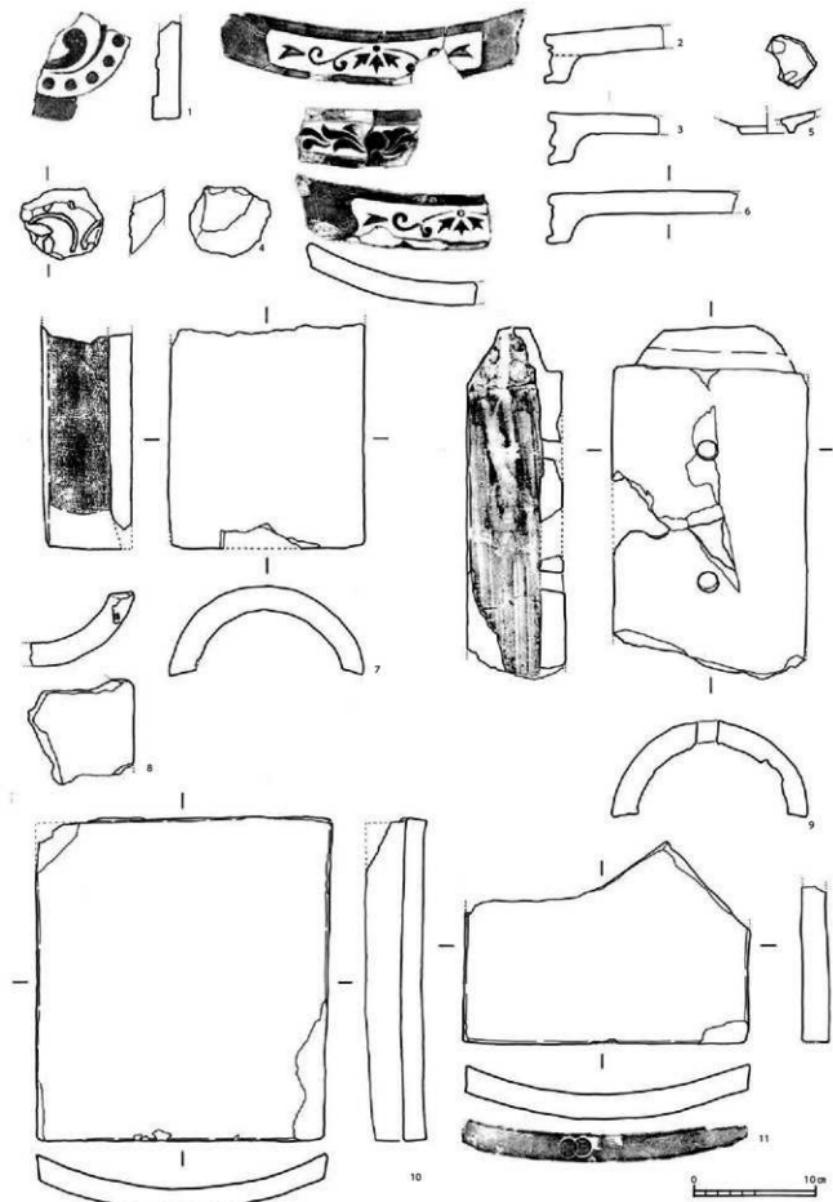
第31図 ニノ門トレンチ2 出土遺物実測図 (S=1/4)

ている。見込みには白土により印花文が象眼されている。九州陶磁の編年でⅡ～Ⅲ期に相当する。6～11は4層出土。6は軒平瓦の下向三葉文B類B。焼成は良く、胎土も密。瓦当にはキラコがつく。凸面の瓦当付近は横方向の工具によるナデ、中央は未調整か。凹面は外周に沿ったミガキ。7～9は丸瓦。7の焼成は良く、胎土も密。凸面は縦ミガキ後ナデ、凹面は未調整である。黒色と浅黄橙色の破片が接合しており、浅黄橙色の破片は二次的な被熱を受け、表面の焼しが剥落している。8は焼成も良く、胎土も密で黑色粒子を含む。凸面は縦ミガキ後ナデ、凹面は未調整。段部に「午」と刻書されている。9の焼成は良く、胎土も密。二次被熱を受けている。凸面は縦ミガキで段部周辺は横ナデがはいる。凹面は板状工具痕、吊紐痕が確認できる。釘孔は2箇所にある。10・11は平瓦。10の焼成は良く、胎土は密で層状となる。凸面調整は工具による横ナデである。凹面の周辺部は周辺に沿ったナデ、中央部は横ナデとなる。広端部には、焼成前からの別粘土が付着している。法量は長さ26.4cm、幅24.0cm、厚さ1.7cmを測る。11の焼成は良く、胎土はやや粗く1～2mm程度の長石を含んでいる。二次被熱により焼しが剥落している箇所がある。凸面は工具による縦ナデ、凹面の周辺部は周辺に沿ったナデ、中央部は横ナデ。狭端面端部中央寄りに輪違文が刻印される。

第34図も二ノ門トレンチ4の4層出土遺物。1は平瓦で、焼成は良く、胎土も密。凸面は工具による縦方向のナデ、凹面の周辺部は周辺に沿ったナデ、中央部は横ナデか。法量は長さ29.0cm、幅



第32図 ニノ門トレンチ3 出土遺物実測図 ($S = 1/4$)

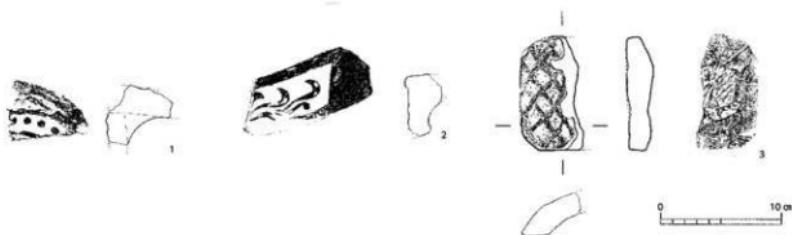


第33図 ニノ門トレンチ4 出土遺物実測図 1 ($S = 1/4$)

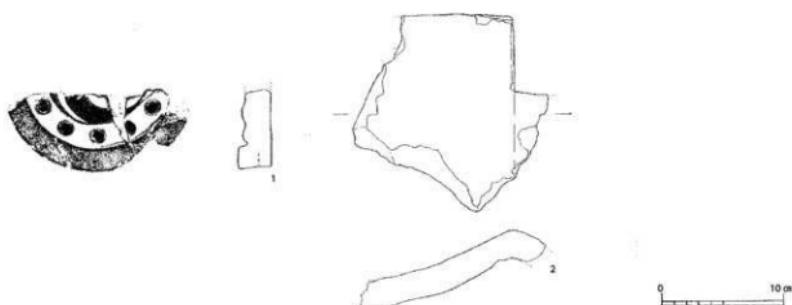


第34図 ニノ門トレーンチ4 出土遺物実測図2 ($S = 1/4$)

26.0cm、厚さ 2.2cmを測り、第34図10の平瓦よりも規格が大きい。2は敷平瓦。焼成は良く、胎土は密で1mm程度の長石を含む。二次被熱を受け、凸面・凹面ともに剥落し、浅黄橙色を呈している。凸面調整は前面及び側面は辺に沿った工具によるナデ、後面と中央部は工具による横ナデとなり、平瓦として調整を行った後に、半裁しているように思われる。凹面調整は縦ナデ。3は輪違。焼成は良く、胎土も密。二次被熱を受け、四隅は面取りしている。凸面は縦ミガキ、凹面は未調整で吊紐痕が残る。4は鬼瓦片。焼成は良く銀化し、胎土も密。二次被熱を受けていると思われる。箱型で形作られている。5は鱗片。焼成は良く銀化し、胎土も密。下側は水平に剥離をしており、粘土の織目が残る。内面調整はナデ、外表面は丁寧なミガキの後に半円の中に上部頂点が鋭角な五角形を刻印し、鱗を表現する。なお、半円の大きさは大小あるが、ヘラ書きではなく、スタンプによるもの



第35図 三丸トレンチ1 出土遺物実測図 ($S = 1/4$)



第36図 三丸トレンチ2 出土遺物実測図 ($S = 1/4$)

と思われ、木目の痕跡が確認できる。6～10は陶器。胎土は全て同質で、色調は灰色で密である。6は小碗で、器高5.3cm、口径6.8cm、底径4.0cmを測る。高台部以外は並釉がかけられている。見込みと外面に鉄釉により模様が描かれるが、モチーフは不明。外面体部下半には器形成時の凹凸が釉薬の下に確認できる。7は半球碗で、器高7.4cm、口径9.7cm、底径5.0cm。高台部以外は並釉がかけられる。外面体部下半には器形成時の凹凸が釉薬の下に確認できる。8は浅い碗か。残存高は3.3cm、口径は復元で13.0cm。内外面は並釉。9は壺の底部。残存高3.3cm、底径は復元で11.0cmを測る。内面及び外面の底部付近までは並釉が施釉され、外面底部は露胎である。底部は回転ヘラケズリにより切り離され、上げ底となっている。10は壺。残存高5.6cm、口径は復元で28.0cm。内外面とも並釉がかけられているが、二次被熱を受けザラザラしている。

第35図は三丸トレンチ1の3層出土遺物。1は軒丸瓦A-5類A。焼成は良好、胎土は密だが3mm程度の赤褐色粒子が含まれる。また、文様区は別粘土で作られ、瓦当上辺は丸瓦部の粘土となる。2は軒棟瓦の橋A類A。焼成は良く銀化し、胎土は密である。瓦当にはキラコが確認できる。3は輪違。焼成はやや悪く、胎土はやや粗く1～2mm程度の長石を含む。凸面は格子タタキ、凹面は未調整で吊糸痕が見える。先端部の隅は面取りしている。

第36図は三丸トレンチ2出土遺物。1は3層出土の軒丸瓦A-2類B。焼成は良く銀化し、胎土は密である。瓦当にはキラコが確認できる。2は石段の掘方内出土の左棟瓦。焼成は良く銀化し、胎土は密。凸面は未調整で、凹面はミガキ後ナデと思われる。厚さは2.4cmあり厚手である。

(6)二ノ門・三丸部調査の小結

二ノ門に関しては、4箇所のトレンチを設定して調査を実施した。外形内のトレンチ1～3では、立地により石垣の下部構造が異なっていることが確認できた。トレンチ1は地表下に岩盤があることから、小さな根石で水平をとった後に築石を積み上げている。トレンチ2では強固な岩盤はなかったが、地山となる風化疊層をわずかに掘り込み築石を積み上げる。トレンチ3は谷地形で地山が低いため、外形内の平坦面を確保するために造成する必要があり、地山を根切りした後に小角礫による捨石を入れ、築石よりも少し小振りな根石を積んだ後に、築石を積み上げている。

またトレンチ4を含めた各トレンチにおいて、表土下に瓦を多く含む黄褐色土が堆積している。この層からは瓦のみの出土であり、遺物による時期決定はできないが、トレンチ4の調査結果により近代以降の層であることが判明した。近代以降の二ノ門周辺の開発は、昭和33年度以降の石垣修理が大規模なものであり、この時期にあたるかもしれない。

特筆すべき事項として、トレンチ4において浜田城跡で初めて城門遺構及び焼土層が検出された。城門遺構については前述のとおりであるが、焼土層に関しては、その包含する陶器から幕末の層と考えられ、慶応2年（1866）の第二次幕長戦争時の落城に伴うものと判断できる。第34図6～10がその陶器であり、これらは灰色の密な胎土である。また6・7の碗類には特徴的な器形成型時の凹凸が外面体部下半に確認でき、この胎土と器形成型時の特徴を持つ製品は浜田川河口に立地する動木窯跡製品であることが既往調査により判明している。動木窯跡製品は浜田城下町遺跡では出土していたが、城内では今回初めての出土となり、第二次幕長戦争時の一時的な利用の可能性もあるが、城内にも流通していたことが確認された。

浜田城跡の落城については、『中島日記』『丙寅石州義戦行 浜田城焼失の報知』において、「18日、長浜まで罷り越様子伺い候処、浜田城下大火に付、午前十一時ころ2カ所より出火、廓内も焼け候様子、尤も櫓は無別条有之。砲声も聞えば火薬庫へ火移り（後略）」とあり、また慶応2年（1866）7月26日付けの「前原一誠宛山田右衛門書簡」には、「石州表濱田落城ノ儀ハ財満其外ヨリ御承知可被成奉存候濱城モ二ノ郭三ノ郭焼失本丸ハ残り候付我兵則本丸ニ入り罷存候由濱城以東モ賊兵壘モ守兵出張川邊ノ形成ニ（後略）」とある。これらの記述を見ると、本丸の三重櫓は無事であったが、二ノ門が立地する本丸より下の二ノ郭や三ノ郭は焼失したと読める。実際に本丸トレンチにおいては、焼土層は検出されず、また二次被熱を受けた遺物も出土しなかった。一方で二ノ門トレンチ4の焼土層や炭化柱根、二次被熱を受けた遺物を見ると、二ノ門は焼失したと思われ、文献の記述を裏付ける結果を得た。

三丸部に関しては、トレンチ1では近接する石垣が明治30年代に陸軍歩兵第二十一連隊により作られた可能性を示唆でき、トレンチ2では、現在の階段が築城時のものではなく、江戸時代後半以降に作られたものであることが確認された。

(7)出丸部の調査

城山公園整備では、出丸西石垣天端部に転落防止柵設置、遊歩道南側に擬木階段の設置が計画されていた。このため、それぞれの該当箇所にトレントを設定した。

(ア)出丸トレント1

出丸西石垣天端部に沿って、長辺（南北）7m × 短辺（東西）2m の調査区を設定した。近世の絵図では土塀が記載されている。表土の4 ~ 10cm程度下には、2層となるしまりのある明黄褐色土が堆積し、近世の造成土と判断され、トレント南半には天端石と平行する石列が検出された。石列石材は20cm ~ 60cm程度のものがあり多少のばらつきはあるが、平坦面を上もしくは天端石側に多少傾けた状態にある。この石列と天端石の上面はほぼ同じレベルにあることから土塀基礎構造と判断される。また天端石先端と石列後端との幅は約1mあり、天端石先端を少し余すとすると、幅3尺（約90cm）の土塀があったものと推定できる。

2層上面の構造としては、トレント東端で性格不明の軒桟瓦列（SX01）が検出された。軒桟瓦列の周辺はややしまりのない明黄褐色土が堆積する。これらの軒桟瓦は、瓦同士が組み合っており、屋根に葺かれた瓦が反転した状態となっており、釘孔に釘が遺存している瓦もある。ただ、土塀に葺かれていた瓦が落下したものとは考えにくく、その後の瓦利用のために整理されたものであろう。これらの軒桟瓦は焼成も良く銀化した橋文であり、幕末頃のものと推定され、明治5年に建てられた浜田県庁に同じ瓦が利用されていることから、県庁利用を目的とした瓦整理の可能性も考えられる。

トレントの北端では、地山を確認する目的で2層以下の掘削をおこなった。天端石先端から1間（約1.8m）の範囲に、角礫を用いた裏込が検出された。

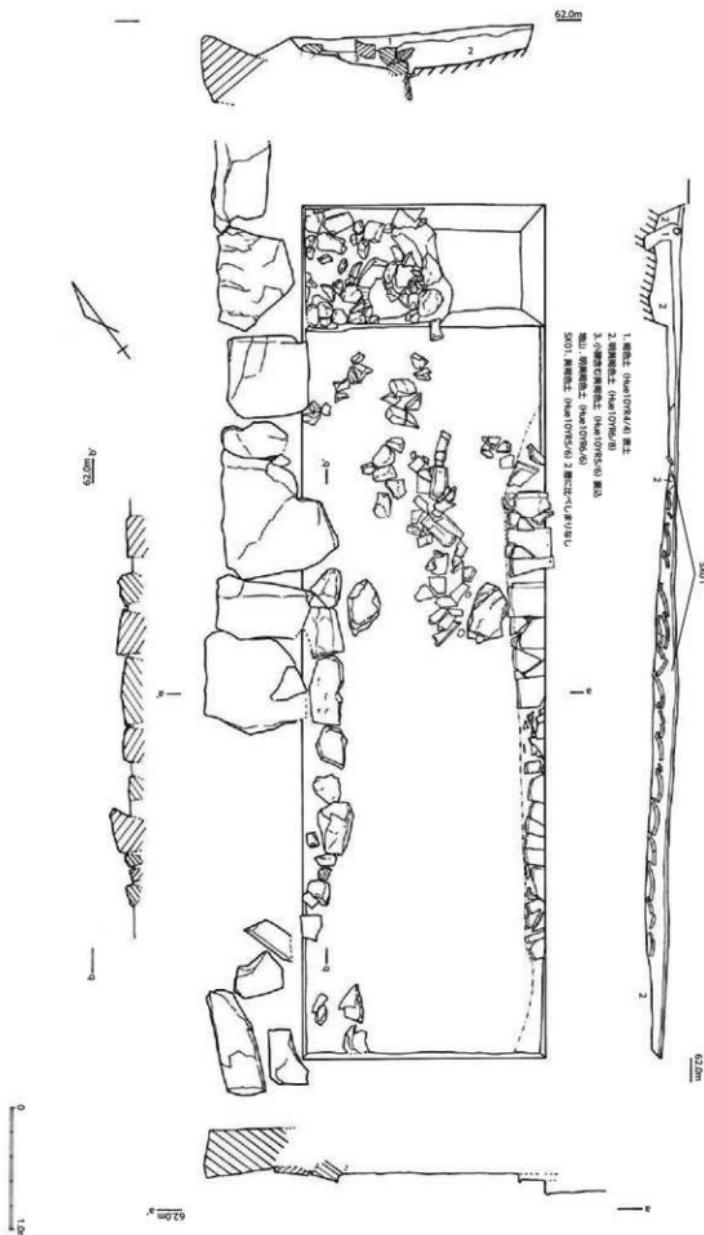
(イ)出丸トレント2

現況の遊歩道の南にあたり、近世には出丸南面石垣が存在していた箇所に長辺（南北）2m × 短辺（東西）1.5m の調査区を設定した。その後、石垣が検出され、その裏込の確認のため石垣背後に石垣と直交する1.3m × 0.25m の範囲を拡張した。

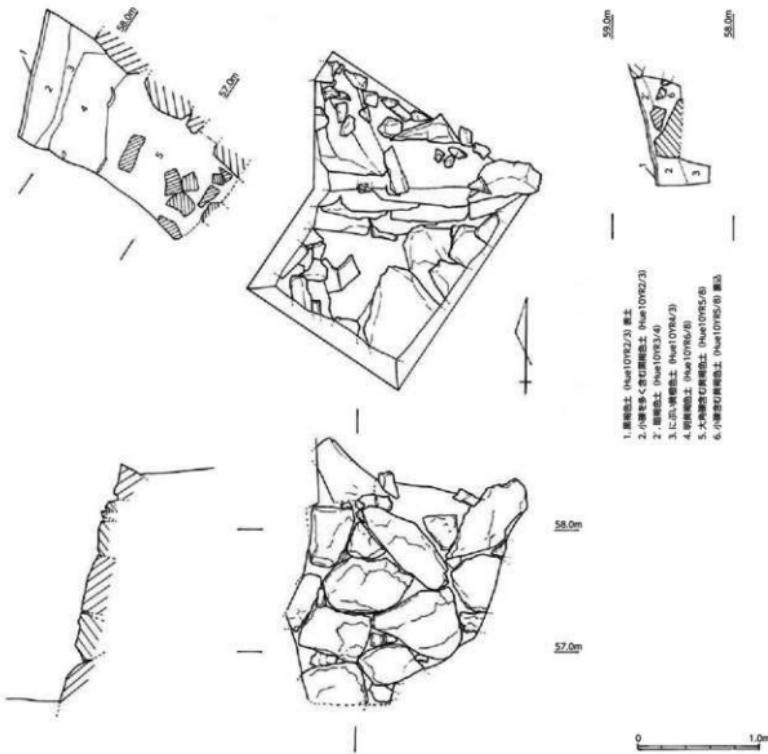
該当地周辺は江戸時代の石垣補修図によると、出丸南面及び西面石垣が存在した箇所にあたりが、明治30年代の歩兵第二十一連隊の公園整備の際に、本丸への近道を通すために石垣が撤去され、石段が設置されている。なお、石段周辺には小角礫が散布しており、石垣の裏込石が露出している。

トレント設置箇所は調査前においても、石材の露出が確認されており、表土下すぐには石垣築石の上面が検出された。石垣の前面の5層では、小中礫を含む黄褐色土が堆積し、中には築石だったと思われる大角礫も含まれる。一方、石垣背面は表土下に暗褐色土が10cm程度堆積し、その下に小中角礫を含む黄褐色土があり、裏込と考えられる。

検出した石垣の法量は高さ1.6m、幅1.8mを測る。根石までは確認できず、天端石も残存していない。検出石垣の上部で落し積みが確認される。該当地は嘉永3（1850）年の石垣補修図に描かれている場所であり、落し積みは嘉永年間の修理時の可能性があるが、検出したのは一部分であるため、断定は避けたい。遺物は、近世の瓦や近代以降の陶磁器類・ガラス等が出土した。



第37図 出丸トレンチ1 平面図・土層図 ($S = 1/40$)

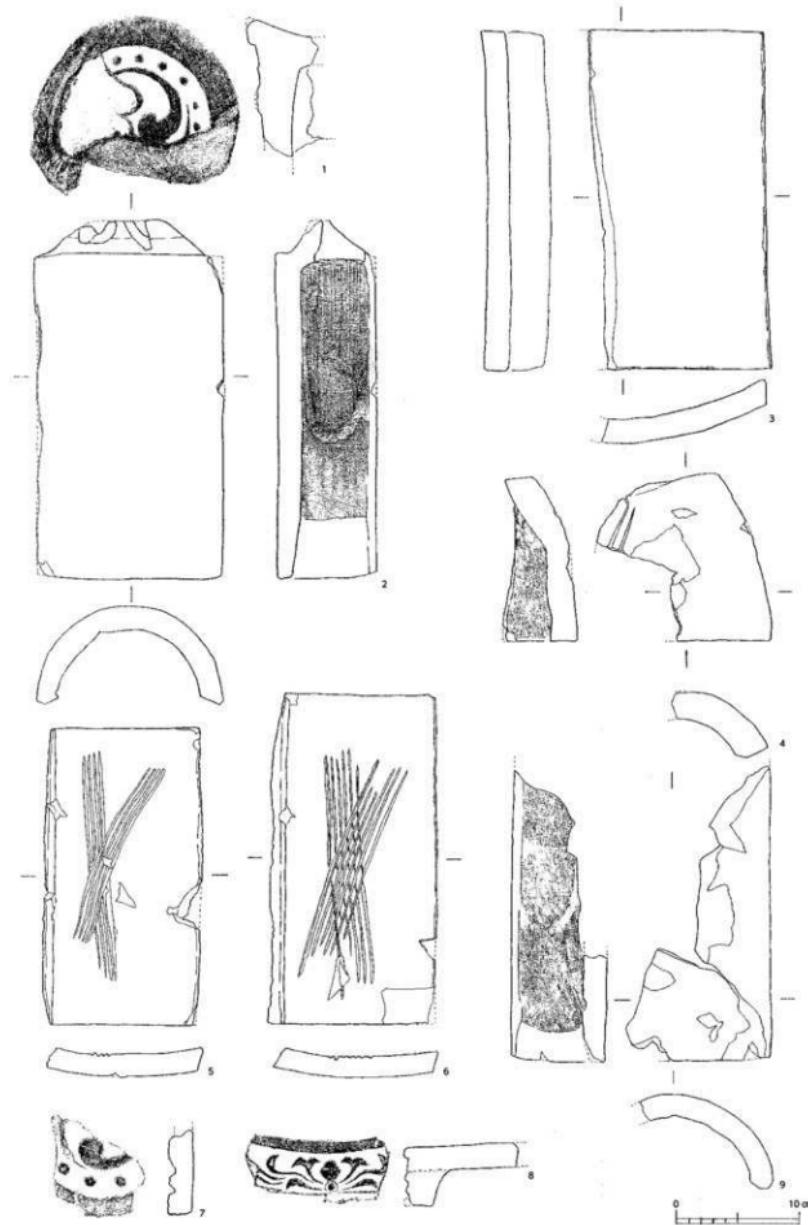


第38図 出丸トレンチ2 平面図・土層図 ($S = 1/40$)

(8)出丸の出土遺物

第39～42図は出丸トレンチ1出土。第39図1～6は1層出土品。1は軒丸瓦A-3類A。焼成はやや悪く、胎土はやや粗く1～3mm程度の長石を含む。側面観は反りを持つ。2は丸瓦。焼成は良く、胎土はやや粗く、2mm大の長石がみられる。凸面は縦ミガキ後ナデ、凹面には板状工具痕、吊紐痕がある。側面端部は幅1.5cm程度の工具痕により凹んでいる。3は平瓦。焼成は良く、胎土も密。凸面は工具によるナデ、凹面の外周は辺に沿ったミガキ、中央部は横ミガキが施される。4は輪違い。焼成はやや悪く、胎土もやや粗く1～2mm程度の長石が含まれる。凸面調整は風化により不明であるが、側面寄りに2条の沈線がはいる。凹面は未調整でコビキBが見られる。前端部はしっかりとした面を持つが、後端部は緩やかな凹凸がある。5と6は割熨斗瓦。ともに焼成も良く、胎土も密。5は4条1単位、6は6条1単位の熨斗目を交差させる。

第39図7～9及び第40図は2層出土。第39図7は軒丸瓦A-2類C。焼成はやや悪く軟質、胎土は密。8は軒棧瓦の橋A類A。焼成は良く銀化し、胎土も密。9は丸瓦。焼成はやや悪く、胎土もやや粗く1～2mm程度の長石を含む。凸面は格子タタキ後ミガキ、凹面は未調整で吊紐痕がある。側面



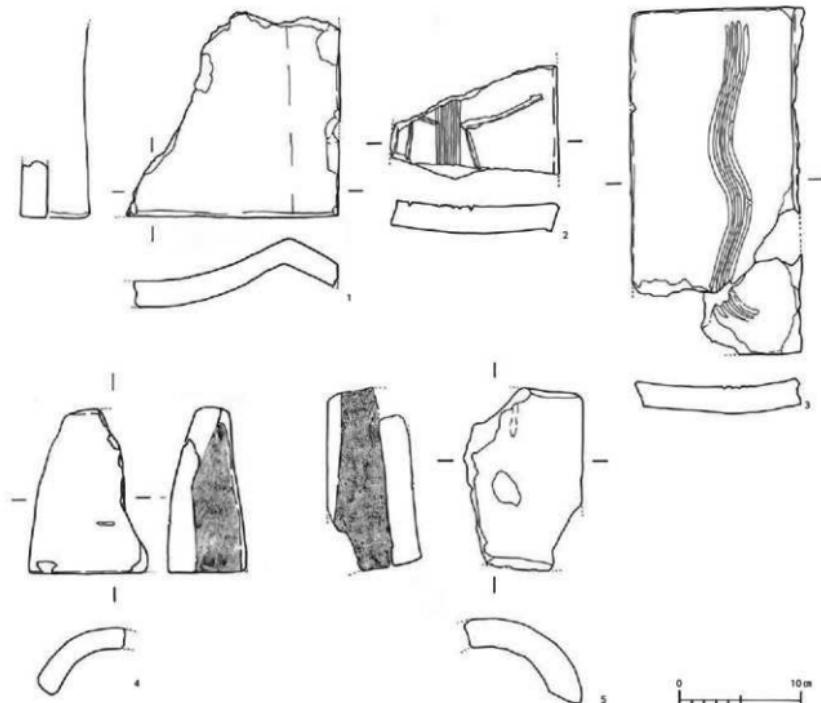
第39図 出丸トレンチ1 出土遺物実測図1 ($S = 1/4$)

端部の前側は面取りがはっきりしないため丸みを持ち、後側はしっかりと面取りをされている。

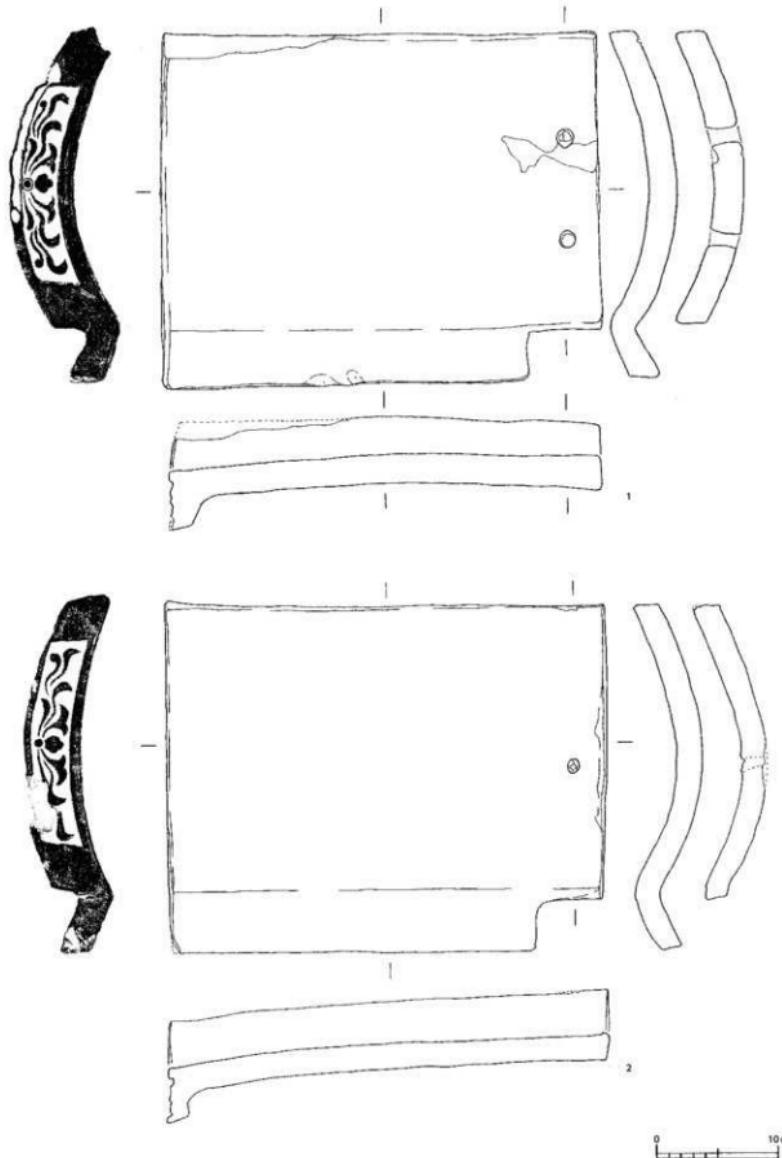
第40図1は左棧瓦。焼成は良く銀化し、胎土も密。凸面は横方向のミガキ、凹面は横方向の工具によるナデ。前端部上面はわずかに面取りがされる。2・3は割熨斗瓦。2の焼成はよく、胎土も密。4条1単位の熨斗目を長辺方向に入れ、その両側にヘラ状工具による沈線がみられる。3の焼成は悪く、胎土も粗く5mm大の長石が含まれる。4条1単位の熨斗目を入れる。4と5は輪違い。4の焼成はよく、胎土も密。凸面調整は風化により不明、凹面は未調整でコビキBが見える。平面形は台形である。5の焼成はよく、胎土も密だが、1~2mm程度の長石が含まれる。凸面は縦ミガキ後ナデ、凹面は未調整でコビキBが見える。丸瓦の中央部を輪切りにしたような形状で、平面形は長方形となる。

第41・42図はSX01出土。第41図は軒棧瓦。1は橋文A類A。焼成は良く銀化し、胎土も密。瓦当にはキラコが付着する。凸面は横方向の工具によるナデ、凹面はミガキ後ナデ調整。前端上部はわずかに面取りし、釘孔は2箇所ある。釘孔の一つには鉄釘片が残っている。2は橋A類B。焼成は良く銀化し、胎土も密。瓦当にはキラコが付着する。調整は1と同様。前端上部をわずかに面取りし、釘孔は1箇所で鉄釘片が遺存する。1と2の規格はほぼ同一である。

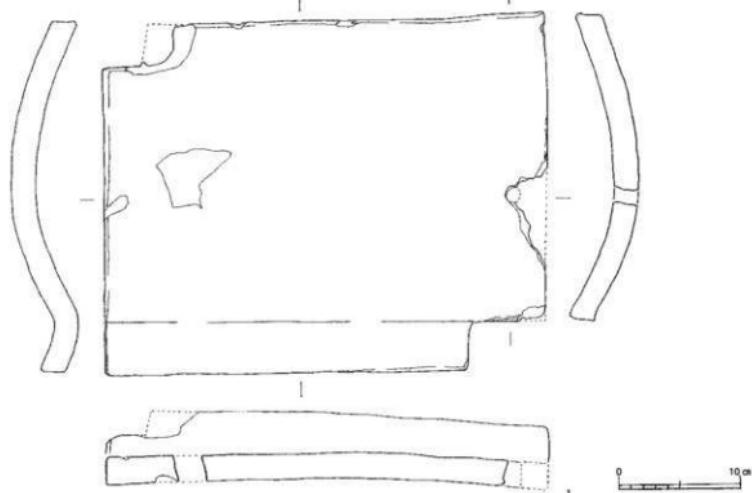
第42図1は左棧瓦。焼成は良く銀化し、胎土は密だが、層状をなす。凸面は横方向の工具によるナデ、凹面はミガキ後ナデ調整。前端上部をわずかに面取りし、釘孔は1箇所。



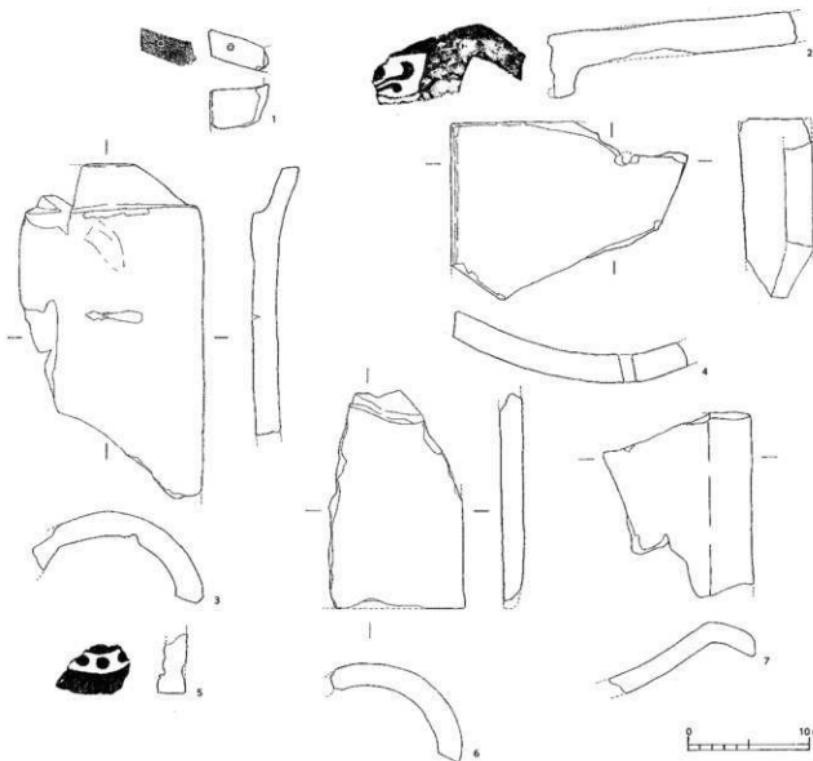
第40図 出丸トレンチ1 出土遺物実測図2 (S = 1/4)



第41図 出丸トレント1 出土遺物実測図3 ($S = 1/4$)



第42図 出丸トレンチ1 出土遺物実測図4 (S = 1/4)



第43図 出丸トレンチ2 出土遺物実測図 (S = 1/4)

第43図は出丸トレンチ2出土遺物。1・2は2層出土。1は右棟瓦で、焼成は良く、胎土も密。棟部後に丸の刻印がある。2は軒棟瓦の橋A類A。焼成は良く、胎土も密。瓦当にはキラコが付着する。凸面は横方向の工具によるナデ、凹面はミガキ後ナデ調整。3・4は3層出土。3は丸瓦で、焼成は良く、胎土も密。凸面は縦ミガキ後ナデ、凹面は未調整でコビキBと吊紐痕がみえる。側面端部は幅1.5cm程度の工具痕により凹んでいる。4は左棟瓦か。焼成は良く銀化し、胎土も密。釘孔が1箇所ある。厚さも2.3cm程度と比較的厚く、焼成具合などから橋文A類に対応する棟瓦の可能性が高い。5～7は5層出土。5は軒丸瓦A-3類F。焼成は良く銀化し、胎土も密。瓦当にはキラコが付着する。6は丸瓦で、焼成は良く、胎土はやや粗く1～2mm程度の白色粒子を含み、層状を呈する。凸面は縦ミガキ後ナデ、凹面は不明瞭であるが棒タタキの痕跡が残り、吊紐痕も見られる。側面端部は幅1.5cm程度の工具痕により凹んでいる。7は左棟瓦で、焼成は良く、胎土も密で1mm程度の黒色粒子を含む。凸面は横方向の工具によるナデ、凹面はミガキ後ナデ調整。

(9)出丸調査の小結

出丸部では2箇所のトレンチを設定して調査を実施した。トレンチ1では土壙基礎遺構が検出され、その構造から土壙下部が幅3尺（約90cm）程度で、控柱の柱穴も検出されなかったことから、自重で自立する土壙が想定できる。また、本丸トレンチにおいても、控柱の痕跡はなかったことから、少なくとも山頂部の土壙は自立型であった可能性がある。また出丸トレンチ1は、土壙背面直下にあたるが、漆喰の出土が見られなかったため、絵図に描かれる漆喰白壁とは状況が異なっている。石垣に関しては、天端石先端から1間（約18m）幅に裏込が確認された。裏込の石材は流紋岩の小・中角礫であり、築石との石材の区別はないことが確認された。

トレンチ2では、地表下に江戸時代の石垣が検出された。天端石はすでに撤去され、根石については、安全管理上検出はできなかった。ただ、出丸南面石垣の延長を確認することができ、明治30年代に撤去された出丸石垣の江戸時代の場所をより正確に推定できる資料を得た。

遺物に関しては、出丸調査区では左軒棟瓦の橋類が多く出土した。橋文は焼成も良く銀化をしており、全国的な傾向から見ても江戸時代後期以降の所産と考えられる。文献史料によると出丸には土解しかなく、その壠の葺き替え時期としては、嘉永3（1850）年の出丸石垣の全面修理時がある。橋文の遺物の年代観から見ても、嘉永3年の石垣修理時に葺き替えられた可能性が高いだろう。またこの橋文の左軒棟瓦の法量は長さ36cm、幅28cm程度と大型であり、土壙以外の建造物にも使用ができるものである。このため、浜田城の場合は、壠専用の瓦は利用されていなかったと想定される。

第3節 中ノ門谷部調査の成果

(1)中ノ門谷部の調査

城山公園整備では、中ノ門谷部において、塩硝蔵の郭から井戸に至る見学動線整備、井戸上面への安全柵の設置、中ノ門から城山中腹に至る見学動線の整備、各所の解説サイン設置が計画されていた。このため、塩硝蔵の郭南側の井戸周辺にトレンチ1、中ノ門から城山中腹に至る見学動線上にトレンチ2～5を設定して調査を実施した。



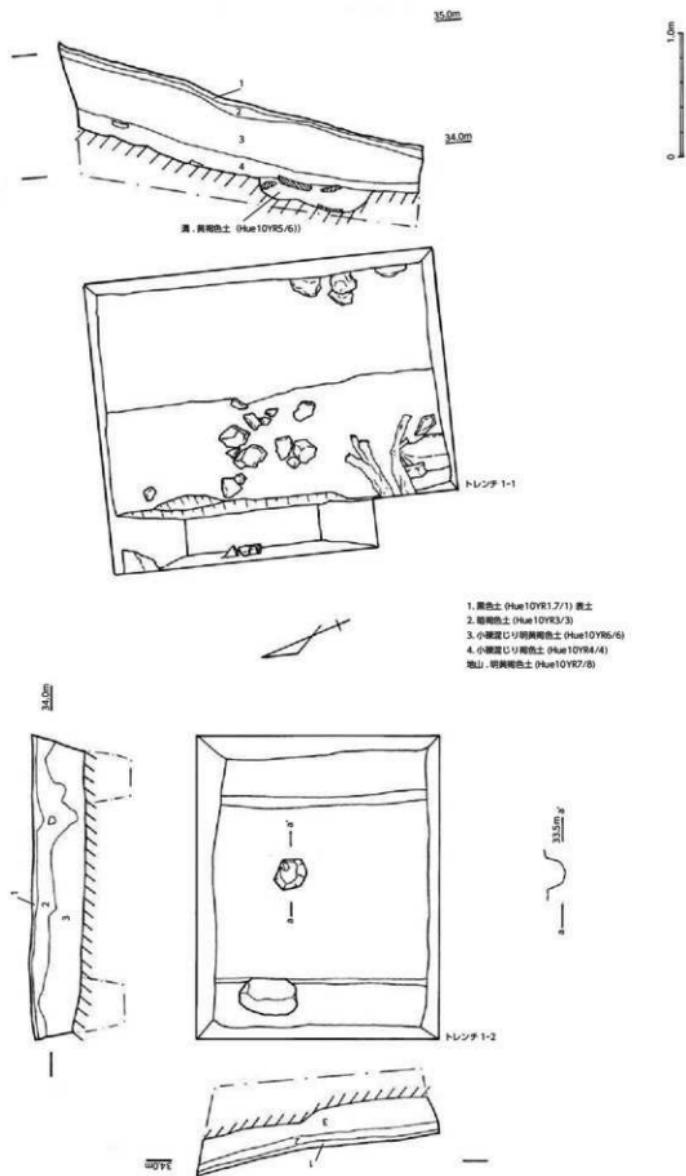
第44図 中ノ門谷部トレンチ配置図 ($S = 1/1,000$)

(ア)中ノ門谷部トレンチ1

塩硝蔵の郭の南側、中ノ門谷部北斜面にある井戸上部の緩い平坦面にあたる。近世の絵図には、井戸に至る道が大まかに描かれているものもあるが、絵図の精度が低いため、どの方向から井戸にアクセスしていたかなど、具体的な検討は困難である。また、井戸に付属する施設に関する描写はない。

調査予定の平坦地は狭く排土置場も確保できず、また中央に大木があることから、平坦面東側をトレンチ1-1、西側をトレンチ1-2とし、天地返しにより調査を実施した。

トレンチ1-1は、長辺（南北）3m × 短辺（東西）2m の調査区を設定した。その後、地山面に東西方向に伸びる石の散布が確認され、その性格をつかむために、トレンチ西側に 2m × 0.4m の調査区を追加した。表土から3層まではガラス瓶を含む。4層は旧表土と思われる小疊混褐色土となるが、遺構は検出されなかった。4層下は地山となる明黄褐色土であり、地山面に東西方向に伸びる石材の散布が確認された。石材周辺の土は微妙に色調が異なるように見られたが、平面では確認できなかったため、壁側を掘り下げて断面で確認したところ、幅90cm、深さ20cm程度の溝を確認した。石材はこの溝に沿って散布するが、その分布には粗密があり、また石材上面のレベルも揃わないため、路盤などの石敷遺構の可能性は低いと思われる。なお、溝内からは土師質の灯明皿の1点のみが出土し、トレンチ1-2では溝及び石材の散布は確認されなかった。



第45図 中ノ門谷部トレンチ1 平面図・土層図 ($S = 1/40$)

トレンチ1-2は、長辺（東西）2.5m×短辺（南北）2mの調査区を設定した。トレンチ1-1とは1.5m離れる。土層は1～3層まではトレンチ1-1と同様であるが、トレンチ1であった旧表土となる4層は検出されなかった。遺構はトレンチ中央の地山面に径25cm程度の土坑1基を検出した。土坑の平面形はいびつな六角形状となり、埋土の褐色土中には数点の小角礫のほか瓦片1点が出土した。トレンチ1の立地する平坦面において、土坑の検出はこの1基のみであり、性格は不明である。

(イ)中ノ門谷部トレンチ2

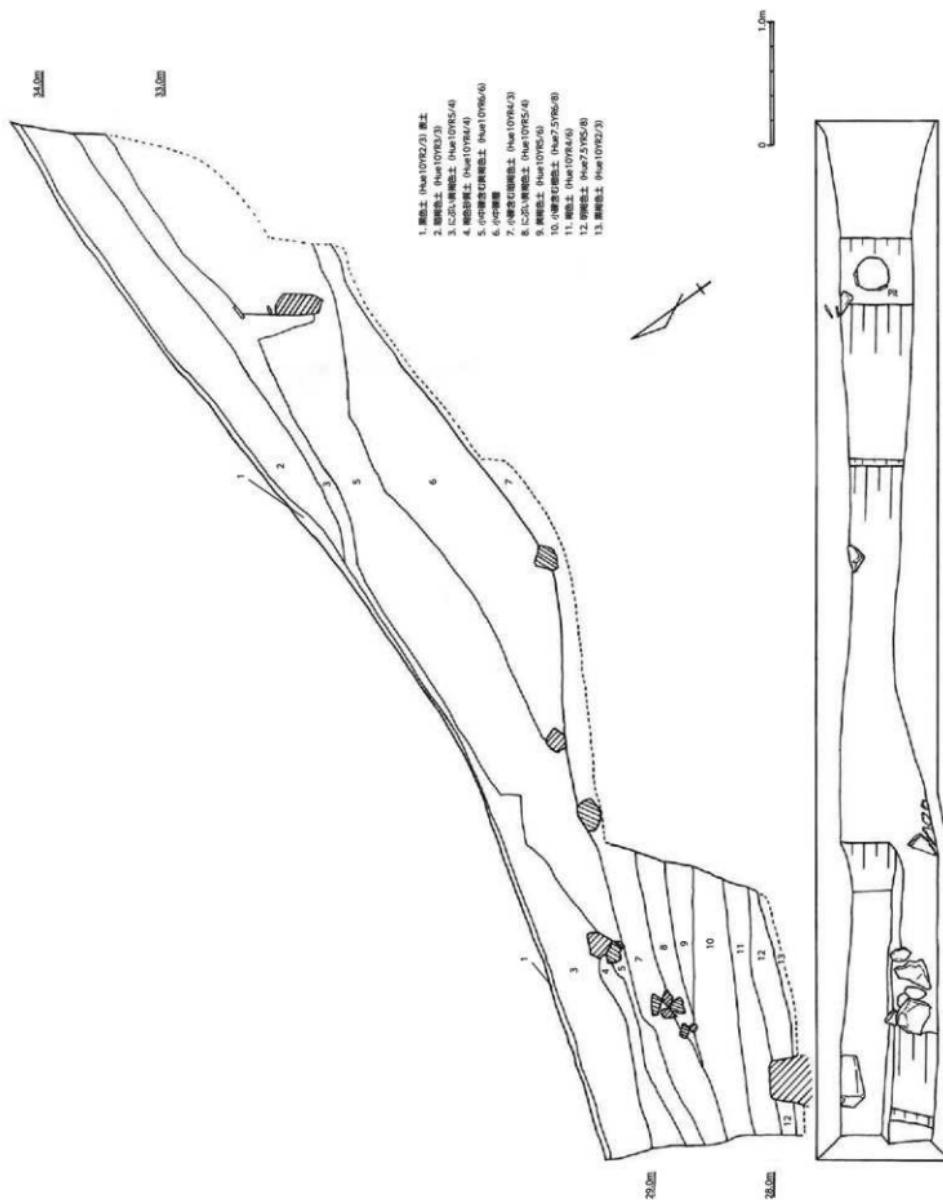
中ノ門谷部より現在の浜田護国神社が立地する平坦面に上がる斜面にある。近世の絵図では、上部平坦面に上がる道は描かれているが、階段を表しているのかはっきりしない。トレンチは谷の等高線に直交するかたちで、長辺（北西－南東）8.5m×短辺（北東－南西）1.0mの規模で設定した。

表土から0.8m～1.4m下の6層及び7層上面まではプラスチックなどが含まれている。特に5層の黄褐色土は色調などからも削平された地山であり、トレンチ上部の道を拡張する際の切り土を下の谷部に落とした可能性が考えられる。6層はトレンチ上半で検出された小中角礫層であり、石垣の裏込石が破棄されたような印象を受ける。6層からは近代以降の遺物は出土していないが、5層のあり方から見ても、近代以降の城山改変によるものと思われる。なお、築石になるような大型の石材は検出されなかった。7層は小礫を含む暗褐色土であり、近世の旧表土と思われる。時期としては、広東碗や桟瓦が出土していることから、19世紀前半頃と思われる。7層はトレンチ下半では緩やかな平坦面をもち、中央部で上方に傾斜し、再び平坦面となる。この上部平坦面で直径25cm程度の円形の土坑1基を検出した。この土坑の周縁に沿うように平瓦が2点検出され、土坑の縁を固めていたようである。土坑埋土は明黄褐色土であるが、上面を検出し記録を取ったのみで、遺構の掘削は実施していない。7層では階段などの道に関わる遺構はなく、上部平坦面に上がる道は検出されなかった。トレンチの下半では、7層以下の状況を確認するために、一部で深堀を実施した。8層から12層までは遺物の出土はなく、13層の黒褐色土から土器片が2点出土した。ただ、細片のため時期などについては不明である。11層の褐色土は旧表土の可能性を考えらえるが、遺物は出土していないため、断定はできない。

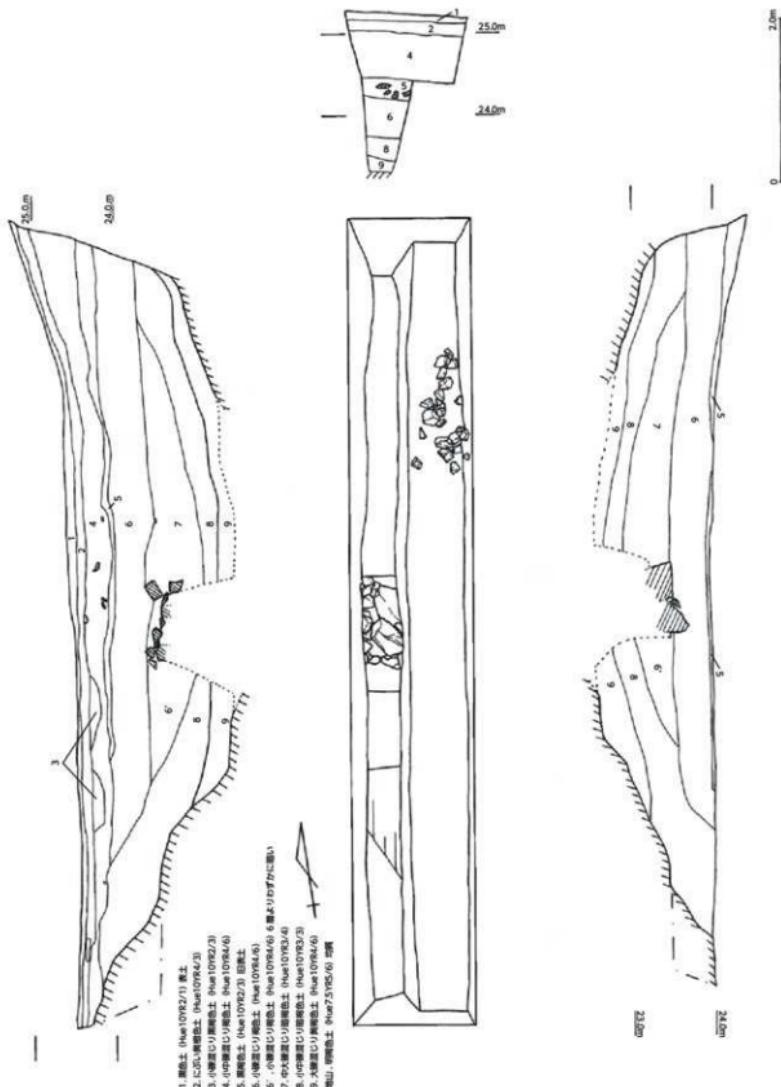
(ウ)中ノ門谷部トレンチ3

近世時の本丸へ上の道があった谷部となり、現在は昭和に植林されたスギ林となっている。道幅等に関しては、近世資料では不明であるが、明治時代の資料では幅5間（約9m）と記されている。調査区は谷の中央に長辺（南北）10m×短辺（東西）1.5mを設定した。

トレンチ南側では表土下20cmで均質な明褐色土の地山となり、北側に向って下方へ傾斜する。地山はトレンチ北側で上方への傾斜が確認でき、トレンチの中央が谷底となる。表土から4層まではガラスなどの近代以降の遺物を含んでいる。なお、3層は砂利を含んでおり、断面からも谷水の流路の可能性がある。5層が黒褐色土で近世の旧表土、6層が小礫をわずかに含む褐色土で谷を埋める造成土と思われる。6層からは古墳時代の土器や須恵器が多く出土する。7層から9層は大中の礫を含む褐色土であり、谷の崩落土か。なお8層からは弥生時代後期の土器が出土した。礫敷きや排水路などの遺構は検出されず、小礫がわずかに散布するのみであったが、6層上面が近世の登城道の可能性が高いと考えらえる。



第 46 図 中ノ門谷部トレンチ 2 平面図・土層図 (S = 1/40)

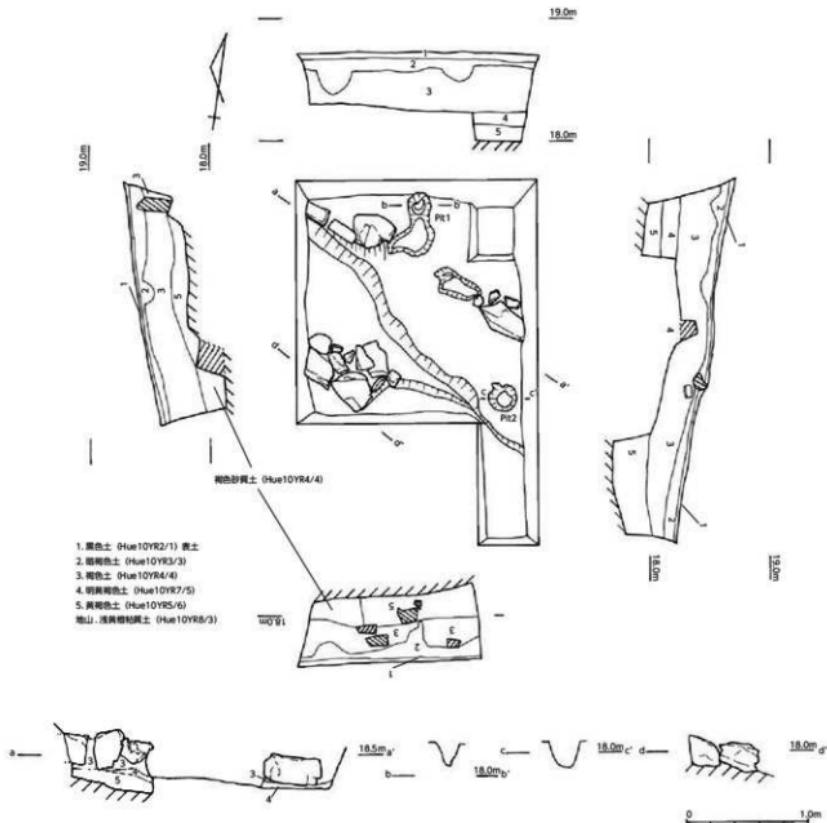


第47図 中ノ門谷部トレンチ3 平面図・土層図 (S = 1/60)

(二) 中ノ門谷部トレンチ 4

中ノ門谷出口に所在する井戸の東側の平坦面に $2m \times 2m$ の調査区を設定した。その後、石列が検出されたために、トレンチ南東側に $1m \times 0.5m$ の調査区を追加した。なお、該当地は環境省レッドデータブックにおいて絶滅危惧 II 類となっているカスミサンショウウオの生息地付近であったため、排土や濁水により影響を与えないように配慮しながら調査を実施した。

1～3層までは近代以降の遺物が出土する。4層となる明黄褐色土上面で北西～南東方向の石列を検出した。一部で石材は抜き取られているが、抜取痕が確認できる。この石列は $30cm \times 25cm$ 、 $50cm \times 25cm$ 程度の石を掘った穴に立てており、背面に裏込も確認されないことから石垣とはならない。南側で面を描えており、何かしらの区画とも考えられるが、石列背面はすぐ崖面となっているため、具体的な性格は不明である。なお、4層以下からは明確に近代に遡ると判断できる遺物は出土していないため近世の遺構の可能性がある。また、4層上面では、石列背面で直径 $20cm$ (Pit1)、石列前面で直径 $25cm$ (Pit2) の土坑を検出した。土坑間の距離は $1.8m$ と 1 段になるが、間に石列が挟まれており、性格は不明である。



第 48 図 中ノ門谷部トレンチ 4 平面図・土層図 (S = 1/40)

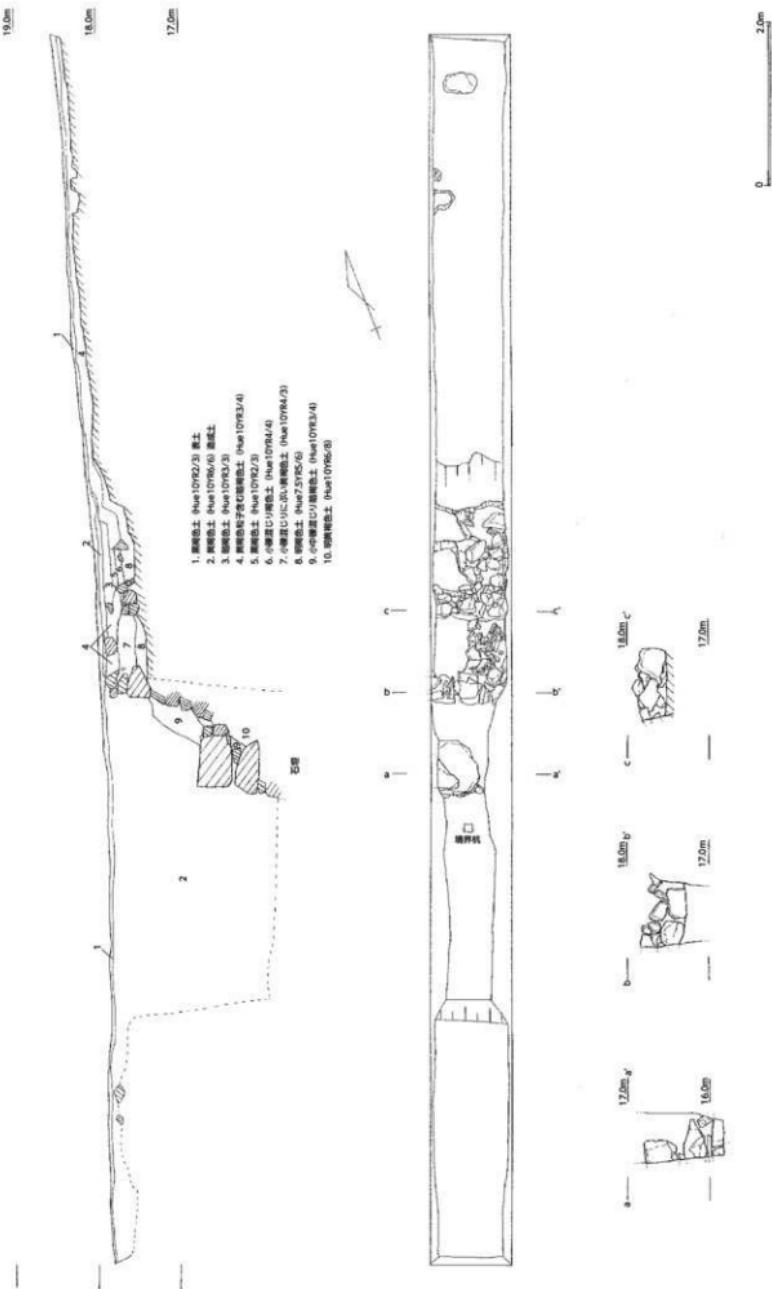
4層下には5層となる小礫を含む黄褐色土が堆積し、以下が地山となる。地山面で北西・南東方向の石列（石材2個分）を検出した。こちらも南側で面を揃えており、石列の北西方向の延長線上には、近世の井戸跡が立地する。また、石列の前面には、褐色砂質土が堆積することから、井戸に関する水路の石列の可能性が考えられる。なお、この石列のすぐ南側はカスミサンショウウオの生息地にあたるため、水路幅の確認を目的とした調査は実施しなかった。ただ、石列の延長を確認するため、南東側には追加調査を実施したが、石材や砂質土の堆積は見られなかつたため、途中で水路の方向が変化する可能性がある。

(f) 中ノ門谷部トレント

中ノ門を抜けた正面高手の平坦面で、近世の絵図では番所が1棟及び2棟描かれる。番所前の石垣についても記載のあるなしの2種あり、石垣補修図には描かれていません。番所の規模についての文献記述は不明である。現在、平坦面東の中ノ門石垣は凹状に撤去されており、時期は不明（大正～昭和か）であるが、この土をつかって現在の高手の平坦面を造成したと言われている。また古写真には調査地付近に建物が見られる。調査区は中ノ門の中心軸にあたる箇所に、長辺（南北）15m×短辺（東西）1mを設定した。

トレント北側は表土下10cm程度で地山が検出された。トレント北端では地山直上に礎石と思われる40cm×25cmの扁平な石材が検出されたが、近代以降の建物に伴うものか。また北から7m及び8mのあたりの2箇所で南側に面を持つ石組を検出した。利用されている石材は、ともに30cm×20cm程度の小規模なものであり、控えも短い。また石組背面に小礫とともにガラスを含む層が堆積する。のことから、この2つの石組も近代以降のものと考えられる。

一方でトレントの南側は表土下に人頭大の角礫を含む黄褐色土（2層）が2m以上堆積しており、少量の瓦とともにガラスやビニールを含んでいる。この2層が中ノ門石垣を撤去した際の土砂と考えられる。トレント中央南側でこの2層に覆われるよう、南側に面をもつ大型の石材を用いた3段の石垣を検出した。ただ天端石までは残存していない、根石の検出も安全管理上できていない。石材には矢穴が認められ、背後には裏込となる小中礫混暗褐色土（9層）が堆積し、築石の控えも70cm程度と長い。なお、9層中には棗瓦を含む瓦が含まれているため、近世の半ば以降に修理が加えられていると考えられる。また石垣より40cm前面に「浜田町」のコンクリート製境界杭が検出され、この石垣をもって土地境界としていたことがわかる。「浜田町」のコンクリート製境界杭は、現存する中ノ門石垣前にも設置をされており、検出石垣が中ノ門と対応する石垣である可能性が高い。



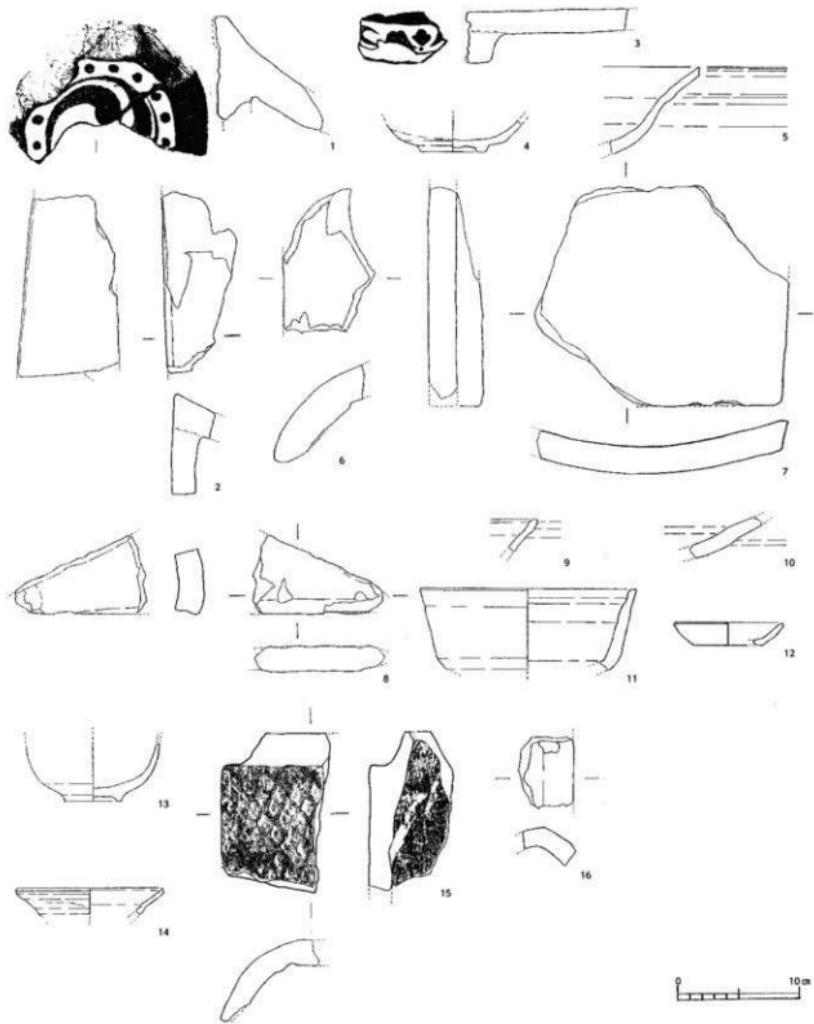
第49図 中ノ門谷部トレンチ5 平面図・土層図 (S = 1/60)

(2)中ノ門谷部の出土遺物

第50図は中ノ門トレンチ1出土遺物。1～12はトレンチ1-1、13～16はトレンチ1-2出土。1は2層出土の鳥衾瓦。瓦当は軒丸瓦A-3類A。焼成は良く、胎土はやや粗く1～2mm程度の長石が含まれる。外面は縦ミガキ、内面はナデか。2は2層出土の右袖瓦。焼成は良く銀化し、胎土も密。平瓦に袖部分を張り付けている。外側の調整はミガキ、内側はナデである。3～5は3層出土。3は軒棧瓦の橋B類B。焼成は良く銀化し、胎土も密。瓦当にはキラコが付着する。凸面は横ナデ、凹面は風化により不明瞭だがミガキがなされる。4は肥前陶器の皿。残存高2.65cm、底径は復元で5.3cm。内面及び外面底部付近までは縁釉、高台付近は露胎である。見込みに胎土目があり、九州陶磁の編年でⅡ期に相当する。5は肥前陶器の大皿。内外面ともに淡黄色の施釉。胴部は緩く屈曲し、口縁部は外反する。九州陶磁の編年でⅡ期に相当する。6～12は4層出土。6は丸瓦で、焼成は良く、胎土も密。凸面は縦ミガキ、凹面は未調整で吊紐痕が見える。側面端部は2面切りをしている。厚さが29cmあり、厚手である。7は平瓦で、焼成はやや悪く、胎土もやや粗く1～2mm程度の長石を多く含む。凸面は未調整で、凹面の周辺は辺に沿ったナデ、中央部は幅2.2cm程度の工具で横ナデをしている。8は器種不明の瓦。焼成は悪く、胎土も粗く3mm程度の長石を含む。内外面との風化のため調整は不明。9は磁器の皿か。内外面ともオリーブ色の釉薬がかけられる。口縁の内側は少し膨らむ。須佐青磁の可能性もあるが、断定はできない。10は肥前陶器の鉢。内面は灰黄色の施釉の上に、鉄釉により模様が描かれている。外面の下部は露胎となる。九州陶磁の編年でⅡ期に相当する。11は陶器の鉢。残存高6.7cm、口径は復元で17.6cmを測る。内面は露胎であるが、外面は自然釉がかかる。胎土はやや粗く1mm大の長石が含まれている。産地は不明である。12は溝から出土した土師器灯明皿。器高1.8cm、復元口径は9.0cm、復元底径は5.7cm。口縁端部には煤が付着している。

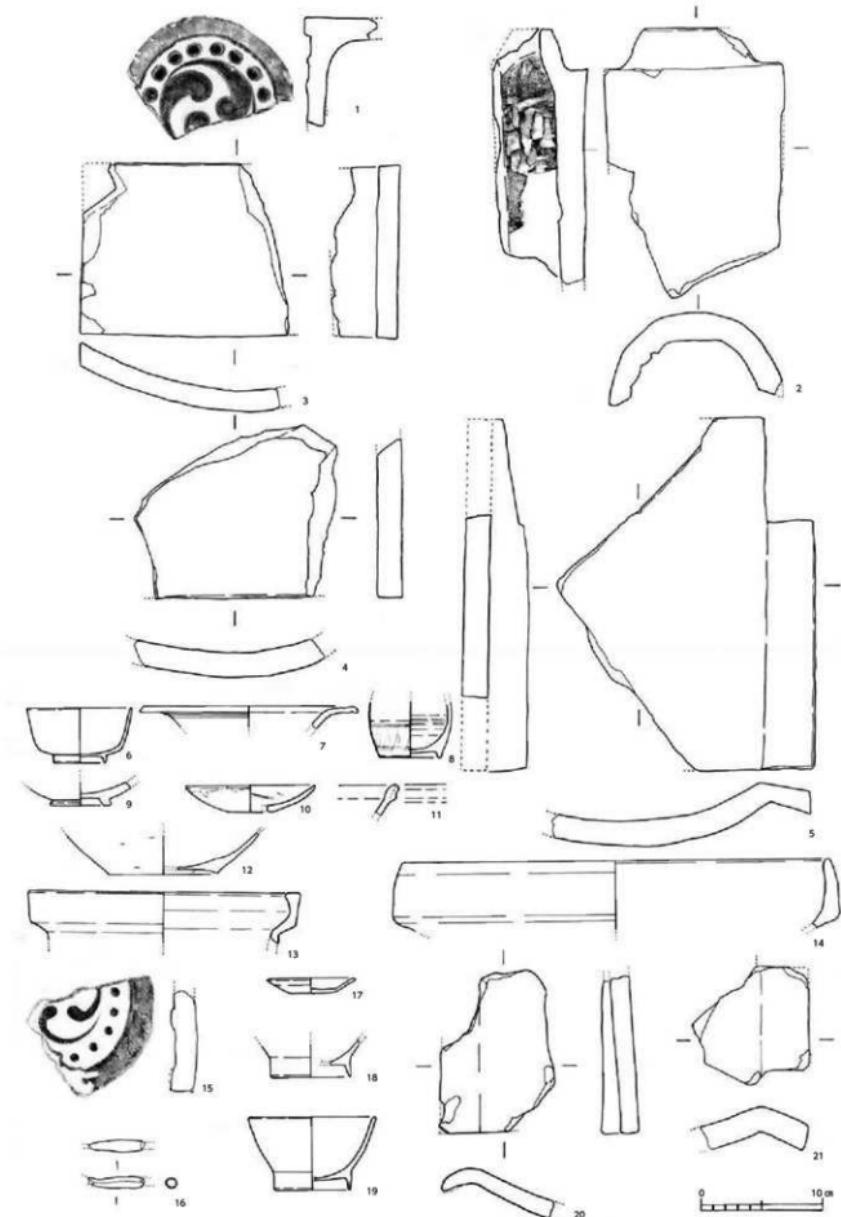
第50図13～16はトレンチ1-2出土遺物。13・14は1層出土。13は磁器の碗。残存高4.7cm、底径は復元で4.5cm。高台は疊付を除いて前面施釉され砂目が付く。外面には青色による模様が見える。17世紀中頃のものか。14は陶器の溝縁皿。残存高2.25cm、口径は復元で12.0cm。内面及び外面上部を施釉し、外面下部は露胎である。九州陶磁の編年でⅡ期に相当する。15は2層出土の丸瓦で焼成は良く、胎土はやや粗く1mm程度の長石を含む。凸面は0.9cm四方の格子タタキ、凹面は未調整で吊紐痕が見える。側面端部は段部から大きく面取りしている。16は地山面のPit出土の棧瓦の棧部分。焼成は良く銀化し、胎土も密である。

第51図は中ノ門谷部トレンチ2出土。1は2層出土の軒丸瓦A-3類F。焼成は良く、胎土も密。瓦当にはキラコが付着する。丸瓦部の凸面調整は縦ミガキか。2～14は6層出土。2は丸瓦で焼成はやや悪く、胎土は密で1mm程度の長石を含む。凸面は縦ミガキ、凹面は未調整でコビキBと吊紐痕が見え、一部で工具が当たったような跡がある。3は敷平瓦で、焼成も良く、胎土も密。凸面調整は前面及び側面は辺に沿った工具によるナデ、後面と中央部は工具による横ナデとなる。調整をみると、平瓦の形での調整後に半裁しているように思われる。凹面調整は横ナデ。4は平瓦で、焼成は良く、胎土も密である。凸面は未調整、凹面は横ナデ。5は左棧瓦。焼成は良いが、胎土はやや粗く1～2mm程度の長石を含む。長さは28.8cmを測る。凸面調整は風化により不明、凹面は横ナデか。6は磁器の小碗。器高4.45cm、復元口径8.6cm、底径4.4cm。二次被熱を受けたためか、軟質な印象を受ける。全面施釉で、外面には青色で山と鳥を描いている。7は磁器の仏花瓶か。口径は復元で17.8cm、肥前系か。8は肥前系磁器の德利底部。残存高4.6cm、底径は5.0cm。内面及び疊付は露胎で、外面は青色で線描きによる模様を描いている。内面の底には絞ったような痕跡がある。9は肥前系陶器の碗底



第50図 中ノ門谷部トレンチ1 出土遺物実測図 ($S = 1/4$)

部。底径は4.9cm。内面は施釉で貫入があり、外面は露胎である。10は陶器の皿。器高は2.2cm、復元口径10.6cm、復元底径は3.6cmを測る。内面及び外面口縁部は施釉、外面体部から底部は露胎する。内面には2条の線が見える。产地は不明である。11は須佐焼の擂鉢口縁部。口縁上端に面は持たず、佐伯編年I群D類か。12は石見焼の土瓶底部。底径は8.9cm。内面は並釉、外面は露胎である。胎土に1mm程度の黒色粒子を多く含む。外面はケズリ調整で煤が付着している。13は器種不明の瓦質土

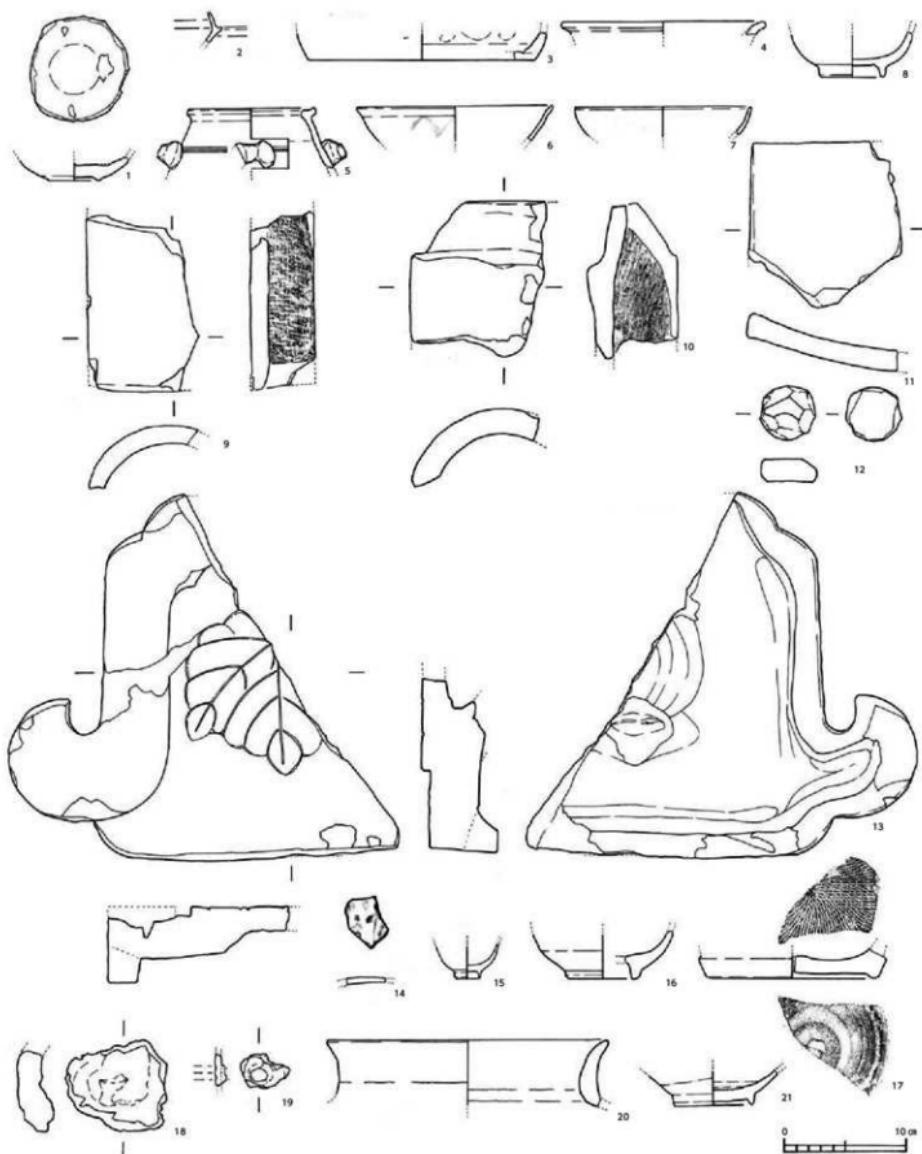


第51図 中ノ門谷部トレンチ2 出土遺物実測図 ($S = 1/4$)

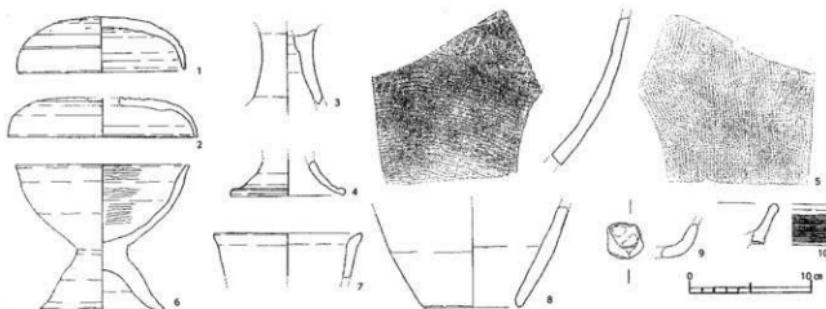
器。口縁部は復元で22.0cm。焼成は良く、胎土も密。内面はナデ、外面はミガキ。14はほうろくで、口径は復元で35.0cmを測る。15～19は7層出土。15は軒丸瓦A-3類B。焼成は悪く、胎土も粗く1～3mm程度の長石を含んでいる。瓦当裏の外周は強いナデにより窪んでいる。16はキセルの雁首部。金属板のつなぎ目が見え、また筒状の木質も遺存している。17は土師質の灯明皿。器高1.2cm、口径7.0cm、底径3.4cm。口縁端部に煤が付着し、底部には糸切痕がある。18・19は肥前系磁器の広東碗。19は器高5.9cm、口径は復元で10.2cm、底径は6.2cmである。見込みに鳥、外面には鳥及び植物が描かれている。20・21は8層出土の棟瓦。20は右棟瓦で焼成は良く、胎土も密である。凸面調整は風化により不明、凹面は横ナデか。棟部が短く、また厚さは1.4cmと薄手である。21は左棟瓦で焼成は良く、胎土も密でわずかに長石を含む。棟部はしっかりしており、厚さも2.1cmある。

第52・53図は中ノ門谷部トレント3出土。第52図1は1層出土の肥前陶器の碗。残存高1.7cm、底径4.2cm。内面は施釉で胎土目がある。残存部の外面は露胎である。九州陶磁の編年でI～2期に相当する。2～13は2層出土。2は須恵器の坏身の口縁部片。口縁は内傾して立ち上がる。3は須恵器の短頸壺の底部か。復元底径は18.5cmを測る。内面はナデで指頭圧痕があり、外面は回転ヘラケズリである。4は須恵器の壺の口縁部か。焼成は悪く軟質である。口径は復元で16.7cm。5は福建省磁窯(じそう)窯の褐釉四耳壺。焼成は良く、胎土は密で1mm以下の黒色粒子を含み、灰赤色を呈する。残存高は4.9cm、口径は復元で10.2cm。口縁部上面はナデにより凹み、外面には2条の沈線が入る。12世紀頃か。6は蓮弁紋の青磁碗。口径は復元で16.0cm。7は磁器の皿。復元口径は14.4cm。内面には植物が描かれている。8は肥前系陶器の碗。残存高は3.7cm、底径は復元で5.2cmを測る。内外面に白色の刷毛目文があり、疊付は露胎である。九州陶磁の編年のⅢ期にあたる。9は丸瓦で、焼成は良く、胎土は密で1mm程度の黒色粒子を含んでいる。凸面は継ミガキ、凹面は未調整でコビキBとゴザ目が見える。10も丸瓦で、焼成はやや悪く、胎土もやや粗く5mm程度の長石も含まれる。凸面調整は格子タタキ後継ミガキか、凹面は棒タタキと吊紐痕がある。側面端部は段部から一連で面取りをしている。11は平瓦。焼成は普通で、胎土は密だが、石英や雲母が含まれており、器面がキラキラしている。風化により調整は不明である。12は円盤状瓦質品。平瓦を打ち欠いて、直径4.5cmの円盤状に仕上げている。重量は40g。13は家紋鬼瓦。松井松平家の家紋である蔦が中央に配される。焼成はやや悪く、胎土もやや粗く2mm程度の長石が多く含まれる。裏面は削り出しではなく、粘土帯を接合させている。なお、松井松平家は1649～1759年及び1769～1836年の間、浜田城を治めるが、焼成や胎土の様相から18世紀以前のものと思われる。14～18は3層出土。14は漳州窯の大皿の口縁部付近か。15は磁器の小碗。残存高2.6cm、底径は2.0cm。外面には桜や旭日が配されている。昭和のものか。16は陶胎染付の碗。底径は復元で5.4cm。17は須佐焼の擂鉢。外面底部にカンナ痕がある。18は椀型鍛冶澤である。本炭痕は見られない。重量は440g。19・20は4層出土。19は須恵器の把手付鉢か。20は土師器の壺。口径は復元で23.0cm。風化が激しく、内外面とも調整は不明。21は5層出土の8類の白磁碗。残存高2.8cm、底径は6.3cm。見込み周辺の釉を掻き取る。外面体部下半から底部にかけては露胎である。

第53図1～9は6層出土。1・2は須恵器の坏蓋。1は器高4.5cm、口径13.6cm。口縁端部に内傾面をもつ。外面体部中位に1条の沈線が巡り、体部上部は反時計回りの回転ヘラケズリがはいる。2は器高2.9cm、口径は復元で15.3cm。口縁端部は内傾面をもつ。天井部は平坦で、外面に板状压痕が見られ、いわゆる石見型と呼ばれるものである。3は須恵器の高坏脚部片。透かし部分で破損しているが、透かしは3方にあると思われる。外面はカキメ後に回転ナデをしている。4も須恵器の高坏脚部片。残



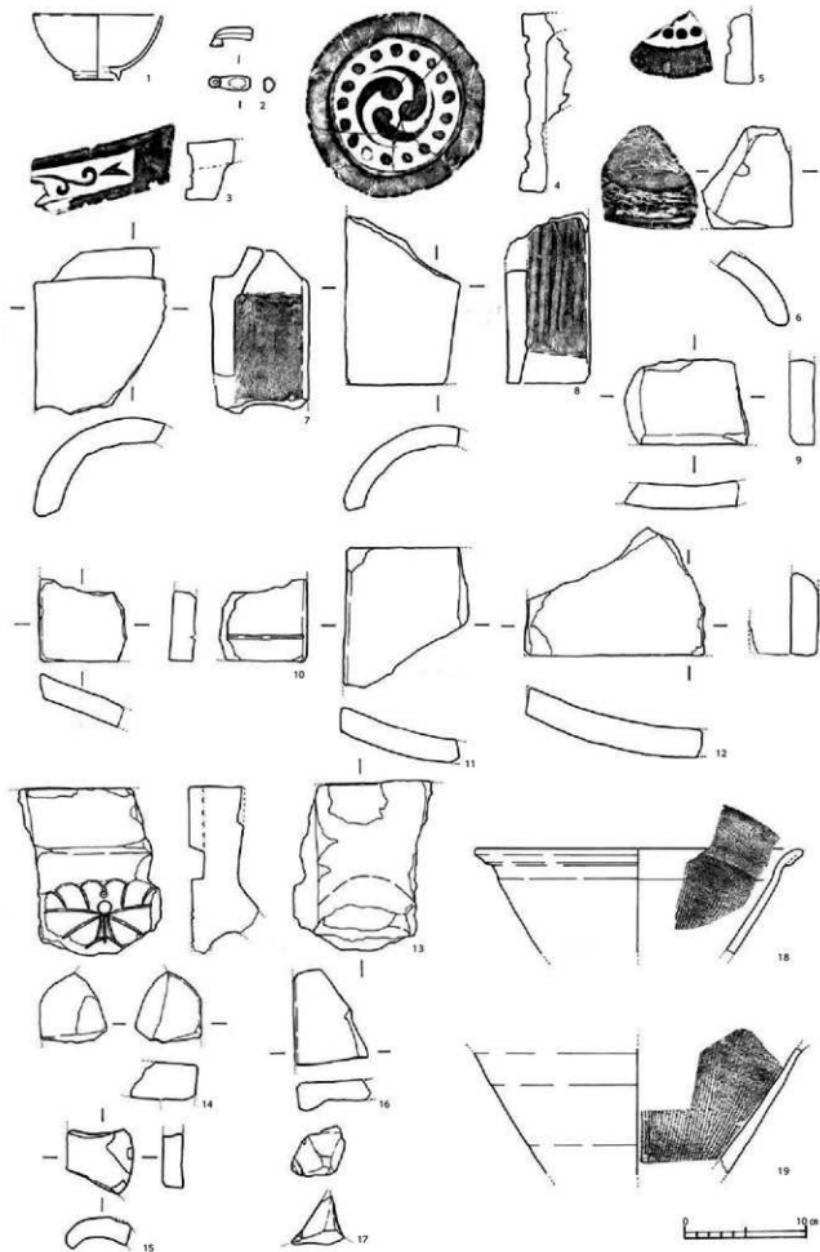
第52図 中ノ門谷部トレンチ3 出土遺物実測図1 (S = 1/4)



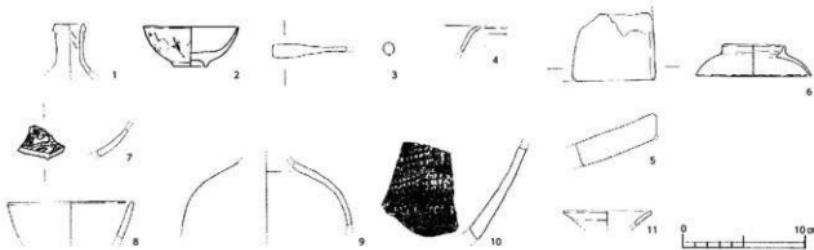
第 53 図 中ノ門谷部トレーナー 3 出土遺物実測図 2 (S = 1/4)

存高は 2.8cm、底径は復元で 9.2cm を測る。脚端部は丸くおさめる。5 は須恵器の甕の体部片。内面に当て具痕、外面はカキメの後に格子タタキをしている。6 は土師器の高坏。器高 11.9cm、口径 13.8cm、底径 9.8cm。外面調整は風化により不明、内面は丁寧なミガキがなされる。7 は土師器の小型の甕か。口縁は復元で 12.1cm。風化により内外面とも調整は不明。8 は土師器のコシキ。底径は復元で 7.6cm。風化により内外面とも調整は不明。9 は土師器のミニチュア製品か。内面には指頭圧痕が見られる。外面の調整は風化により不明である。10 は 8 層出土の弥生土器の甕口縁部。複合口縁となっており、外面には 12 条の擬凹線がある。内面はナデである。

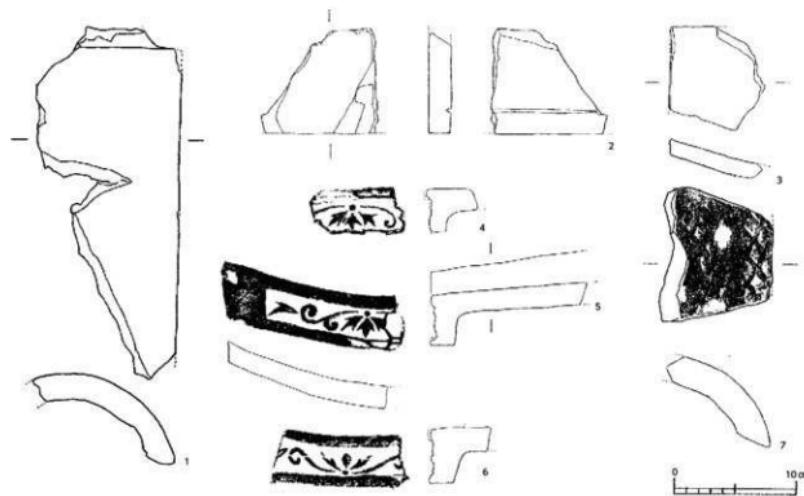
第 54・55 図は中ノ門谷部トレーナー 4 出土遺物。第 54 図 1 は 2 層出土の肥前系磁器の碗。器高 5.3cm、復元口径 10.4cm、復元底径 3.6cm を測る。豊付を除いて施釉され、見込と外面に植物などの文様を描いている。2 は 2 層出土の銅製キセルの雁首部分。銅板の接合痕が確認でき、また吸口の竹と思われる木質も残っている。3～19 は 3 層出土。3 は軒平瓦の下向三葉文 B 類 A。焼成は良く銀化し、胎土は密。瓦当にはキラコが付着している。瓦当は顎貼付で作られ、厚さは 2.5cm 程度あり厚手の印象を受ける。4～6 は軒丸瓦。4 は A-4 類 A。焼成は良く、胎土も密で 2mm 以下の長石や黒色粒子が含まれる。5 は A-5 類 A。焼成はやや悪く、胎土もやや粗く 1～2mm 程度の長石を含む。6 は軒丸瓦の瓦当上部片。焼成は悪く、胎土も粗く 2mm 程度の長石や 4mm 程度の褐色粒子も含む。凸面・凹面とも風化により調整は不明。文様区上辺にあたる箇所にカキヤブリが見られる。7・8 は丸瓦。7 の焼成は良く、胎土も密。凸面は継ミガキ、凹面は未調整でコビキ B が見える。8 の焼成は良く、胎土も密。凸面は継ミガキ、凹面にはコビキ B と棒タタキの痕跡がある。9 は敷平瓦か。焼成は良く、胎土も密である。凸面は工具による横ナデ、凹面は丁寧な横ナデがなされている。凹面前端部を面取りする。10～12 は平瓦。10 の焼成は良く、胎土も密。凸面調整は横ナデで、幅 4mm の 1 条の沈線が入っている。凹面は未調整と思われ、通常の平瓦の調整とは異なっており、他の用途がある可能性がある。11 の焼成はやや悪く、胎土もやや粗く 1mm 程度の長石を多く含む。凸面・凹面とも風化により調整は不明。12 の焼成は良く、胎土も密で 1mm 程度の長石などを含む。凸面は未調整、凹面は横ナデ。厚さが 2.4cm と厚手である。13 は家紋鬼瓦。松井松平家の家紋である萬の上部。焼成はやや悪く、胎土もやや粗く 3mm 程度の長石を多く含んでいる。萬の輪郭は型押しと思われるが、葉脈の線はヘラ書きされている。瓦上部の線は粘土板の貼り付けにより作られている。裏面の調整は風化により不明瞭ではあるが、しっかりとした調整はなされていない。14 は鬼瓦片。焼成と胎土は 13 と同様である。15～17 は器種不明の道具瓦。15 の焼成はやや悪く、胎土は密で長石を含む。形状は棟瓦の棟部分に似る



第54図 中ノ門谷部トレンチ4 出土遺物実測図1 ($S = 1/4$)



第55図 中ノ門谷部トレンチ4 出土遺物実測図2 (S = 1/4)



第56図 中ノ門谷部トレンチ5 出土遺物実測図 (S = 1/4)

が、丸みをもっている。内外面の調整はミガキである。16の焼成は良く、胎土も密。平瓦の凹面側の側面に突起をもつ形状となる。凸面側に側端部は面取りをしている。両面ともナデ調整である。17の焼成はやや悪く、胎土は密。四角錐が脚部状についている。18・19は須佐焼擂鉢である。

第55図1～3は3層出土。1は陶器の瓶類口縁部。口径は2.4cm。内外面に鉄軸がかかる。頸部内面には絞り痕がある。2は磁器の小壺。器高3.3cm、復元口径7.8cm、底径2.8cmを測る。外面に文字が記されているが、町の一文字しか判読できない。3は銅製キセルの吸口部である。4は4層出土の肥前系陶器の小壺口縁部片。内外面施釉され、貫入が見られる。5～11は5層出土。5は平瓦で、焼成はやや悪く、胎土もやや粗く1mm以下の長石や石英が多く含んでいる。側面をわずかに面取りする。風化により調整は不明である。6は磁器の端反碗の蓋か。器高2.5cm、復元口径9.3cm、復元蓋径は5.0cm。内面には3条の線、外面には松が描かれている。7は肥前系磁器の皿の体部。内面に唐草が描かれている。8は陶胎染付の碗口縁部。口径は復元で10.2cm。外面に植物が描かれている。9は肥前系陶器

の壺体部片。内面は露胎で回転ナデ、外面はオリーブ色の釉がかかる。10は肥前系甕の体部片。内面に格子目タタキがあり、外面は鉄釉がかかる。11は土師質の灯明皿。口径は復元で72cm。口縁端部に煤が付着する。

第56図は中ノ門谷部トレンチ5出土。1は2層出土の丸瓦で、焼成は良く、胎土も密である。凸面は格子タタキ後継ミガキ、凹面は未調整でコビキBと吊紐痕が残る。側面端部は段部から続く面取りと設置面の面取りと2面切りとなる。2は4層出土の平瓦で、焼成は良く、胎土も密。凸面調整は丁寧な横ナデで、幅3mmの1条の沈線が入っている。凹面も横ナデがはいる。3も4層出土の平瓦。焼成は良く、胎土も密。凸面は未調整、凹面はナデ。厚さが1.4cmと薄手である。4は5層出土の軒平瓦の下向三葉文B類B。焼成は良く、胎土も密。瓦当にはキラコが付着する。5は7層出土の軒平瓦の下向三葉文B類B。焼成は良く一部は銀化する。胎土も密である。瓦当にキラコがみえる。凸面は未調整、凹面の側部は継ナデ、中央部は横ナデである。6・7は9層出土。6は軒平瓦の上向三葉文B類A。焼成は良くなく、胎土もやや粗く1~2mmの長石を含む。7は丸瓦。焼成はやや悪く軟質で、胎土は密である。凸面は格子タタキ後継ミガキと思われるが、一次調整の格子タタキがよく残っている。凹面は未調整でコビキBと吊紐痕が残る。側面端部には幅広い面取りが見られる。厚さは2.4cmあり、厚手である。

(3)中ノ門谷部調査の小結

中ノ門谷部では5箇所のトレンチを設定して調査を実施した。トレンチ1は井戸上部の平坦面にあたり地山面に溝と土坑1基を検出したが、井戸に付随する遺構であるかは不明である。トレンチ2では、近世後期の旧表土を検出したが、階段など道に関わる遺構の検出はなかった。おそらく近世の道は、トレンチ2の南側に存在していた可能性が高い。トレンチ3は谷の中央にあたり、近世の旧表土を検出した。このトレンチの箇所は近世の道であった可能性が高いが、石敷きや排水路などの遺構は検出されなかったため、浜田城の登城道はしっかりととした舗装はされなかつた可能性がある。なお近世の面は古墳時代の須恵器や土師器が包含する土をもって造成をされており、城山東麓には古墳時代の集落が存在していた傍証となる。また最下層では弥生時代後期の土器も出土している。トレンチ4では、4層上面で石列および土坑2基を検出した。近世遺構と考えられるが、その性格は不明であった。また井戸の延長線上にあたる箇所に水路を検出した。トレンチ5では、近世の石垣を検出した。この石垣は上部が破壊されているが、築石の規模は付近にある中ノ門石垣の築石の大きさと比べ遜色はなく、矢穴も確認される。築石の背面には、裏込も確認され、裏込には瓦が包含されている。瓦の中には棟瓦が含まれることから、近世の後半頃に修理がなされた石垣であると判断される。なおこの石垣は石垣補修図には描かれていないが、中根家の城下絵図には石垣とともに番所が2棟描かれており、それぞれ「上バン」、「下バン」と記されている。石垣の上部は撤去されているが、石垣より北側の平地は9m程度の奥行きをもっていたことが推定できる。この平地では礎石を1基検出したが、近代以降の可能性を考えている。

第4節 浜田護国神社南斜面部調査の成果

(1)浜田護国神社南斜面部の調査

城山公園整備では、該当地の既存遊歩道を公園アスファルト舗装とし、また一部に転落防止柵を設置する計画となっていた。現在の既存遊歩道は、近世に庭園が広がっていた城山南麓からつづら折りにより浜田護国神社が立地する城山中腹まで続いており、この道が近世まで遡るかを判断するため2箇所にトレントを設定した。



第57図 浜田護国神社南斜面部トレント配置図 ($S = 1/1,000$)

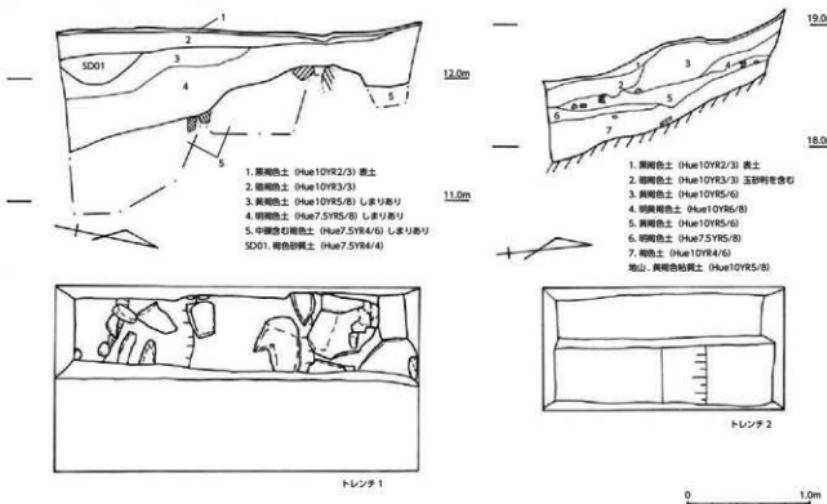
(ア)浜田護国神社南斜面トレント1

現在は平地であるが、昭和30年代に設置された失業対策事務所があった平坦地の東に位置する遊歩道上に長辺（南北）3m × 短辺（東西）1.5mの調査区を設定した。表土下には2層となる暗褐色土が堆積し、ガラスやプラスチックが出土する。2層下には、南側にしまりのある黄褐色土（3層）、北側にはしまりのある明褐色土（4層）が堆積し、3層上面で北東 - 南西方向の溝SD01を検出した。溝の肩はしっかりとなく、砂質土が堆積することから、谷からの水の流路の可能性がある。SD01からはビニールが出土している。3層以下からは遺物は出土せず、また流紋岩の大・中角礫が含まれる層となり、時代は判別できないが、谷上方からの崩落土が堆積している。

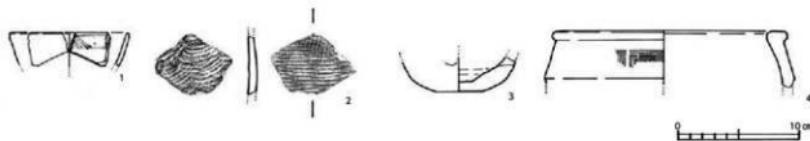
現在の遊歩道は、3層と4層をカットして平坦面を作り出しており、江戸時代の道の痕跡は確認できなかった。

(イ)浜田護国神社南斜面トレント2

現在の外周管理道下側に長辺（南北）2m × 短辺（東西）1mの調査区を設定した。地表から約60cm下の地山に至るまで、しっかりと路盤をもつ層は確認されず、また地山直上の7層からもガラスが出土するなど、江戸時代の道の痕跡は確認されなかった。



第58図 浜田護国神社南斜面部トレンチ 平面図・土層図 (S = 1/40)



第59図 浜田護国神社南斜面部トレンチ 出土遺物実測図 (S = 1/4)

(2)浜田護国神社南斜面部の出土遺物

第59図1～3はトレンチ1出土遺物。1は1層出土の肥前系磁器の碗。口径は復元で10.4cm。内面口縁付近に四方捺文を書き、外面は青磁釉がかかる。九州陶磁編年のIV期にあたる。2は2層出土の須恵器の甕体部片。内面は當て具痕、外面は平行タタキである。3はSD01出土の須恵器のハソウ底部片。外面ははっきりとした調整は見えず、ヘラ切り後にナデがはいっている。内面は回転ナデである。穿孔も確認できる。

第59図4はトレンチ2の1層出土。土器の火鉢口縁部である。胎土が粗く長石や金雲母、赤褐色粒子などが多く含まれている。口径は復元で18.0cmを測る。内面は回転ナデ、外面は回転ナデ後に浅く雷帶文が彫られている。時期や産地は不明である。

(3)浜田護国神社南斜面部の小結

浜田護国神社南斜面部では2箇所のトレンチを設定して調査を実施した。両トレンチにおいて、江戸時代の道の痕跡は検出されなかった。地域の方の話では、これらの道は昭和30年代に失業対策事務所から浜田城に登る道として整備されたと言われており、発掘調査の結果からも首肯できる。

第5節 庭園部調査の成果

(1)庭園部の調査

(ア)調査地の概要

調査地は浜田城山の南麓にあたり、近世時には庭園として利用されていた。近世の絵図には、浜田川に続く池と大小2つの島が描かれ、大きい島は「中嶋」や「茶屋」の記載がある。近代になると、該当地は管理者がいなくなつたため、一時荒蕪地となつたが、明治初め頃に民間により掬翠亭が建設される。その後、明治23年に松平家の所有地となり、明治40年には池の南側に、後の大正天皇の山陰行啓時の宿泊施設として御便殿が建設される。この御便殿建設を契機として、庭園は御便殿と一緒に管理されたと考えられるが、御便殿の所有者が度々かわるため、近代以降の庭園の改修については定かでない。近世から続く池と島は、昭和40年頃の国道9号線工事の残土により埋め立てられ、現在のような平地となつた。

なお、該当地は、御便殿の曳き移転及び宗教法人の教会新築工事に際して、平成12年及び平成18年に浜田市教育委員会により発掘調査が実施され、中嶋と池の輪郭や水門と考えられる石垣が確認されている。遺物に関しては、近世のものは少なく、大半が近現代のものである。近世のものが少ないので、庭園として維持管理されていたことに起因すると考えられている。

(イ)近世の庭園

城下町絵図を見てみると、古田家時代（1619～48）の絵図には、該当地に庭園は描かれていない。次の前期松井松平家（1649～1759）の絵図には、池や島の表現はないが、「片庭御茶屋」とある。本多家時代（1759～69）の絵図には、浜田川に続く池と島1つ描かれ、島には「中嶋」と記載され、東側に橋が架かる。浜田川との合流地点には「船藏」、池のくびれ部には「水門」と表記され、柵門が描かれている。「水門」の下には、「潮入」の記載がある。

後期松井松平家時代（1769～1836）の絵図には、浜田川に続く池と大小2つの島が描かれる。大きい島は西側にあり、高床式の建物2棟、松3本、橋2基が描かれる。橋は西側と北側に架かっている。小島は東側にあり、祠のような小型の建築物が描かれている。橋は東側に1つ架かる。最後の越智松平家時代（1836～66）の絵図には、浜田川に続く池と大小2つの島が描かれている。大きい島は西側にあり、平面形を表したと思われる四角形の枠内に「茶屋」と記載され、橋が西側に1つ架かっている。小島は東側にあるが、建物の表記はなく、橋が東側に1つ架かるのみである。なお、池の南岸にも、「茶屋」の表記とともに平面形で建物が描かれている。

文献史料では、「松井家家譜」（浅野家）に、「寛文三年ノ秋ヨリ内片庭へ御茶屋被成御立候付侍屋敷四五軒河原町御引セ御普請出来 島（嶋）ノ御茶屋唐笠茶屋坪（など）ト名ツケ都合七ヶ所ニ御茶屋有之候 御船モ屋形二艘被仰付…」とあり、寛文3年（1663）秋に造営のための普請が行なわれ、延宝3年（1675）3月に作事に入り、延宝4年4月に完成したとされている。

また天保年間の「浜田表動向役人衆江文通知扣」（堀家文書）に、堀家当主が茶屋で藩主に御目見えして、中島で饗宴が行われた様子が記され、茶室の一部が平面図で示されている。また「中之嶋茶屋」と「本御茶屋」の表記があり、池の南岸の茶屋は「本御茶屋」と呼ばれていることがわかる。

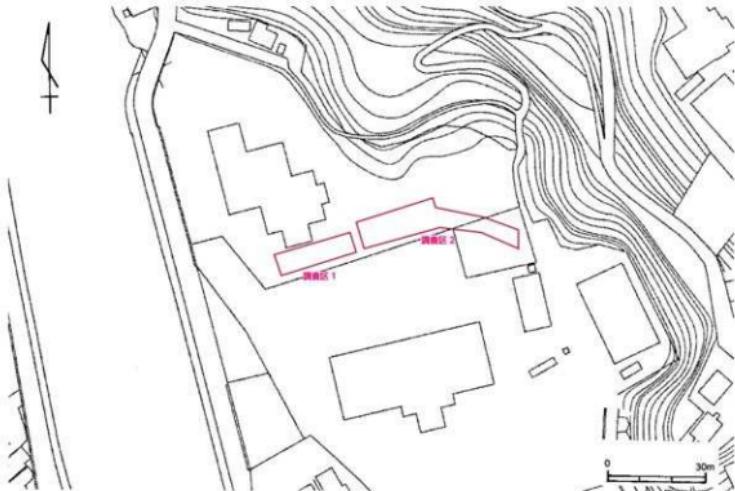
また、島（嶋）ノ御茶屋については『明治9年浜田縣事務引渡書』から茶室の規模（20坪）や管理状況が明らかとなっている。

上記より、古田家時代の庭園の存在は不明であるが、前期松井松平家時代に該当地に茶屋が作られ、越智松平家時代には、重要な来客を要す空間として機能していたことがうがえる。

また、これらの絵図より庭園は池泉回遊式庭園とされている。

(ウ)発掘調査について

城山公園整備では、該当地に国道9線へつながる進入路工事が計画をされていた。発掘調査は進入路が建設される路線上を排土の問題等から2つの調査区に分けて実施した。なお、基本的に進入路工事は、既往調査に基づき、遺構を破壊しない設計となっていたため、完掘はせず、遺構面の検出に止めた。ただし、一部で保護層が確保できない箇所があったため、施工者との協議を重ねたが、計画変更不可となり、その箇所については工事の影響が及ぶ深度まで掘削を実施した。なお、既往調査により遺構面までの深さが判明していたため、表土や造成土の除去は平爪を装着したバックホウを使用し、面的に掘り下げを行っている。

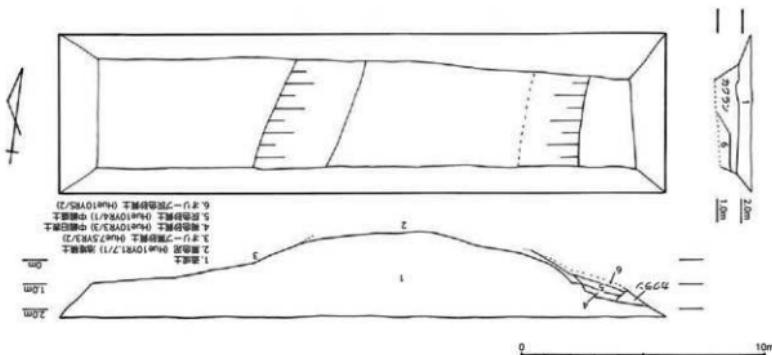


第60図 庭園部調査区配置図 ($S = 1/1,500$)

調査区1

進入路部分の西側に長辺(東西)25m × 短辺(南北)6.5mの調査区を設定した。既往調査によれば、池及び島の検出が想定される場所にあたる。

調査区西側においては、表土下1.4mで旧表土となるオリーブ黒砂質土(3層)を検出した。3層上面に遺構は確認できず、3層からは近現代の陶器器やスレートが出土することから、昭和40年代の埋立前の旧表土となる。調査区中央では、表土下3.4m程度から黒色泥層(2層)が検出され、池の堆積土である。調査区東側では、表土下70cm程度で中嶋の旧表土である褐色砂質土(4層)が検出された。4層は西に向って下方に傾斜していることから島の法面部分の検出と考えられ、中嶋の中心側となる東側では造成時の擾乱が認められた。4層より下は中嶋の盛土となり、灰色砂質土(5層)、貝混オリーブ灰色砂質土(6層)が堆積している。5層・6層からは遺物は出土しなかった。既往調査では、中島の縁には杭列が検出されているが、本調査区においては検出されなかった。また、当初は島の北西隅が確認できる想定であったが、島は調査区内で屈曲はしないで北へ続くことが確認された。



第61図 庭園部調査区1 平面図・土層図 (S = 1/200)

調査区2

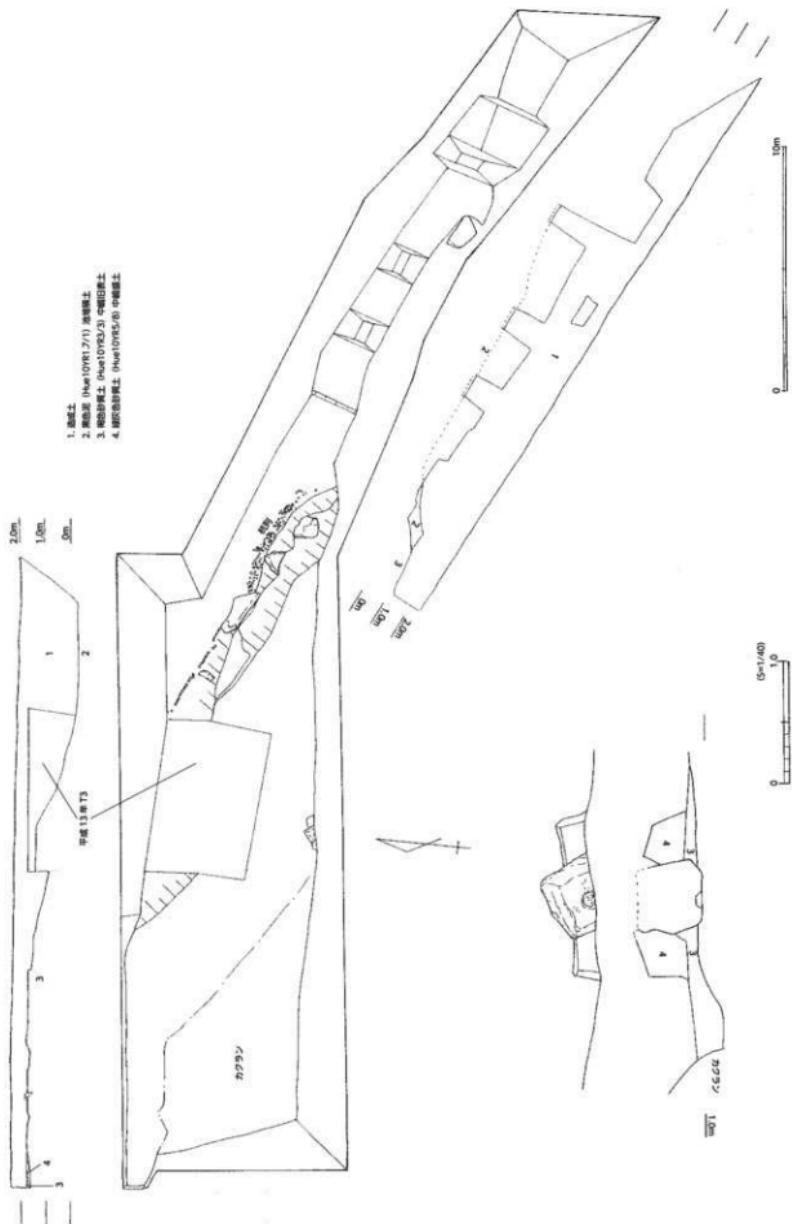
進入路部分の東側に、進入路の形状に合わせ、直線部分に長辺（東西）25m × 短辺（南北）9m、カーブの部分に長辺（北西 - 南東）28m × 短辺（北東 - 南西）5mの調査区を設定して一続きで調査を実施した。既往調査によれば、池及び大小の2つ島の検出が想定される場所にある。

調査区西の北側においては、調査区1で検出した中嶋の旧表土である褐色砂質土（3層）が検出されたが、西側の南では大規模な擾乱が見られた。3層の下には、緑灰色砂質土（4層）が堆積し、島の盛土となる。また、調査区の中央北側には、平成13年に調査された試掘トレンチ3が検出された。

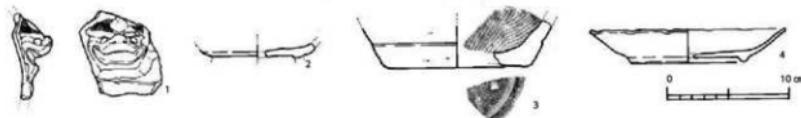
3層は調査区中央あたりでは北西 - 南東、調査区中央南端ではやや南に振れる方向で下方へ傾斜していく、法面となる。法面の下端は中嶋の縁にあたり、既往調査でも確認されていた杭列が検出された。杭列は約10mの長さで検出され、途中にある巨石前面では検出されなかった。巨石より西側は1列、東側2列ないし3列とやランダムな形で打ち込まれている。また法面中に巨石が張り付いた状態で検出され、盛土の土止めの役割を担っていたと想定され、明治40年頃の該当地の絵葉書（写真図版14参照）にも、同じ石材が確認できる。なお、この絵葉書には、中嶋内に樹木が植生されている様子が見え、3層には樹根も多く確認できる。

調査区中央西側の南壁では、礎石を1基検出した。調査区外まで続くため、半分程度しか検出していないが、断面台形で上面が40cm四方、下部が50cm四方の規模と思われる。上面中央には12cm四方、深さ10cmの穴が1箇所ある。礎石の掘方は、4層上面にあることから、近世に遡る可能性もある。

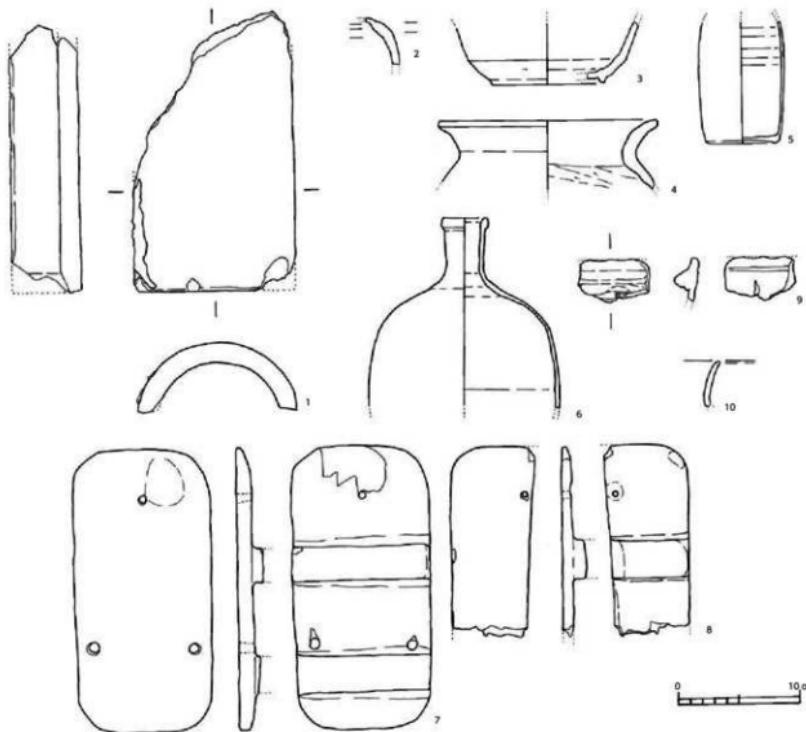
調査区東側は、厚い造成土下に池の堆積層である黒色泥層（2層）が検出され、池部分であった。当初は、絵図などに中嶋の東側に描かれている小島の検出が想定されていたが、調査区内で小島の検出はなかった。



第62図 庭園部調査区2 平面図・土層図 (S = 1/200)



第63図 庭園部調査区1 出土遺物実測図 ($S = 1/4$)



第64図 庭園部調査区2 出土遺物実測図 ($S = 1/4$)

(2) 庭園部の出土遺物

第63図は調査区1出土遺物。1は1層出土の瓦質土器の火鉢。焼成は良く、胎土も密。内面は回転ナデと獅子を張り付ける際の指頭圧痕がみえる。外面の獅子の取手は器面に貼り付けられている。2は2層出土の須恵器の壺。高台部は破損している。胎土には1mm程度の白色粒子が含まれる。3は2層出土の須佐焼擂鉢。底径は復元で11.2cm。内面には擂目が入り、外側調整は回転ケズリ。外面底部にはカンナ痕が確認できる。4は3層出土の磁器の輪花皿。内面には水墨画のような庭園の風景、外面にはスタンプにより文様が描かれている。明治時代以降のものであろう。

第64図は調査区2出土遺物。1は1層出土の丸瓦。焼成は良く、胎土はやや粗く6mm程度の長石を含む。近代の瓦と思われる。2は1層出土の須恵器の長頸壺か。内面は回転ナデ、外面はカキメで肩部に自然釉がかかっている。3～8は2層出土。3は須恵器の壺底部。残存高5.0cm、底径は復元で9.2cmを測る。内面は回転ナデ、外面の体部は回転ナデ、底部付近は回転ヘラケズリであり、稜がある。高台は貼付か。4は土師器の甕。口径は復元で18.0cm。内面頸部以下はケズリ、内面口縁部から外面にかけての調整は風化により不明である。5は磁器の徳利。残存高10.0cm、底径5.4cm。底部以外は施釉され、外面は網目模様となる。外面底部に「新町角次」の墨書きがある。6は陶器の徳利。口径は3.6cm。全面並釉で、外面には鉄釉で「かど」の2文字が残っている。石見焼である。7・8は一木造りの連歯下駄。7は長さ23.3cm、幅11.3cm。前側は指跡で凹んでいる。8は残存長15.7cm、残存幅6.8cm。復元すると7とほぼ同一の大きさとなる。9は4層出土の繩文土器の浅鉢。内面に断面三角形の突帯が巡り、外面には1条の浅い沈線がはいる。10は排水出土の弥生土器で、複合口縁の甕口縁部である。風化により内外面とも調整は不明である。

(3) 庭園部調査の小結

調査の結果、中嶋及び池の輪郭を追認することができた。特に調査区2の中嶋法面の状況などは、明治40年頃の古写真とも整合性がある。ただ、中嶋の中央部となる調査区1の東側及び調査区2の西側には大規模な攪乱が見られた。古写真では中嶋中央部に小山が写っており、この小山は後世の削平を受けていることも確認できた。

遺物に関しては、近世のものは少なく、大半は近代以降のものであった。既往調査においても指摘されているように、近世時は庭園として維持管理がなされていたことに起因するかもしれない。

【参考文献】

岩町功 2018 「旧浜田藩邸の『庭園』・『抱翠亭』及び『御便殿』関係記事集録」『郷土石見』No.106

岩本真実 2019 「石見地域における須恵器の編年と地域性 -「石見型須恵器」再考-」『国家形成期の首長権と地域社会構造』鳥根県古代文化センター研究論集第22号

江戸道路研究会編 2001 「図説 江戸考古学研究事典」柏書房

九州近世陶磁器学会 2000 「九州陶磁の編年」

佐伯昌俊 2010 「近世須佐焼に関する一考察」『山口考古』第30号 山口考古学会

鳥根県古代文化センター 2017 「近世・近代の石見焼の研究」

鳥根県教育委員会 1997 「石見の城館跡」

浜田市教育委員会 2007a 「浜田城跡（庭園跡の調査1）」

浜田市教育委員会 2007b 「浜田城跡（庭園跡の調査2）」

浜田市教育委員会 2014 「鳥根県浜田市遺跡地図VI 浜田市旭町重宮試掘調査」

浜田市教育委員会 2015 「平成26年度 浜田市内遺跡発掘調査報告書」

第5章 浜田城跡の軒瓦分類

第1節 対象の瓦

浜田城跡は城山公園として市民に親しまれており、今まで多くの人が訪れている。そのため、一般の方により採集された瓦が浜田市浜田郷土資料館（以下、資料館）や浜田市教育委員会に寄贈されている。その中には昭和30年代の注記がされているものもある。

また寄贈資料の他にも、浜田市教育委員会における継続的な分布調査による表採資料もある。

今回は様々な経緯で表採されてきた浜田城跡の瓦と城山公園整備事業に伴う発掘調査で出土した瓦を対象として軒瓦の分類を行う。なお、寄贈資料に関しては、ラベルや注記などにより浜田城跡での表採と断定できる資料のみを対象としている。

第2節 軒丸瓦

軒丸瓦などの瓦当文様は三巴文のみであり、家文入りの瓦は確認されていない。また、丸瓦を含めてもコピキ A の個体は確認されていない。

巴の左巻を「A類」、右巻を「B類」に大別した。それぞれ珠文数により、A類は A-1 類から A-5 類に、B類は B-1 類から B-5 類に細分し、おのおの瓦范を識別した。

A-1 類は 1 種、A-2 類は 4 種（A～D）、A-3 類は 6 種（A～F）、A-4 類と A-5 類は 1 種ずつの瓦范を識別した。B-1 類から B-5 類は 1 種ずつの瓦范を識別した。これにより、三巴文軒丸瓦を 10 型式 18 種に分類した。

第65図1は A-1 類 A。巴巻き方向は左。珠文数は 9。焼成は良好、胎土も密である。瓦当にキラコが付着する。現在のところ、鳥糞で資料館寄贈品 1 点のみでの確認であるが、「浜田城瓦の一部分」のラベルが付けられている。

第65図2～5は巴巻き方向が左で珠文数 12 の A-2 類。

2 は A-2 類 A。焼成は不良。胎土も粗く、1mm 大の長石や石英が多く含まれ、中には 10mm 大の長石もある。瓦当にキラコは見られない。器種は軒丸瓦・軒先瓦が確認される。瓦当から丸瓦先端上面に接合粘土を用いるため、丸瓦上部にはカキヤブリが見られ、反りを持つ形状となる。丸瓦部が残る個体は 7 個体あり、これらの瓦当の天地は同一となり、瓦当上部の接合粘土からしても、瓦当部と丸瓦部の接合はいわゆる芋付けとは想定しにくい。

3 は A-2 類 B。焼成は良好で銀化、胎土も密である。瓦当にはキラコが付着する。丸瓦部先端が瓦当裏面に直角に取りつく。瓦当裏面に丸瓦部に直交する 1 条の線が入る個体が見られる。

4 は A-2 類 C。焼成は良好で銀化、胎土も密である。瓦当にはキラコが付着する。他の A-2 類に比べ、巴が粗大化している。丸瓦部先端が瓦当裏面に直角に取りつく。A-2 類 B と同様に瓦当裏面に丸瓦部に直交する 1 条の線が入る個体が見られる。

5 は A-2 類 D。焼成は良好で銀化、胎土も密である。瓦当にはキラコが付着する。現在のところ、軒丸瓦で資料館寄贈品 1 点のみでの確認であるが、丸瓦部外面に「浜田城」、丸瓦部内面に「浜田城軒瓦 405.」と朱書きされている。面径が 11.6cm と小型である。范傷が確認できる。

第65図6～9、第66図10・11 は巴巻き方向が左で珠文数 16 の A-3 類。

6 は A-3 類 A。焼成はやや悪い。胎土もやや粗く、1mm 大の長石が含まれる。瓦当にキラコは見られない。器種は軒丸瓦と軒先瓦が確認される。確認される全ての個体において范傷が進行しており、

瓦当が良好なものは見られない。瓦当から丸瓦先端上面に接合粘土を用いるため、反りを持つ形状となる。

7はA-3類B。焼成は不良。胎土も粗く、1mm大の長石や石英が多く含まれ、中には10mm大の長石もある。瓦当にキラコは見られない。器種は軒丸瓦のみが確認されている。瓦当から丸瓦先端上面に接合粘土を用いるため、丸瓦上部にはカキヤブリが見られ、反りを持つ形状となる。丸瓦部が残る個体は7個体あり、これらの瓦当の天地は同一であり、A-2類Aと同様となる。巴が小さいのが特徴である。

8はA-3類C。焼成はやや悪い。胎土もやや粗く、1mm大の長石が含まれる。瓦当にキラコは見られない。A-3類Bの巴と珠文の位置と合致することから、瓦缶はA-3類Bを彫り直して利用されている。彫り直しにより巴は一体化している。

9はA-3類D。焼成はやや悪い。胎土もやや粗く、1mm大の長石が含まれる。瓦当にキラコは見られない。巴は小さく、尾部はつながる。

第66図10はA-3類E。焼成は普通。胎土はやや粗く、1mm大の長石がわずかに含まれる。瓦当にはキラコが付着する。面径は13.9cmとA-3類の中で一番小さい。

11はA-3類F。焼成は良好で銀化、胎土も密。瓦当にはキラコが付着する。丸瓦部先端が瓦当裏面に直角に取りつく。瓦当裏面に丸瓦部に直交する1条の線が入る個体が見られる。

12はA-4類A。巴巻き方向は左。珠文数は17。焼成は良好で銀化、胎土も密である。瓦当にはキラコが付着する。器種は軒丸瓦・軒先瓦・鳥糞が確認される。丸瓦部先端が瓦当裏面に直角に取りつく。巴のバランスが悪い。

13はA-5類A。巴巻き方向は左。珠文数は27。焼成は普通で、胎土はやや粗い。A-5類Aの焼成はやや悪いものと良好で堅緻なもの2種あり、胎土は概してやや粗く、1mm大の長石が含まれるものもある。また瓦当にキラコが付着する個体もある。器種は軒丸瓦と軒先瓦が確認される。やや反りを持つ形状を呈する。

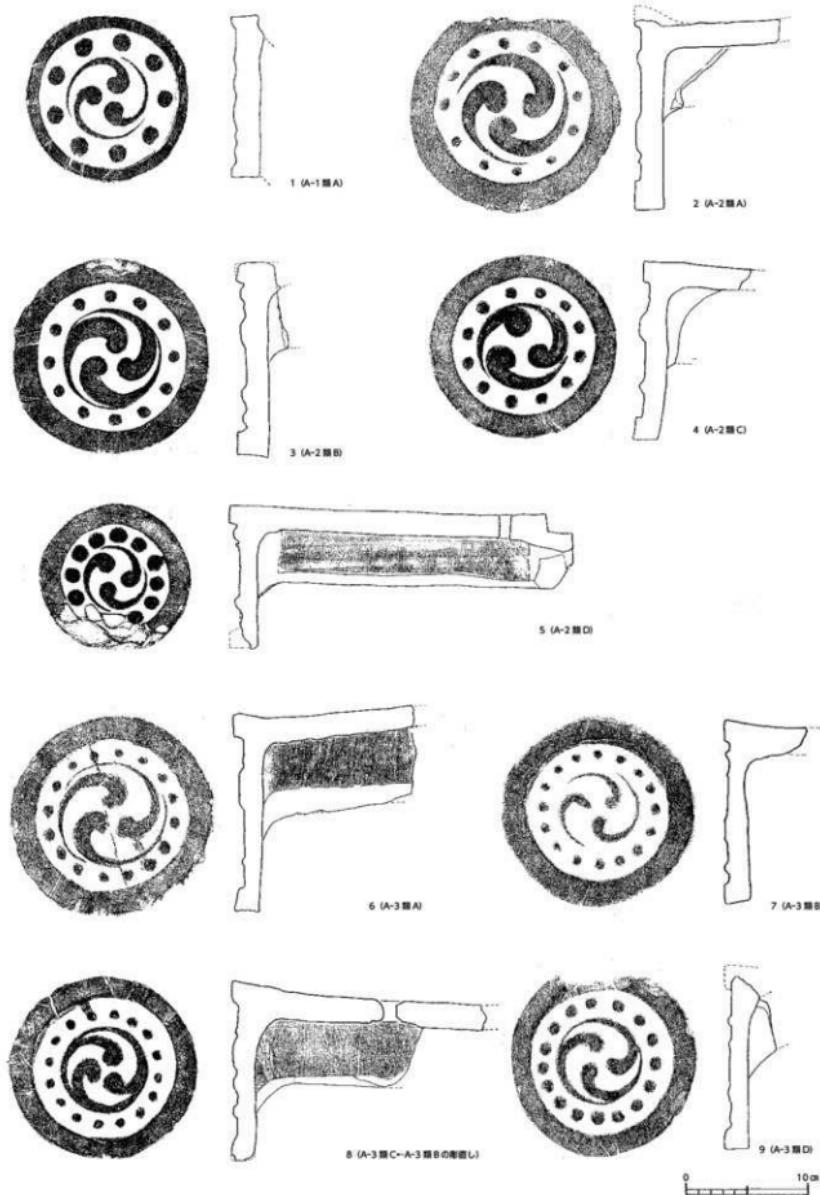
14はB-1類A。巴巻き方向は右。珠文はない。焼成は良好で銀化、胎土も密である。瓦当にはキラコが付着する。現在のところ、浜田城本丸北斜面表採の1点のみの確認である。

15はB-2類A。巴巻き方向は右。珠文数は9。焼成は良好で銀化、胎土も密である。瓦当にはキラコが付着する。器種は軒先瓦・鳥糞瓦が確認される。瓦当裏面に丸瓦部に直交する1条の線が入る。

16はB-3類A。巴巻き方向は右。珠文数は12。焼成は良好で銀化、胎土も密である。瓦当にはキラコが付着する。面径は13.7cmであり小さい。

17はB-4類A。巴巻き方向は右。珠文数は16。焼成は良好で銀化、胎土も密である。瓦当にはキラコが付着する。表採資料はなく、三丸T1・2及び二ノ門T4のみで出土が見られる。

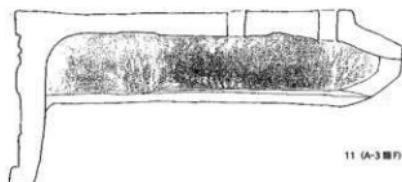
18はB-5類A。巴巻き方向は右。珠文数は19。焼成は普通で、胎土は密。B-5類Aの焼成はやや悪いものと良好で堅緻なもの2種あり、胎土は密であるが、黒色粒子が含まれる個体が目立つものもある。瓦当にはキラコが付着する。



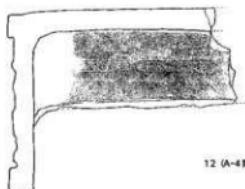
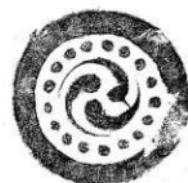
第 65 図 浜田城跡の軒丸瓦 1 ($S = 1/4$)



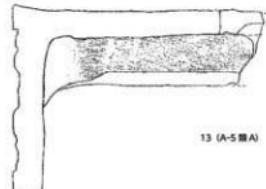
10 (A-3 三日)



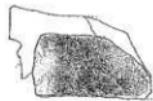
11 (A-3 三日)



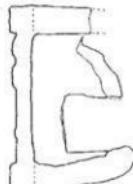
12 (A-4 三日 A)



13 (A-5 三日 A)



14 (B-1 三日 A)



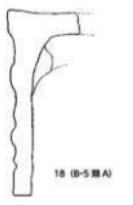
15 (B-2 三日 A)



16 (B-3 三日 A)



17 (B-4 三日 A)



18 (B-5 三日 A)

0 10cm

第66図 浜田城跡の軒丸瓦2 (S = 1/4)

第3節 軒平瓦・軒棧瓦

軒平瓦・軒棧瓦は中心飾りによって、上向五葉文、上向三葉文、下向三葉文、橘文の4種に大別できる。

上向五葉文の中心飾りは、中葉の先端が三叉、左右2ずつの側葉の先端が二又に分離し、萼をもつものである。中心飾りは橘文に似るが、両端の葉文は三叉に分離する。中心飾りの側葉が曲線的に開くものをA類、直線的に開くものをB類とし、文様及び瓦当上縁の面取や瓦当裏面のナデ等の調整によりA類を2種(A・B)、B類を3種(A～C)に細分した。

上向三葉文の中心飾りは、中葉が菱形、側葉は先端が二又にわかれる。中心飾りは大坂城のNH04U型式と同様。両端の葉文が小さいものをA類、大きいものをB類とし、それぞれの中心飾り及び葉文の形状などから瓦范を識別した。上向三葉文A類は3種(A～C)、上向三葉文B類は1種(A)である。

上向五葉文・上向三葉文は中心飾りの形状から、大坂式への萌芽とも見える形状をしており、元和年間の瓦として評価が可能である。両型式とも瓦當にキラコは確認できない。

下向三葉文の中心飾りは、珠文を頂点として、先端が三叉になった葉が下向きに三葉展開する。唐草1転をA類、唐草2転をB類、唐草3転以上をC類とした。A類とC類は1種(A)のみであり、B類は瓦范の大きさから2種(A・B)に細分した。下向三葉文から瓦當にキラコが確認できる。なお、A類は棧瓦である。

橘文は、「大坂式」と総称される文様である。中心飾りによりA類とB類に大別した。A類は中心飾りの萼が唐草状であり、外側には唐草が三転する。二又に分かれる子葉がないなど、変容した橘文である。B類は中心飾りに萼がなく、唐草もないもの。A類は中心飾りや唐草の形状などから5種(A～E)に、B類は、瓦范の大きさから2種(A・B)に細分した。

第67図1～5は上向五葉文。

1は上向五葉文A類A。中心飾りの側葉が曲線的に開き、唐草と端の子葉は離れる。焼成は普通。胎土はやや粗く1～2mmの長石を含む。瓦当上縁をやや広く面取り、瓦当裏はナデで凹む。顎貼付。四面に水切り突起がある。本丸T5から1点のみの出土である。

2は上向五葉文A類B。中心飾りの側葉が曲線的に開くが、A類Aと異なり、唐草と端の子葉がくっつく。焼成はやや悪い。胎土は普通で1～2mmの長石を含む。瓦当上縁の面取りは弱く、瓦当裏はナデで凹む。顎貼付。

3は上向五葉文B類A。中心飾りの側葉が直線的に開く。焼成は普通。胎土も普通で1mm程度の長石をわずかに含む。瓦当上縁をやや広く面取り、瓦当裏はナデで凹む。顎貼付。

4は上向五葉文B類B。文様は肉彫りで立体的。焼成・胎土はB類Aと同様。瓦当上縁の面取及び瓦当裏の強いナデはない。瓦当が薄く、折り曲げにより瓦当を作出している可能性もある。B類Bでは、右側の唐草下側に範傷が確認できる個体がある。

5は上向五葉文B類C。文様は立体的であるが、中心飾りの珠文・萼が欠損している。焼成・胎土は他のB類と同様。瓦当上縁の面取りはなく、瓦当裏側には工具によると思われる幅2cmの凹みがある。顎貼付である。

6～9は上向三葉文。

6は上向三葉文A類A。唐草・葉文が線状で表現され、葉文の下部に凹みをもつ。焼成は悪く、胎土も粗い。1mm程度の長石を多く含む。瓦当上縁の面取りはなく、瓦当裏にナデによる凹みはない。

7は上向三葉文A類B、A類Aに比べて唐草・葉文が太い。焼成は悪く、胎土も粗く1mm程度の長石を多く含み、5mm大の長石もある。文様区上面部が拡張されており、A類Aの瓦筋の再利用の可能性もある。頸貼付方法は不明。瓦当上縁の面取りではなく、瓦当裏にナデによる凹みはない。

8は上向三葉文A類C。葉文の表現が退化し、三日月状となる。中心飾りの菱形と珠文が離れる。胎土や焼成は上向三葉文A類Aと同様。瓦当上面には弱い面取りがあり、個体によっては瓦当裏にもナデにより凹むものもある。頸貼付。

9は上向三葉文B類A。中心飾りの側葉がA類に比べて、上方に開く。両端の葉文は大きく、下部に凹みを表現している。焼成はやや悪い。胎土はやや粗く、1mm程度の長石を含む。頸貼付。

第68図10～13は下向三葉文。下向三葉文の瓦当にはキラコが確認でき、焼成は良く、胎土も密である。瓦当は頸貼付である。

10は下向三葉文A類A。唐草は1転のみで、先端は巻かずに巴状になる。左棟部が残る個体もある。

11は下向三葉文B類A。文様区の上辺は19.0cm、下辺は18.4cm。焼成は普通で、胎土中には黒色粒子が見られる。瓦当側区に輪造文が刻印される。瓦当上縁の面取りはない。

12は下向三葉文B類B。文様区の上辺は17.0cm、下辺は16.4cmで、B類Aよりも一回り小さい。そのため、両端の子葉が小さく、文様が詰まっている印象を受ける。焼成は良好で、胎土中には黒色粒子や褐色粒子が含まれる。瓦当上縁はわずかに面取りされる。

13は下向三葉文C類A。破片のため、確定は難しいが唐草は3転以上と思われる。浜田城裏門跡で1点出土が確認されている。

14～20は橘文。橘文の瓦当にはキラコが確認できる。焼成はよく、銀化している。胎土は密である。

14は橘文A類A。中心飾りの珠文が輪で閉まれ、花弁が小さい。両端の唐草は内傾して巻く。

15は橘文A類B。中心飾りの珠文の外側に輪がなく、花弁が大きい。両端の唐草は垂直気味に立ち上がる。

16は橘文A類C。汎型が大きく、側区が長い。両端の唐草はA類Bと同様で、垂直気味に立ち上がる。

17は橘文A類D。汎型はA類Cと同様に大きく、側区も長い。唐草は直線的である。

18は橘文A類E。文様構成は上記までのA類と同様であるが、橘が柿の実状になっている。棟部は左側につかないため、右棟瓦の可能性がある。

19は橘文B類A。中心飾りに夢がなく、唐草もない。文様区上辺17.0cm、下辺16.8cm、文様区の高さ3.4cmを測る。

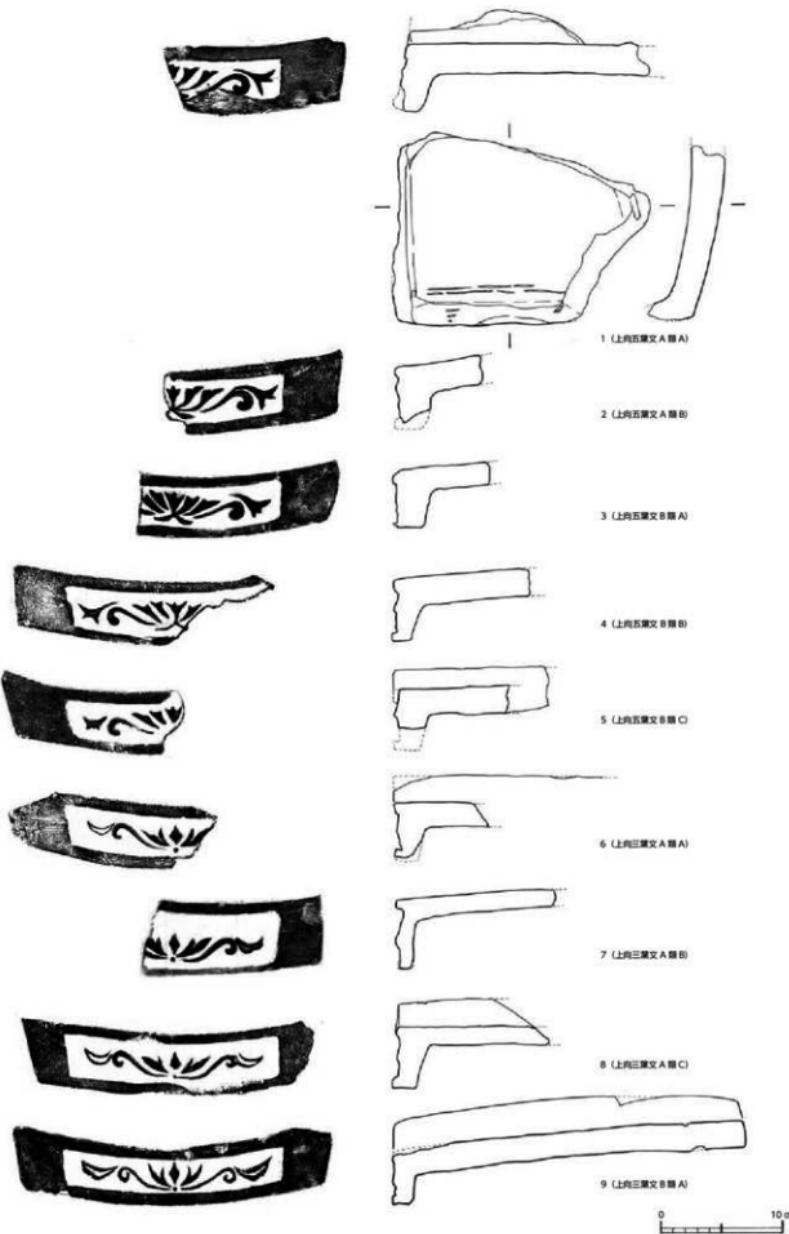
20は橘文B類B。中心飾りに夢がなく、唐草もない。文様区上辺16.1cm、下辺15.8cm、文様区の高さ2.5cmを測り、橘文B類Aよりも瓦当の法量が小さく、平瓦部の厚さも薄い。

【参考文献】

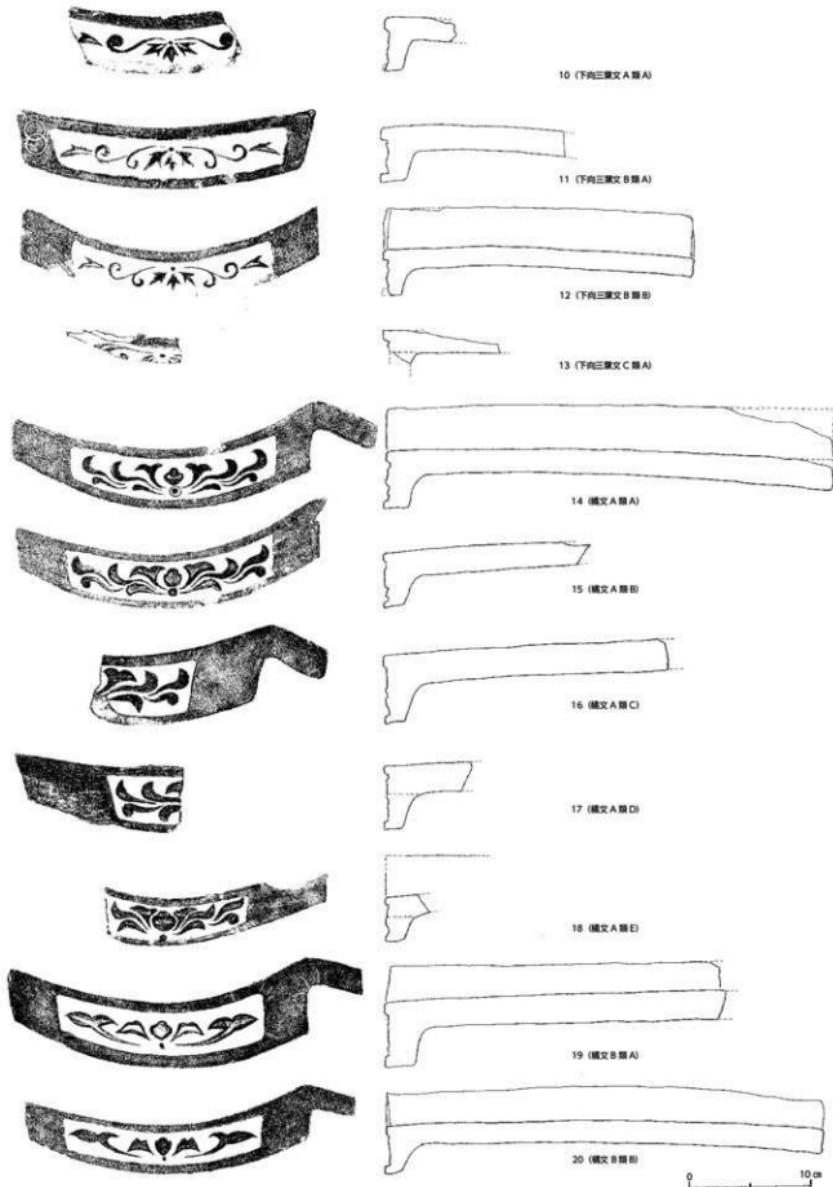
財團法人 大阪府文化財センター 2006『大阪城址 3』 財團法人 大阪府文化財センター調査報告書 144.

第47回山陰考古学研究集会 2019『山陰の城郭瓦導入と展開』 第47回山陰考古学研究集会事務局

浜田市教育委員会 2017『平成28年度 浜田市内遺跡発掘調査報告書』



第67図 浜田城跡の軒平瓦 (S = 1/4)



第68図 浜田城跡の軒平瓦・軒桟瓦 (S = 1/4)

軒丸瓦類観察表

番号	空量	基盤	バサ 方向	片文数	瓦当部法量 (cm)		瓦当部厚さ (cm) 外径 文様外径 内径 高さ	キラコの有無	焼成	胎土	備考	出土・実測点
					外径	文様外径						
第65国1	A-2種A	鳥夷	左	9	131	112	0.4	-	有	良	密	「浜田城瓦の一品分」ラベル 不明 (浜田郷上資料館所蔵品)
第65国2	A-2種A	軒丸瓦	左	12	165	127	0.5	1.9	無	不良	粗い 10mm大の長石あり	本丸西側斜面表探
第65国3	A-2種B	軒丸瓦	左	12	155	120	0.7	-	有	良	耐化	瓦当裏面に 1 条の北緯 本丸西側斜面表探
第65国4	A-2種C	軒丸瓦	左	12	145	113	0.6	1.8	有	良	耐化	瓦当裏面に 1 条の北緯 不明 (浜田郷上資料館所蔵品)
第65国5	A-2種D	軒丸瓦	左	12	116	88	0.6	1.8	有	良	耐化	「浜田城軒丸瓦 405」の注記 不明 (浜田郷上資料館所蔵品)
第65国6	A-3種A	軒丸瓦	左	16	162	123	0.6	1.9	無	やや不良	やや粗い	荒筋が進行 不明 (浜田郷上資料館所蔵品)
第65国7	A-3種B	軒丸瓦	左	16	150	111	0.5	2.3	無	不良	粗い 10mm大の長石あり	不明 (浜田郷上資料館所蔵品)
第65国8	A-3種C	軒丸瓦	左	16	145	107	0.6	2.0	無	やや不良	やや粗い	A-3種Eの瓦形跡に直し 本丸西側斜面表探
第65国9	A-3種D	軒丸瓦	左	16	149	115	0.6	-	無	やや不良	やや粗い	不明 (浜田郷上資料館所蔵品)
第66国10	A-3種E	軒丸瓦	左	16	139	103	0.5	2.4	有	普通	やや粗い	不明 (浜田郷上資料館所蔵品)
第66国11	A-3種F	軒丸瓦	左	16	142	108	0.5	1.9	有	良	耐化	瓦当裏面に 1 条の北緯 不明 (浜田郷上資料館所蔵品)
第66国12	A-4種A	軒丸瓦	左	17	144	107	0.5	1.8	有	良	耐化	密 本丸西側斜面表探
第66国13	A-5種A	軒丸瓦	左	27	153	115	0.4	2.1	無	普通	やや粗い	本丸西側斜面表探
第66国14	B-1種A	軒丸瓦	右	0	(148)	(106)	1.0	1.6	有	良	耐化	本丸北斜面表探
第66国15	B-2種A	軒丸瓦	右	9	148	110	0.5	2.2	有	良	耐化	瓦当裏面に 1 条の北緯 不明 (浜田郷上資料館所蔵品)
第66国16	B-2種A	軒丸瓦	右	12	137	91	0.6	-	有	良	耐化	不明 (浜田郷上資料館所蔵品)
第66国17	B-4種A	軒丸瓦	右	16	(148)	(114)	0.7	-	有	良	耐化	二ノ門74 古土品 (第33回)
第66国18	B-5種A	軒丸瓦	右	19	151	115	0.4	1.8	有	普通	密	不明 (浜田郷上資料館所蔵品)

※ () は復元値

軒平瓦・軒棧瓦観察表

番号	空量	基盤	瓦当部法量 (cm)		甲板部法量 (cm)		キラコの有無	焼成	胎土	備考	出土・実測点		
			幅 内径 高さ	外径 高さ	長さ	厚さ							
第67国1	上向三葉文A種A	軒平瓦	(280)	(181)	5.5	0.3	[203]	2.5	無	普通	やや粗い 1~2mm程度の長石あり	本丸T5 古土品 (第2回)	
第67国2	上向三葉文A種B	軒平瓦	(270)	(180)	5.2	0.3	[212]	2.4	無	やや不良	普通	不明 (浜田郷上資料館所蔵品)	
第67国3	上向三葉文B種A	軒平瓦	(268)	(180)	5.1	0.3	[206]	1.8	無	普通	瓦当上面取扱	本丸西側斜面表探	
第67国4	上向三葉文B種B	軒平瓦	(264)	(180)	5.1	0.5	[114]	2.3	無	普通	普通	本丸北斜面表探	
第67国5	上向五葉文D種C	軒平瓦	(272)	(180)	5.0	0.4	[122]	2.2	無	普通	瓦当面に工具による凹みあり	本丸西側斜面表探	
第67国6	上向三葉文A種A	軒平瓦	(274)	(180)	4.8	0.4	[172]	2.9	無	不良	粗い	本丸西側斜面表探	
第67国7	上向三葉文A種B	軒平瓦	(240)	(176)	5.7	0.3	[132]	1.6	無	不良	粗い 5mm大の長石あり	本丸東側斜面表探	
第67国8	上向三葉文A種C	軒平瓦	242	174	5.0	0.4	[129]	1.9	無	不良	粗い 「浜田城本丸瓦 勘定」の注記	不明 (浜田郷上資料館所蔵品)	
第67国9	上向三葉文A種A	軒平瓦	262	184	4.3	0.3	299	2.2	無	やや不良	やや粗い	本丸T4 古土品 (第17回)	
第68国10	下向三葉文A種A	軒瓦丸瓦	-	-	45	0.5	[50]	1.8	有	良	浜田城奥門跡から回収で 軒瓦丸瓦出土	本丸東側斜面表探	
第68国11	下向三葉文A種B	軒平瓦	237	194	4.5	0.6	[152]	2.0	有	良	普通	廻りに縫合文の刻印	不明 (浜田郷上資料館所蔵品)
第68国12	下向三葉文B種B	軒平瓦	242	165	3.8	0.4	-255	1.6	有	良	釘孔2箇所あり	不明 (浜田郷上資料館所蔵品)	
第68国13	下向三葉文C種A	軒平瓦	-	-	-	0.3	[22]	-	有	良	浜田城奥門跡出土品		
第68国14	櫛文A種A	軒瓦	300	168	4.7	0.4	370	2.1	有	良	釘孔2箇所あり	不明 (浜田郷上資料館所蔵品)	
第68国15	櫛文A種B	軒瓦	256	167	4.5	0.4	[236]	2.0	有	良	耐化	本丸東側斜面表探	
第68国16	櫛文A種C	軒瓦	[193]	[166]	5.6	0.3	[233]	2.4	有	良	耐化	本丸東側斜面表探	
第68国17	櫛文A種D	軒瓦	[140]	[167]	5.3	0.4	[72]	2.3	有	良	耐化	本丸東側斜面表探	
第68国18	櫛文A種E	軒瓦	[180]	[140]	3.6	0.4	[76]	1.9	有	良	耐化	右尖の可能性あり 浜田城奥門跡出土品	
第68国19	櫛文B種A	軒瓦	290	170	5.3	0.3	[286]	2.4	有	良	耐化	不明 (浜田郷上資料館所蔵品)	
第68国20	櫛文B種B	軒瓦	271	163	4.0	0.3	360	1.8	有	良	耐化	本丸東側斜面表探	

※ () は復元値, [] は焼成値

第6章 自然科学分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

第1節 はじめに

浜田城跡は1623年（元和9年）古田重治によって築城され、1866年（慶応2年）第二次幕長戦争の際に落城した。

本報では浜田城跡内での発掘調査に伴い出土した、二ノ門の部材と考えられる炭化材の樹種及び漆喰の性質を明らかにする目的で、樹種同定及び漆喰に対する化学分析を行った。

第2節 分析試料について

分析試料は、浜田市により採取・保管されていた試料から提供を受けた。また、以下に示す平面図及び断面図は、浜田市より提供を受けた原図をもとに、作成した。調査区平面図（図1）中に、試料①：炭化柱根、②板材？の採取地点を示す。また、調査区断面図を図2に示す。試料①：炭化柱根は二ノ門の西側礎石上で、試料②：板材？は4層内から採取されていた。また4層内に散在していた漆喰が一括して採取されており、その中の1片を試料③：漆喰として、提供を受けた。

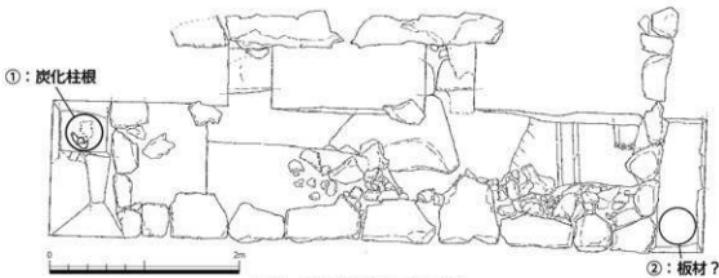


図1 試料採取位置（平面図）

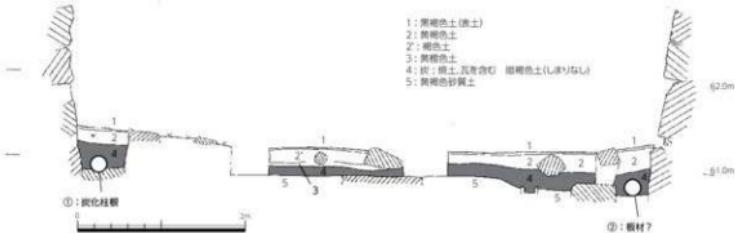


図2 試料採取位置（断面図）

第3節 分析方法

(1) 樹種同定方法

下記の手順で調整した試料について、木材の3断面（横断面、放射断面、接線断面）を電子顕微鏡下で観察する。

1) カッターなどを用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）を採取。

2) 採取した試料を、試料台に固定。

3) 炭素を蒸着。

4) 3)の調整試料を、走査型電子顕微鏡下で観察、同定する。

5) 同定試料ごとに記載し、3断面の顕微鏡写真を付ける。

(2) 粉末X線回折方法

分析の手順を以下に示す。また、測定条件を表1に示す。

1) 60°Cに設定した定温乾燥機にて、24時間乾燥

2) 乾燥後、メノウ乳鉢ですり潰す

3) 測定試料をスライドグラス上に蒸留水で貼り付け乾燥

4) 測定（㈱リガク製X線回折装置（RINT-2000）による（3回の測定）

5) コランダム添加 WPPF 法による濃度計算を行い、3回の平均値を測定値とする

(3) 蛍光X線分析（XRF）方法

分析の手順を以下に示す。また、測定条件を表2に示す。

1) 60°Cに設定した定温乾燥機にて、24時間乾燥

① 乾燥後、メノウ乳鉢ですり潰す

② 測定試料を塩ビ製リングに加圧成形

③ 測定波長分散型蛍光X線分析装置（㈱島津製作所 XRF-1800）による

④ 濃度計算 FP 法による濃度計算を行う（半定量分析）。

表1 粉末X線回折測定条件

- ・ X線源：回転対陰極式、Cu(1.54058Å)
- ・ X線管球の管電圧及び管電流：40kV 150mA
- ・ 単色化 モノクロメーター
- ・ 光学系：集中法
- ・ 走査条件
 - 走査範囲： $\theta/2\theta$
 - モード：連続
 - 走査速度：2°/分
 - 走査ステップ：0.02°
- ・ スリットの条件
 - 発散スリット：1°
 - 散乱スリット：1°
 - 受光スリット：0.3 mm
- ・ 検出器：シンチレーション計数管

表2 XRF 測定条件

- ・ X線管の種類：エンドウインドウ型X線管(4kW Rh)
- ・ X線ターゲットの種類：Rh
- ・ X線管作動条件：表3-1に示す
- ・ マスク径： $\phi 30$ mm
- ・ 照射X線径： $\phi 30$ mm
- ・ 試料回転の有無：なし
- ・ 分光結晶：表3に示す
- ・ 走査条件：表3に示す

表3 分光結晶・スリット及び走査条件

	管電圧 (kV)	管電流 (mA)	分光結晶	検出器	面積角度 (deg)	面積角度 (deg)	ステップ (deg)	ステップ (deg/min)	速度 (deg/min)
F	40	70	TAP	F-PC	65	94	0.1	4	
Na	40	70	TAP	F-PC	52	58	0.1	30	
Mg	40	70	TAP	F-PC	42	48	0.1	30	
Al	40	70	PET	F-PC	55	65	0.1	30	
S	40	70	PET	F-PC	106	112	0.1	30	
P	40	70	Ge	F-PC	138	144	0.1	30	
S	40	70	Ge	F-PC	108	114	0.1	30	
Cl	40	70	Ge	F-PC	90	96	0.1	30	
Br	40	70	Ge	F-PC	114	120	0.1	30	
Ca	40	70	LF	F-PC	110	116	0.1	30	
Y-U	40	70	LF	SC	10	90	0.1	4	

(4) 热分析方法

分析の手順を以下に示す。また、測定条件を表4に示す。

- ① 60°Cに設定した定温乾燥機にて、24時間乾燥
- ② 乾燥後、メノウ乳鉢ですり潰す
- ③ 資料質量 9mgを測定容器に分取
- ④ 測定熱重量・示差熱測定装置（㈱日立ハイテク
サイエンス製 TG-TDA6300）による

表4 热重量・示差熱測定条件

- ・昇温条件：室温から900°Cまで10°C/分(空気雰囲気)
- ・参照資料：Al2O3粉末(10.1mg)
- ・使用容器：Al2O3

第4節 分析結果

(1) 樹種同定結果

試料ごとに撮影した3断面の電子顕微鏡写真(図3,4)とともに、記載を行った。電子顕微鏡写真は、原則的に左から横断面、接線断面、放射断面の順に並べた。

試料名：①、② マツ属 *Pinus* sp.

記載：構成細胞は仮道管、放射仮道管、放射柔細胞、垂直樹脂道及び水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞からなる。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の幅は広い。放射組織は単列であるが、水平樹脂道を含むものは紡すい形を示す。分野壁孔は窓状である。試料の損傷が激しく放射仮道管の鋸歯状肥厚が観察できなかったことから、マツ属に止める。

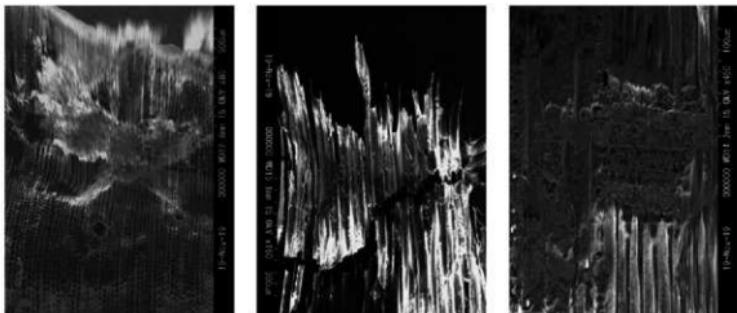


図3 ①炭化柱根：マツ属

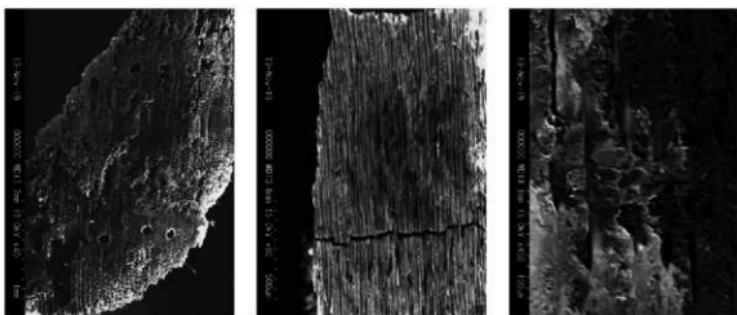


図4 ②板材？：マツ属

(2) 粉末X線回析結果

図5、6に、粉末X線回析結果を示す。この結果、炭酸カルシウム（方解石）が検出された。一方、他の鉱物由来の明瞭なピークは検出できなかった。

コランダム添加試料の3回の測定とWPPF法による解析の結果、炭酸カルシウムの量は平均43.7%（91.2%、84.1%、81.4%）となった。

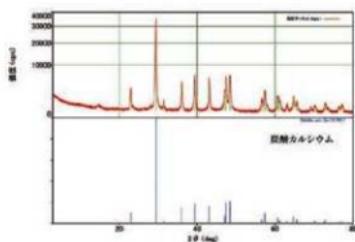


図5 粉末X線回析結果

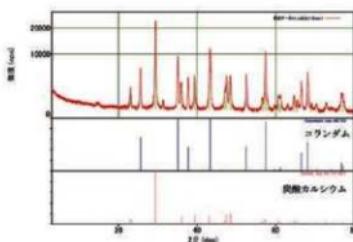


図6 粉末X線回析結果（コランダム添加）

(3) 蛍光X線分析（XRF）結果

表5に蛍光X線分析結果(FP法による半定量分析結果)を示す。Caの割合が極めて高いことが分かる。

(4) 热分析結果

図7に、热分析結果を示す。

TG(熱重量測定結果)から650°C質量減3.91%、900°C質量減42.50%、この間での炭酸ガス離脱による質量減が38.59%であることが分かる。したがって、CaCO₃(分子量100)で換算すると、87.7%の炭酸カルシウム（方解石）が含有されていることが分かる。

表5 萤光X線分析結果
(FP法による半定量分析結果)

酸化物表記	金属表記
SiO ₂	1.81
TiO ₂	0.04
Al ₂ O ₃	0.97
Fe ₂ O ₃	0.47
MnO	0.10
MgO	-
CaO	95.2
Na ₂ O	0.10
K ₂ O	0.11
P ₂ O ₅	0.13
F	0.42
SrO	0.29
Cl	0.20
SO ₃	0.13
Cr ₂ O ₃	0.01
NiO	0.005
ZnO	0.004
Rb ₂ O	0.0008

単位%

単位%

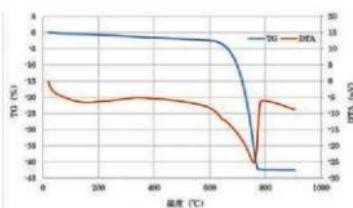


図7 热分析結果
TG: 热重量测定結果
DTA: 示差热分析結果（热電対の起電力）

(5) 漆喰の用途について

分析結果で示したように漆喰の主成分は炭酸カルシウムであり、80%以上の含有率であることが明らかになった。村上ほか(1997)は、岡山城の発掘調査に伴い出土した漆喰の成分分析を実施・報告し、「炭酸カルシウムは土壌と混合して使われており、その配合比は用途によって使い分けられていた可能性がある。例えば治水施設としては10~30%、土間では4~7%、建造物では20~30%という結果を得た。」の知見を示していた。今回の分析結果では炭酸カルシウムの含有量が80%以上を示しており、表6のデータに照らし合わせると表書院期建物の表面化粧に用いられた漆喰(剥落漆喰)に最も近かった。

これらのことから、分析試料は二ノ門に塗られた表面化粧用漆喰の一部と考えられる。

表6 岡山城漆喰の化学分析

No.	出土地所	種類	色相	時期(推定)
1	古墳本堂(SX77)	粉水	黄灰色	1615年以前 1608年以前
2	草木水路排水口	粉水	黄白色	1601年以前 1700年以前
3	草木古沢石上槽	粉水	白色	1601年以前 1744年以前
4	東門中段排水口	粉水	明褐色灰色	1700年以前 1744年以前
5	東木中段排水口	粉水	明褐色灰色	1700年以前 1868年以前
6	東木外段排水口	粉水	灰白色	1608年以前
7	東木外段水土壁面	漏水防止	暗紫黑色	鹿児島型
8	東木外段石材埋込部	漏水防止	淡黄白色	1615年以前 1608年以前
9	熊野大橋石砌體	漏水防止	白黄色	17世紀前半確切時?
10	石造排水渠の柱	土間形成	高黄色	1597年以前確切時?
11	庭内に張り附	土間形成	高黄色	1615年以前 1608年以前
12	多門門櫓敷下	乾瓦瓦被	茶褐色	1615年以前 1608年以前
13	平面石敷石	淡青灰色	1616年以前 1608年以前	
14	現地支柱	土間形成	灰白色	1607年
15	穴吹穴井	堆 材	淡青白	1610年以前 1700年以前
16	穴壁部分	堆 M	淡青白	1615年以前 1700年以前
17	新築塗壁	表面化粧	白灰色	1615年以前 1608年以前

No.	SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Rb	Sr	estimated		
									LOI (400°C 600~900°C)	LOI (600~900°C)	CaCO ₃
1	44.9	22.0	16.8	0.72	0.67	1.07	87	67	8.6	0.0	0.6
2	46.3	21.3	16.9	0.36	0.65	1.96	87	77	12.6	0.1	1.6
3	48.7	16.3	8.6	1.58	0.45	2.21	72	175	9.0	5.4	12.2
4	37.1	17.4	10.9	0.04	0.12	1.55	58	261	10.1	9.9	22.4
5	38.6	17.5	11.1	0.80	0.18	1.09	41	218	10.7	9.5	21.5
6	35.7	10.0	8.8	4.48	0.80	0.50	18	273	7.9	10.9	24.7
7	33.3	18.1	8.5	0.72	0.34	1.12	33	266	10.4	12.1	27.5
8	40.3	19.2	14.5	0.17	0.31	1.55	70	115	10.6	4.6	10.4
9	55.9	15.4	4.6	0.97	0.94	3.50	14	94	4.2	2.2	4.9
10	40.9	24.9	26.4	0.36	0.10	0.74	42	36	11.6	0.0	0.0
11	40.4	22.8	29.7	0.68	0.12	0.90	64	54	11.7	1.9	4.4
12	46.6	23.0	16.1	0.60	0.72	1.75	90	76	9.5	0.0	0.0
13	37.3	17.6	12.5	0.97	0.26	0.95	33	190	11.5	8.4	19.1
14	56.7	14.9	4.2	2.19	1.61	2.06	137	127	4.3	2.6	6.5
15	37.5	11.7	8.4	4.68	0.38	1.29	44	245	12.0	9.3	21.1
16	37.0	12.9	7.4	0.41	0.64	1.77	51	275	9.8	12.8	28.2
17	16.6	1.7	0.8	5.16	0.17	0.39	9	441	5.3	32.8	74.5

LOI(600~900°C) shows only de-carbonation wt% after correction by soil
(SiO₂, Al₂O₃, Fe₂O₃, CaO, Na₂O, K₂O, estimated CaCO₃ and LOI wt%, Rb and Sr ppm)

第5節まとめ

浜田城二ノ門跡出土炭化材の樹種同定及び漆喰の化学分析を実施した。この結果、以下の事柄が明らかになった。

- 二ノ門跡出土炭化材は2試料ともにマツ属であった。
- 漆喰の主成分は炭酸カルシウムで、村上ほか(1997)の分析結果と比べると、表書院期建物の表面化粧材の剥落漆喰に最も近かった。二ノ門に塗られた表面化粧用漆喰の一部と考えられる。

【参考文献】

- 村上 隆・松井敏也・高田 潤 1997 「岡山城の建物と庭に用いられた「漆喰」について」『史跡保存整備事業 史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』316~322。岡山市教育委員会

第7章 総括

第1節 発掘調査で得られた事実関係の整理

浜田城跡の発掘調査は、今まで城山中腹の焰硝蔵付近や城山南麓の庭園部で実施されたのみであった。本調査では、初めて山頂部や城山東麓の中ノ門谷部で調査を実施し、往時の浜田城跡の一端をうかがえる成果を得ることができた。ここでは、特に成果のあった箇所を中心に事実関係の整理をする。

(1) 山頂部

本丸・二ノ門・三丸・出丸で調査を実施した。本丸は、平地の周縁部の調査であり、近世の絵図においては土塀が設置されている場所にある。調査の結果、控え柱の柱穴は検出されず、また出丸トレントン1での土塀基礎遺構をみても、本丸も厚みのある自重で自立する土塀が巡っていた可能性を示唆できる。また、本丸南東側（本丸T3）と南側（本丸T4・5）では、出土瓦の様相が異なっていた。南東側では棟瓦が一定量出土し、一方で南側はごく少量の出土にとどまる。文献史料では確認できていないが、本丸南東側の土塀は江戸時代の後半以降に改修を受けている可能性がある。

二ノ門外形内においては、地形による石垣基部の違いが確認できた。岩盤や地山など強固な地盤に石垣を築く場合は小さな根石を噛ませるか（二ノ門T1）、もしくは地山に少し根切りを入れた後に築石を積み上げている（二ノ門T2）。一方で、谷地形に石垣を築く場合は、地山を根切りした後に捨石を入れ、中型の根石を置いた後に築石を積み上げている（二ノ門T3）。浜田城の縄張りを考える際に、外形内は平坦とする志向が読み取れる。また、二ノ門T4においては、浜田城跡では初めてとなる城門遺構が検出された。検出した遺構は、礎石2基、敷石、階段、排水溝である。検出した礎石は、背後にすぐ階段があることから、裏側の礎石列であり、礎石間の距離はちょうど3間（5.4m）離れている。文献史料において、二ノ門は奥行2間、幅3間と記載されており、文献と符合する結果が得られた。一方で、前側の礎石については、裏側の礎石列と同レベルであったとすれば、石垣沿いの礎石は残存している可能性はあるが、中央の礎石はすでに削平を受けていると思われる。また、二ノ門T4では、慶応2年（1866）の第二次幕長戦争時における浜田城落城時の焼土層が検出された。浜田城下町遺跡（殿町79番地47）などでは確認されていたが、城山においては初検出となった。焼土層包含遺物の瓦は焼しが剥落し赤褐色を呈し、陶器は器面の釉薬による平滑さがなくなりざらついている。またこの陶器は、浜田川河口に立地する動木窯製品であることも確認された。西側礎石上には炭化柱痕が遺存しており、自焼退城の状況を如実に物語っている。

出丸西石垣天端部分に設定した出丸トレントン1では、土塀基礎遺構が検出された。天端石との関係から土塀基部の厚さは約3尺（90cm）あったと推定できる。控え柱の痕跡もなく、自重で自立する土塀である。また、橋文A類の軒桟瓦列であるSX01も検出された。これは葺かれていた瓦を人の手により降ろされ整理した痕跡であると推察され、浜田県庁との関連が想起される遺構である。出丸トレントン2では埋没石垣を検出した。天端石は残存していない、根石も検出できていないが、一部で落し積みが確認された。該当石垣は嘉永3年の石垣補修図で記されている箇所となり、修理の状況を示している可能性がある。

(2) 中ノ門谷部

トレントン2で19世紀前半頃の旧地表を検出したが、上部平坦面に上がる路盤は検出されず、トレントン外に道があったと思われる。この旧表土の傾斜は30度と急であるため、近世の道には階段等の敷設が想定される。トレントン3も道が該当する場所であった。路盤と考えられる面は検出されたが、

石敷や排水路などは検出されず、浜田城跡にはしっかりと路盤を持った道は作られなかつたかもしれない。またトレンチ3からは弥生時代後期の土器や古墳時代の須恵器・土師器が出土し、城山前史の一端をうかがうことができた。なお、城山南麓の浜田護國神社南斜面や庭園部においても、須恵器や磨製石斧が出土している。トレンチ5では、中ノ門石垣に対応する石垣を検出した。築石には矢穴も確認され、控えも70cm程度としっかりしたものであった。裏込に棧瓦が含まれていたため、築城期の石垣ではなく、江戸時代後半以降に修理が実施されている。絵図によれば、石垣背後の平地に番所が1棟ないし2棟が描かれており、調査によりその平地の奥行きは9m程度であったことが確認された。ただ、この平地には近代以後に宅地が建っており、番所に伴う遺構は検出されなかつた。

(3) 庭園部

庭園部では浜田市教育委員会により平成12年及び平成18年に発掘調査が実施されており、既往調査とあわせて、中島の輪郭がより鮮明となつた。ただ、中島の東に位置していたと推定される小島は検出されなかつた。

(4) 出土遺物

瓦に関しては、本調査以前の発掘調査による出土瓦はほとんどなく、表探資料及び寄贈資料による検討しかできない状況にあつた。本調査により約7,250点、重量にして約1,150キロの瓦が出土したことにより、浜田城跡の瓦についてより詳細な検討が行える環境が整つた。ただ、本調査においても近世前半頃の遺構や包含層の検出がなかつたために、層位的には築城期の瓦を明確に比定することは難しい状況にある。その中で、本丸トレンチ5で出土した上向五葉文A類Aの軒平瓦（第20図2）は、その形態から築城期の瓦として評価が可能である。この軒平瓦は凹面に水切突起があり、この特徴は、四天王寺系（大坂）と姫路系の瓦工による瓦の技術的・形態的要素とされている（注1）。また浜田市浅井町に所在する浅井神社の元和8年（1622）の棟札には、摂州大坂住南都の瓦師富島吉右衛門尉家次が「御輦被仰付」とある（注2）。元和8年は浜田城の築城最中であり、この表記と瓦の特徴を照らし合わせると、上向五葉文は摂州大坂の四天王寺系の瓦工が関わった可能性が高く、築城期の瓦の蓋然性が高いと言える。なお、上向五葉文と上向三葉文は焼成や胎土が似ているため、上向三葉文も古手の瓦であろう。

瓦以外の遺物に関しては、中ノ門谷部において、弥生時代・古墳時代・中世前期の遺物が出土した。弥生時代及び古墳時代の遺物は、表探資料や庭園部の既往調査で出土が見られていたが、城山東麓においての確認は初めてであった。特に古墳時代の土器の出土量が多く、城山東麓谷部周辺に古墳時代集落の存在が想定できる。なお、中世後半の遺物の出土量は少なく、城山の近世城郭化直前の利用に関しては、不明である。

第2節 歴史的評価

浜田城跡の築城は江戸幕府の開府から17年後の元和6年（1620）から始まる。この頃はすでに慶長期の築城ラッシュも終わり、元和元年（1615）の武家諸法度制定により、城郭普請については全国的に低調な時期にあたる。

島根県内の城郭は、富田城跡（安来市）は吉川広家が入城した天正19年（1591）以降に、松江城（松江市）は堀尾吉晴により慶長12～16年（1607～11）に、津和野城跡（津和野町）は坂崎直盛が入城した慶長6年（1601）以降に近世城郭化されたと考えられる。浜田城跡はこれらの城郭よりも、15年程度は近世城郭としての成立が遅れており、他城の近世城郭化に関与した技術的な系譜（瓦・石垣

など）のつながりも認めにくいという特徴がある。瓦については、鳥取県内の鳥取城跡・米子城跡を含めた山陰地方の城郭では、17世紀前葉に軒平瓦で葉脈をもった幅広の下向三葉文が主体を占める（注3）。一方で浜田城跡においては、前述のように17世紀前葉の軒平瓦の可能性として考えられるのは、上向五葉文及び上向三葉文であるため、他の山陰城郭の流れをもつ瓦工集団の関与は見られず、大坂に瓦技術の導入を求めていた。また、石垣に関しては、築城期の石垣である中ノ門の隅角部では算木積みが見られず縦石を利用している。隅角部に縦石を用いるのは、肥前名護屋城などが著名であるが、慶長期の石垣に多い。全国的に見ても、元和期には算木積みの技術はすでに完成しているため、浜田城の石垣は全国的な石垣技術に依っていない。なお、本丸の三重櫓についても、層塔型を採用せず、当時では古式の望楼型であったと考えられている。このように浜田城の築城は、その時期が全国的にも遅く、山陰地方の他城郭との技術的な関連が見られない。

浜田城跡の終焉は、慶応2年（1866）の第二次幕長戦争による落城である。落城時の状況は、二ノ門トレントにおける礎石上の炭化柱根や二次被熱を受けた瓦や陶磁器など、遺構・遺物の両面から明らかとなつた。近世から近代へ至る歴史的な戦争の状況を物語る城跡として、全国的な視点から見ても、その意義は大きいと考えられる。

第3節 課題

今までの浜田城跡の調査・研究は、発掘調査事例が少なかったことから、文献史料を中心としたものであった。本発掘調査により多くの事柄が明らかとなり、今後は文献史料の成果とも照合しながら調査を進める必要がある。

また、本調査では中世後半から近世前半の様相は明らかにできなかった。江戸時代の地誌類には、浜田城築城前には城山に繁沢元氏が在番していたという記述があり、16世紀後半から17世紀初頭の城山利用の状況を探るのも課題であり、それは浜田に城が築かれた要因を表すことにもつながる。また築城時には、他の山陰地方の城郭とは技術的なつながりが認められなかつた。その原因についても、慶長期を中心に山陰地方にいた技術集団が廃れてしまったのか、または元和期に求められる城郭の性格が異なっていたのかなど、浜田城の歴史的評価を行うために必要な視点であろう。他城郭と比較をしながら、調査を進めていく必要がある。

【注】

(1)山崎信二 2008 「第16章 近世兵庫の瓦」「近世瓦の研究」奈良文化財研究所

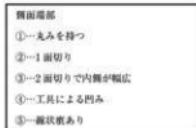
(2)鶴藏稔之 2017 「石見の丸物師・瓦師による信仰について」「近世・近代の石見焼の研究」島根県古代文化センター

(3)桑岡実 2017 「石垣と瓦から読み解く松江城」松江市ふるさと文庫 19

丸瓦観察表

探査番号	出土地	層序	側面端部 (下表参照)	凸面調整	凹面調整	法量(cm)				焼成	鉄土	備考
						長さ	幅	厚さ	底さ			
第12回8	本丸T1	3層	⑤	縦ミガキ	未調整	[19.6]	[9.7]	21	83	良 鑑化	やや粗い1~3mm程度の長石含む	所經痕あり
第13回2	本丸T2	2層	⑤	縦ミガキ	棒タキ	[11.7]	[9.1]	18	59	良 密		
第13回3	本丸T2	2層	①	不明	未調整	[14.4]	[8.6]	27	74	やや不均 密		
第14回4	本丸T3	2層	③	格子タキ後ミガキ	未調整	[14.2]	[12.8]	26	87	良 密	1~2mm程度の長石含む	風化強しい、厚手、所經痕あり
第14回5	本丸T3	2層	②	縦ミガキ	未調整	[15.0]	[10.7]	17	78	普通 密		
第15回2	本丸T3	3層	③	格子タキ後ミガキ	未調整	[16.3]	[13.3]	25	74	普通	やや粗い1~4mm程度の長石含む	所經痕あり
第17回5	本丸T4	2層	⑤	縦ミガキ後横ナメ	板状工具	27.7	15.0	18	64	良 鑑化	密	段部に「〇」の刻印
第17回6	本丸T4	2層	④	縦ミガキ後横ナメ	板状工具	25.6	14.5	22	76	良 鑑化	密	後部側面2箇所に半円の刻印
第18回1	本丸T4	2層	④?	縦ミガキ	棒タキ	30.7	16.6	20	86	良 密		所經痕あり
第18回2	本丸T4	2層	③	格子タキ後縦ミガキ	未調整	31.8	16.0	21	70	良 密		所經痕あり
第20回5	本丸T5	2層	④	縦ミガキ	未調整	29.2	15.0	21	75	良 密		所經痕あり
第20回6	本丸T5	2層	③	縦ミガキ	棒タキ	31.5	16.0	21	77	良 密		所經痕あり
第21回1	本丸T5	2層	①	縦ミガキ	未調整	30.2	13.9	19	65	良	やや粗い3mm大の長石あり	反り有り、所經痕あり
第30回1	二ノ門T1	3層	-	縦ミガキ	板状工具	[6.3]	[13.0]	23	75	良 密		穴釘あり
第30回2	二ノ門T1	3層	⑤	縦ミガキ後ナメ	未調整	[13.8]	[5.6]	17	-	良 鑑化	やや粗い1~2mm程度の黒色粒子含む	
第31回6	二ノ門T2	2層	③	縦ミガキ	未調整	[11.0]	[10.2]	33	85	良	やや粗い10mmの褐色粒子あり	厚手
第32回7	二ノ門T3	3層	④	縦ミガキ	未調整	[10.6]	[4.8]	17	-	良 密		
第32回8	二ノ門T3	4層	-	縦ミガキ	-	[4.7]	[6.0]	29	-	やや不均 密		軽質
第33回7	二ノ門T4	4層	④?	縦ミガキ後ナメ	未調整	[17.9]	15.9	19	73	良 密		二式焼熱
第33回8	二ノ門T4	4層	⑤	縦ミガキ後ナメ	未調整	[6.4]	[8.9]	20	61	良 密		段部に「午」の刻書
第33回9	二ノ門T4	4層	⑤?	縦ミガキ後ナメ	板状工具	[28.8]	16.0	20	79	良 密		穴2つあり・二式焼熱・所經痕あり
第39回2	出丸T1	1層	④	縦ミガキ後ナメ	板状工具	29.2	15.6	19	81	良	やや粗い2mm大の長石含む	所經痕あり
第39回9	出丸T1	2層	①	格子タキ後縦ミガキ	未調整	[23.9]	[11.8]	19	79	やや不均	やや粗い1~2mm程度の長石含む	所經痕あり
第43回3	出丸T2	3層	④	縦ミガキ後ナメ	未調整	[27.2]	[15.1]	19	75	良 密		所經痕あり
第43回6	出丸T2	5層	④	縦ミガキ後ナメ	棒タキ	[17.8]	[10.6]	19	82	良	やや粗い1~3mm程度の白色粒子を含む	所經痕あり
第50回6	中ノ門T1	4層	③	縦ミガキ	未調整	[11.6]	[7.5]	29	-	良 密		厚手、所經痕あり
第50回15	中ノ門T1	2層	③	格子タキ	未調整	[13.1]	[8.9]	21	66	良	やや粗い1mm程度の長石含む	所經痕あり
第51回2	中ノ門T2	6層	①	縦ミガキ	未調整	[22.0]	14.5	24	72	やや不均 密	1mm程度の長石含む	所經痕あり
第52回9	中ノ門T3	2層	①?	縦ミガキ	未調整	[14.3]	[9.1]	15	51	良 密	1mm程度の黒色粒子含む	
第52回10	中ノ門T3	2層	③	格子タキ後ミガキ	棒タキ	[12.7]	[11.0]	22	74	やや不均	やや粗い5mm大の長石あり	所經痕あり
第54回7	中ノ門T4	3層	④	縦ミガキ	未調整	[13.3]	[10.7]	23	70	良 密		
第54回8	中ノ門T4	3層	①?	縦ミガキ	棒タキ	[13.7]	[9.5]	17	68	良 密		
第56回1	中ノ門T5	2層	③	格子タキ後ミガキ	未調整	[28.7]	[11.8]	21	72	良 密		所經痕あり
第56回7	中ノ門T5	9層	③	格子タキ後縦ミガキ	未調整	[11.0]	[9.0]	24	-	やや不均 密		軽質、厚手、所經痕あり
第64回1	直側面区2	1層	②	-	-	[23.0]	13.2	16	57	良	やや粗い6mm程度の長石含む	五大け。側面端部に2箇所突起あり

※ [] は現存値



平瓦・棟瓦観察表

排 番 号	出土地	編 序	器種	法量 (cm)				焼成	胎土	備考
				長さ	広場幅	厚さ	谷深さ			
第 12 回 9	本丸 T1	3 番	平瓦	【14.0】	【12.0】	-	23	-	普通	密
第 12 回 12	本丸 T1	4 番	平瓦	【9.7】	-	-	22	-	やや不良	やや粗い 1 ~ 2mm 程度の長石含む
第 12 回 13	本丸 T1	4 番	平瓦	【12.9】	-	-	14	-	普通	密 微細な長石・露母を含む
第 14 回 6	本丸 T3	2 番	平瓦	【12.0】	-	【17.0】	14	-	普通	やや粗い 5mm 程度の長石含む
第 14 回 7	本丸 T3	2 番	平瓦	【8.8】	-	【13.6】	26	-	やや不良	やや粗い
第 14 回 8	本丸 T3	2 番	棟瓦	26.7	-	26.7	17	34	良	密
第 14 回 9	本丸 T3	2 番	棟瓦	28.5	-	28.5	24	35	良	やや粗い
第 15 回 3	本丸 T3	3 番	棟瓦	【17.0】	-	-	17	-	良	密
第 18 回 3	本丸 T4	2 番	平瓦	【21.4】	-	26.4	21	21	やや不良	粗い 10mm 程度の白色粒子を含む
第 18 回 4	本丸 T4	2 番	平瓦	29.3	26.0	23.8	21	28	不良	粗い 1 ~ 2mm 程度の長石含む
第 19 回 1	本丸 T4	2 番	平瓦	27.3	26.2	24.0	17	32	良	密
第 21 回 2	本丸 T5	2 番	平瓦	27.2	-	24.0	18	37	良	密
第 21 回 3	本丸 T5	2 番	平瓦	27.5	25.0	24.2	20	30	良	密
第 21 回 4	本丸 T5	2 番	棟瓦	【14.5】	-	【17.0】	18	-	良	密
第 30 回 3	二ノ門 T1	3 番	平瓦	【13.3】	【12.0】	-	20	-	やや不良	やや粗い 1 ~ 2mm 程度の長石含む
第 30 回 4	二ノ門 T1	3 番	平瓦	【11.6】	-	【14.0】	24	-	不良	粗い 10mm 大の長石含む
第 31 回 7	二ノ門 T2	2 番	平瓦	【19.2】	【6.0】	-	18	28	やや不良	前
第 32 回 3	二ノ門 T3	1 番	平瓦	【8.1】	-	-	22	-	良	密
第 32 回 6	二ノ門 T3	2 番	平瓦	【14.2】	-	-	25	-	良	密
第 32 回 8	二ノ門 T3	3 番	平瓦	【11.3】	-	-	20	-	やや不良	やや粗い 1 ~ 2mm 程度の長石含む
第 33 回 10	二ノ門 T4	4 番	平瓦	26.4	24.4	23.7	17	27	良	密 屈状
第 33 回 11	二ノ門 T4	4 番	平瓦	【16.9】	-	23.5	22	23.5	良	やや粗い 1 ~ 2mm 程度の長石含む
第 34 回 1	二ノ門 T4	4 番	平瓦	29.0	26.1	【16.0】	22	22	良	密
第 34 回 2	二ノ門 T4	4 番	平瓦	13.6	-	【15.0】	16	21	良	密
第 36 回 2	三丸 T2	石段擬形	棟瓦	【16.0】	-	【16.0】	24	-	良	密化 密
第 39 回 3	出丸 T1	1 番	平瓦	27.7	【14.0】	【13.3】	21	33	良	密
第 40 回 1	出丸 T1	2 番	棟瓦	【16.8】	-	【17.5】	21	-	良	密化 密
第 42 回 1	出丸 T1	SX01	棟瓦	36.2	-	28.5	29	34	良	密 屈状
第 43 回 1	出丸 T2	2 番	棟瓦	【3.1】	-	-	22	-	良	密化 密
第 43 回 4	出丸 T2	3 番	棟瓦	【14.1】	-	【19.3】	23	37	良	密化 密
第 43 回 7	出丸 T2	5 番	棟瓦	【15.0】	-	【12.1】	17	-	良	密 1mm 程度の黒色粒子を含む
第 50 回 2	中ノ門 T1-1	2 番	袖瓦	【14.4】	-	-	19	-	良	密化 密
第 50 回 7	中ノ門 T1-1	4 番	平瓦	【20.8】	-	【10.0】	23	20	やや不良	やや粗い 1 ~ 2mm 程度の長石を含む
第 50 回 16	中ノ門 T12	Pt	棟瓦	【5.6】	-	【14.5】	16	-	良	密化 密
第 51 回 3	中ノ門 T2	6 番	微平瓦	14.0	-	-	17	36	良	密
第 51 回 4	中ノ門 T2	6 番	平瓦	【13.9】	-	【13.0】	21	-	良	密
第 51 回 5	中ノ門 T2	6 番	棟瓦	28.8	【21.2】	22	3.0	良	やや粗い 1 ~ 2mm 程度の長石を含む	
第 51 回 20	中ノ門 T2	8 番	棟瓦	【13.3】	【9.3】	14	-	良	密	
第 51 回 21	中ノ門 T2	8 番	棟瓦	【9.5】	-	【9.5】	21	-	良	密
第 52 回 11	中ノ門 T3	2 番	平瓦	【13.3】	【9.1】	-	19	-	普通	密 石英や雲母を含む
第 54 回 9	中ノ門 T4	3 番	微平瓦	【6.9】	-	-	19	-	良	密
第 54 回 10	中ノ門 T4	3 番	平瓦	【6.7】	-	【6.5】	18	-	良	密 凸面に幅 4mm の沈継
第 54 回 11	中ノ門 T4	3 番	平瓦	【11.3】	【9.2】	-	21	-	やや不良	やや粗い 1mm 程度の長石を含む
第 54 回 12	中ノ門 T4	3 番	平瓦	【10.4】	-	【14.6】	24	34	良	密 1mm 程度の長石含む
第 55 回 5	中ノ門 T4	5 番	平瓦	【5.5】	-	【6.8】	19	-	やや不良	やや粗い 1mm 以下の長石・石英を含む
第 56 回 2	中ノ門 T5	4 番	平瓦	【8.5】	-	【9.5】	19	-	良	密
第 56 回 3	中ノ門 T5	4 番	平瓦	【7.7】	-	【17.0】	14	-	良	密

*【】は残存値

競斗・輪違い・道具瓦など観察表

井筒番号	出土地	層序	器種	法量(cm)			重量(g)	焼成	勘定土	備考
				長さ	幅	厚さ				
第12回4	本丸 T1	2層	鏡牛	[6.8]	11.4	2.6	不良好	粗い5mm程度の白色粒子含む	競斗目6条1単位 厚手	
第12回5	本丸 T1	2層	輪違い	9.5	11.7	1.8	良好	密		4辺切り
第12回10	本丸 T1	3層	鏡牛	28.8	13.0	2.1	やや不良	密 1~2mm程度の長石含む	競斗目5条1単位	
第12回11	本丸 T1	3層	不明	[8.3]	[5.1]	2.0	80	普通	密 黒色粒子含む	円孔あり
第13回1	本丸 T2	1層	輪違い	8.7	[6.2]	1.7	良好	密		焼成前穿孔1箇所
第14回30	本丸 T3	2層	鏡牛	[10.8]	13.7	1.9	やや不良	密 長石・石英含む	競斗目5条1単位	
第15回3	本丸 T3	2層	鏡牛	26.5	13.1	2.0	良好	密		競斗目6条2単位
第15回4	本丸 T3	3層	鏡牛	[6.1]	[6.3]	2.0	やや不良	やや粗い	競斗目4条以上	
第19回2	本丸 T4	2層	鏡牛	23.5	10.6	1.8	良好	密		競斗目6条1単位
第19回3	本丸 T4	2層	鏡牛	27.4	13.5	2.0	良好	密		競斗目微略化
第19回4	本丸 T4	2層	輪違い	7.0	12.1	1.8	やや不良	粗い		4辺切り
第19回5	本丸 T4	2層	輪違い	8.5	13.3	1.8	良好	密		瓦を輪切りにした形状
第21回5	本丸 T5	2層	鏡牛	23.9	11.4	1.9	良好	密		競斗目5条1単位
第21回6	本丸 T5	2層	鏡牛	27.3	12.5	2.0	良好	密		競斗目3条1単位
第21回7	本丸 T5	2層	不明	[9.3]	[8.9]	2.3	200	やや不良	やや粗い 2mm以下の長石含む	
第30回5	二ノ門 T1	3層	鏡牛	28.1	10.9	1.5	良好	鉛化		競斗目5条1単位
第30回6	二ノ門 T1	3層	鏡牛	[16.7]	13.4	2.0	良好	鉛化	やや粗い マーブル	競斗目5条1単位
第33回4	二ノ門 T4	2層	鏡	[5.7]	[6.7]	2.7	80	良好	密	
第34回3	二ノ門 T4	4層	輪違い	9.8	11.3	1.6	良好	密		4辺切り・四面削研直
第34回4	二ノ門 T4	4層	鬼瓦	[9.5]	[17.6]	8.8	680	良好	鉛化	二次焼熱
第34回5	二ノ門 T4	4層	鏡	[9.4]	[11.8]	2.9	300	良好	鉛化	密
第35回3	三丸 T1	3層	輪違い	9.3	[4.5]	2.0	不良好	やや粗い 1~2mm程度の長石含む		
第39回4	出丸 T1	1層	輪違い	13.3	12.6	2.4	やや不良	やや粗い 2mm程度の長石含む		圓面削りに2条の沈線
第39回5	出丸 T1	1層	鏡牛	24.3	12.7	1.8	良好	密		鏡牛以下粒子含む
第39回6	出丸 T1	1層	鏡牛	26.8	13.4	1.7	良好	密		競斗目4条1単位
第40回2	出丸 T1	2層	鏡牛	[6.7]	13.8	2.2	良好	密		競斗目6条1単位
第40回3	出丸 T1	2層	鏡牛	28.2	14.0	2.1	不良好	粗い 5mm大の長石含む		競斗目4条1単位
第40回4	出丸 T1	2層	輪違い	13.5	[9.7]	2.0	良好	密		
第40回5	出丸 T1	2層	輪違い	14.9	[9.7]	2.6	良好	密 1~2mm程度の長石含む		
第50回8	中ノ門 T1	4層	不明	[10.5]	[6.5]	2.0	140	不良好	やや粗い 3mm程度の長石含む	
第52回12	中ノ門 T3	2層	加工内壁	4.5	4.5	1.8	40	普通	密	
第52回13	中ノ門 T3	2層	鬼瓦	29.8	[31.7]	5.3	3,780	やや不良	やや粗い 2mm程度の長石含む	
第54回13	中ノ門 T5	3層	鬼瓦	[13.7]	[9.5]	5.6	740	やや不良	やや粗い 3mm程度の長石含む	周紋
第54回14	中ノ門 T4	3層	鬼瓦	[5.7]	[5.0]	3.0	100	やや不良	粗い	周紋
第54回15	中ノ門 T4	3層	不明	[5.3]	[5.4]	1.5	60	やや不良	密	
第54回16	中ノ門 T4	3層	不明	[8.0]	[6.1]	2.3	80	良好	密	
第54回17	中ノ門 T4	3層	不明	[4.0]	[4.3]	-	20	やや不良	密	脚部

※【】は残存部

陶磁器・土器觀察表

探査番号	出土地	層序	種別	器種	法量 (cm)			参考
					口径	底径	器高	
第12回6	本丸 T1	2層	陶器	皿か	-	-	-	内面施釉・外面露胎
第13回4	本丸 T2	2層	陶器	小瓶	(66)	-	-	【14】 内外に白化粧土
第33回5	二ノ門 T4	2層	陶器	碗	-	4.4	-	【17】 肥前系・砂目・三鷺手・見返に印花紋
第34回6	二ノ門 T4	4層	陶器	小瓶	6.8	4.0	5.3	動木窯製・外面底部周辺露胎・外腹及び見込に鉄鉢・体部下半に成形痕
第34回7	二ノ門 T4	4層	陶器	碗	9.7	5.0	7.4	動木窯製・体部下半に成形痕
第34回8	二ノ門 T4	4層	陶器	碗か	(13.0)	-	-	【13】 動木窯製・内外面施釉
第34回9	二ノ門 T4	4層	陶器	甕	-	(11.0)	-	【13】 動木窯製・内外面施釉
第34回10	二ノ門 T4	4層	陶器	甕	(28.0)	-	-	【16】 動木窯製・内外面施釉・二次焼熱
第50回4	中ノ門 T1-I	3層	陶器	皿	-	(5.3)	-	【26】 肥前系・筋目・九陶Ⅱ期
第50回5	中ノ門 T1-I	3層	陶器	大皿	-	-	-	【21】 肥前系・内外面施釉・九陶Ⅲ期
第50回9	中ノ門 T1-I	4層	磁器	皿か	-	-	-	【27】 青磁
第50回10	中ノ門 T1-I	4層	陶器	鉢	-	-	-	肥前系・内面施釉・九陶Ⅲ期
第50回11	中ノ門 T1-I	4層	陶器	鉢	(17.6)	-	-	【62】
第50回12	中ノ門 T1-I	溝	土師質土器	灯明皿	(9.0)	(5.7)	1.8	口縁端部に横付着
第50回13	中ノ門 T1-II	1層	磁器	碗	-	(4.5)	-	【47】 砂目
第50回14	中ノ門 T1-II	1層	陶器	廣縁皿	(12.0)	-	-	【22】 肥前系・九陶Ⅱ期
第51回6	中ノ門 T2	6層	磁器	小瓶	(8.0)	4.4	4.45	内面施釉・外面に青色模様・二次焼熱か
第51回7	中ノ門 T2	6層	磁器	仏花瓶	(17.0)	-	-	【18】 壱折手・内外面施釉
第51回8	中ノ門 T2	6層	磁器	利	-	5.0	-	【46】 肥前系
第51回9	中ノ門 T2	6層	陶器	甕	-	4.9	-	【18】 肥前系・内面施釉で貫入・外面露胎
第51回10	中ノ門 T2	6層	陶器	皿	(10.0)	(3.6)	2.2	内面施釉・外面全体以下露胎
第51回11	中ノ門 T2	6層	陶器	擂鉢	-	-	-	【25】 重伝焼・佐伯 I群 D型
第51回12	中ノ門 T2	6層	陶器	土瓶	-	8.9	-	【33】 在地産・内面施釉・外面露胎で横付着
第51回13	中ノ門 T2	6層	瓦質土器	不明	(22.0)	-	-	【42】
第51回14	中ノ門 T2	6層	土器	はるくろ	(35.0)	-	-	【57】
第51回17	中ノ門 T2	7層	土師質土器	灯明皿	(7.0)	3.4	1.2	口縁端部に横付着
第51回18	中ノ門 T2	7層	磁器	広葉碗	-	(6.4)	-	【29】 肥前系
第51回19	中ノ門 T2	7層	磁器	広葉碗	(10.2)	(6.2)	5.9	肥前系・見返に鳥・外腹に鳥と植物模様
第52回1	中ノ門 T3	1層	陶器	碗	-	4.2	-	【17】 肥前系・筋目・九陶Ⅰ-2期
第52回2	中ノ門 T3	2層	須志器	环身	-	-	-	【25】 内外面回転ナダ
第52回3	中ノ門 T3	2層	須志器	環腹盤か	-	(18.5)	-	【22】 内外面底部に散頭仔食・外腹回転ヘラケズリ
第52回4	中ノ門 T3	2層	須志器	甕か	(16.7)	-	-	【16】 内外面回転ナダ・軽質
第52回5	中ノ門 T3	2層	陶器	四葉皿	(10.2)	-	-	【49】 相傳者相繼（じそう）窯・萬輪
第52回6	中ノ門 T3	2層	青磁	碗	(16.0)	-	-	【29】 萩窯
第52回7	中ノ門 T3	2層	磁器	皿	(14.4)	-	-	【23】 内外面施釉・内面に植物模様
第52回8	中ノ門 T3	2層	陶器	碗	-	(5.2)	-	【37】 肥前系・内面磨毛目文・九陶Ⅱ期
第52回14	中ノ門 T3	3層	磁器	大皿か	-	-	-	津州窯
第52回15	中ノ門 T3	3層	磁器	小瓶	-	2.0	-	【26】 内面施釉・骨付露胎
第52回16	中ノ門 T3	3層	陶器	碗	-	(5.4)	-	【38】 肥前系・陶筋染付
第52回17	中ノ門 T3	3層	陶器	擂鉢	-	(14.0)	-	【23】 須佐燒・外腹底部にカンナ底
第52回19	中ノ門 T3	4層	須志器	甕か	-	-	-	把手あり・内面回転ナダ
第52回20	中ノ門 T3	4層	土師器	甕	(23.0)	-	-	風化激しい
第52回21	中ノ門 T3	5層	白磁	碗	-	6.3	-	【28】 白磁 8類
第53回1	中ノ門 T3	6層	須志器	环腹	13.6	-	4.5	
第53回2	中ノ門 T3	6層	須志器	环腹	(15.0)	-	2.9	石光堂
第53回3	中ノ門 T3	6層	須志器	高环	-	-	-	脚部片・スカシあり

※（ ）は復元値。【 】は残存値

陶磁器・土器観察表

特徴番号	出土地	順序	種類	容積	法量(cm)			備考
					口径	底径	高さ	
第53回4	中ノ門T3	6番	灰器	壺	—	(9.2)	【28】	脚部片・スカシあり・内外面回転ナダ
第53回5	中ノ門T3	6番	灰器	壺	—	—	—	体部片・内面凸て具痕・外面白子タキ
第53回6	中ノ門T3	6番	土師器	壺	(12.8)	9.8	11.9	环部内面凹てガキ
第53回7	中ノ門T3	6番	土師器	壺	(12.1)	—	—	風化激しい
第53回8	中ノ門T3	6番	土師器	コシキ	—	(7.6)	【72】	風化激しい
第53回9	中ノ門T3	6番	土師器	不削	—	—	—	ミニチュア製品か・内面指印压痕
第53回10	中ノ門T3	8番	陶生土器	壺	—	—	—	弧形接頭・複合口縁外腹凹窪
第54回1	中ノ門T4	2番	罐器	壺	(10.4)	(3.6)	5.3	肥前系・内外面施釉・豊付露筋・見込・外面上に植物模様
第54回18	中ノ門T4	3番	陶器	壺鉢	(26.6)	—	—	頬佐焼
第54回19	中ノ門T4	3番	陶器	壺鉢	—	—	—	頬佐焼
第55回1	中ノ門T4	3番	陶器	壺鉢	24	—	—	内外面鉄輪
第55回2	中ノ門T4	3番	通器	小环	(7.8)	(2.8)	3.3	内外面施釉・外面に「町」の文字
第55回4	中ノ門T4	4番	陶器	小环	—	—	—	肥前系・内外面施釉で買入あり
第55回6	中ノ門T4	5番	通器	壺	(9.3)	(5.0)	2.5	肥前系・福江板蓋・内外面施釉・外面に松根模様
第55回7	中ノ門T4	5番	通器	壺	—	—	—	肥前系・内外面施釉・内面に唐草模様
第55回8	中ノ門T4	5番	陶器	壺	(10.2)	—	—	肥前系・陶胎金付
第55回9	中ノ門T4	5番	陶器	壺	—	—	—	肥前系・内面露筋・外腹鉄輪
第55回10	中ノ門T4	5番	陶器	壺	—	—	—	肥前系・内面子タキ
第55回11	中ノ門T4	5番	土質土器	灯明皿	(7.2)	—	—	口縁端部に復付有
第59回1	瀬内神社曲斜面T1	1番	通器	壺	(10.4)	—	—	【29】
第59回2	瀬内神社曲斜面T1	2番	灰器	壺	—	—	—	肥前系・外青筋・丸脚凹窪
第59回3	瀬内神社曲斜面T1	SD01	灰器	ハソウ	—	4.2	—	穿孔あり
第59回4	瀬内神社曲斜面T2	1番	土器	火鉢	(18.0)	—	—	外面に唐草文
第63回1	庭園溝柵区X	1番	瓦質土器	火鉢	—	—	—	
第63回2	庭園溝柵区X	2番	灰器	壺	—	—	—	
第63回3	庭園溝柵区X	2番	陶器	壺鉢	—	(11.2)	—	頬佐焼・外腹底部にキンナ刺
第63回4	庭園溝柵区X	2番	通器	輪花皿	(16.0)	(9.4)	27	内外面施釉
第64回1	庭園溝柵区X	1番	灰器	長形盛か	—	—	—	内面回転ナダ・外腹カキメ
第64回3	庭園溝柵区X	2番	灰器	壺	—	(9.2)	—	内外面全体回転ナダ・外腹部下半回転ヘラケズリ
第64回4	庭園溝柵区X	2番	土師器	壺	(16.0)	—	—	内面底部以下ケズリ
第64回5	庭園溝柵区X	2番	通器	利	—	5.4	—	外腹底部は露胎で「新町角次」の墨書
第64回6	庭園溝柵区X	2番	陶器	利	3.6	—	—	内外面施釉・外腹鉄輪で「かど」の文字
第64回9	庭園溝柵区X	4番	織文土器	浅鉢	—	—	—	内面突唇・外腹1条の浅い沈窪
第64回10	庭園溝柵区X	5番	陶生土器	壺	—	—	—	複合口縁の口縁部片

※()は復元値、【 】は残存値

金属製品観察表

特徴番号	出土地	順序	種類	法量(cm)			重量(g)	備考
第13回5	本丸T2	2番	不明	口径3.3	高さ3.4	厚0.05	20	陶状・口縁部折り曲げ・鋸鋸
第51回16	中ノ門T2	7番	キセル	長【47】	幅10	厚0.05	5	椎吉部・羅字残存
第52回18	中ノ門T3	7番	鍔津	長8.1	幅7.4	厚2.7	440	楕円錐治済
第54回2	中ノ門T4	2番	キセル	長3.4	幅12	厚0.05	8	椎吉部・羅字残存
第55回3	中ノ門T4	3番	キセル	長[60]	幅10	厚0.05	4	吸口部

※【 】は残存値

木製品観察表

特徴番号	出土地	順序	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
第64回7	庭園溝柵区X	2番	下駄	23.3	11.3	1.1	角型連舟
第64回8	庭園溝柵区X	2番	下駄	【152】	[6.8]	0.9	角型連舟

※【 】は残存値

図版 1



本丸 T1 調査前状況（南から）



本丸 T1 完掘状況（南西から）



本丸 T1 北東壁土層堆積状況



本丸 T2 完掘状況（南東から）



本丸 T3 調査前状況（南から）



本丸 T3 2層中瓦出土状況（東から）



本丸 T3 完掘状況（南から）



本丸 T3 北壁土層堆積状況



本丸 T4 調査前状況（北から）



本丸 T4 2層瓦出土状況（南から）



本丸 T4 完掘状況（南から）



本丸 T5 調査前状況（東から）



本丸 T5 完掘状況（北東から）



本丸 T5 東壁土層堆積状況



二ノ門 T1 調査前状況（西から）



二ノ門 T1 完掘状況（北から）



二ノ門 T2 調査前状況 (西から)



二ノ門 T2 完掘状況 (東から)



二ノ門 T3 調査前状況 (北から)



二ノ門 T3 2層瓦出土状況 (南から)



二ノ門 T3 完掘状況 (南から)



二ノ門 T1 石垣基礎状況 (南から)



二ノ門 T2 石垣基礎状況 (西から)



二ノ門 T3 石垣基礎状況 (北から)



二ノ門 T4 調査前状況（北から）



二ノ門 T4 4層焼土換出状況（北から）



二ノ門 T4 西側礎石（南から）



二ノ門 T4 西側礎石上炭化柱根遠景（東から）



二ノ門 T4 西側礎石上炭化柱根近景（南から）



二ノ門 T4 東側礎石（南から）



二ノ門 T4 排水溝（北から）



二ノ門 T4 敷石（南から）



二ノ門 T4 階段西側（南から）



二ノ門 T4 階段東側（南から）



二ノ門 T4 西側石垣下部状況（東から）



二ノ門 T4 東側石垣下部状況（西から）



二ノ門 T4 完成状況（南から）



三丸 T1 調査前状況（南から）



三丸 T1 表土除去後状況（北から）



三丸 T1 完掘状況（南から）



三丸 T2 調査前状況（北から）



三丸 T2 完掘状況（北から）



三丸 T2 南壁土層堆積状況



出丸 T1 調査前状況（南から）



出丸 T1 2層瓦検出状況（北から）



出丸 T1 土塀基礎遺構（東から）



出丸 T1 南壁土塀堆積状況



出丸 T1 SX01 近景（東から）



出丸 T1 SX01 瓦鉄釘遺存状況



出丸 T1 SX01（北から）



出丸 T1 完掘状況（南から）



出丸 T2 検出石垣（南から）



出丸 T2 完掘状況（南東から）



中ノ門谷部 T1 調査前状況（北から）



中ノ門谷部 T1-1 石材散布状況（東から）



中ノ門谷部 T1-1 東壁土層堆積状況



中ノ門谷部 T1-1 完掘状況（北から）

図版 9



中ノ門谷部 T1-2 Pit (南から)



中ノ門谷部 T1-2 西壁土層堆積状況



中ノ門谷部 T1-2 完掘状況 (東から)



中ノ門谷部 T2 Pit 検出状況 (東から)



中ノ門谷部 T2 調査前状況 (東から)



中ノ門谷部 T2 完掘状況 (東から)



中ノ門谷部 T3 調査前状況（南から）



中ノ門谷部 T3 6 層土器出土状況（東から）



中ノ門谷部 T3 5 層（左）・6 層（右）上面（北から）



中ノ門谷部 T3 完掘状況（南から）



中ノ門谷部 T4 調査前状況（南から）



中ノ門谷部 T4 4 層上面石列（南から）



中ノ門谷部 T4 水路石列 (南西から)



中ノ門谷部 T4 北東壁土層堆積状況



中ノ門谷部 T4 完掘状況 (東から)



中ノ門谷部 T5 調査前状況 (北西から)



中ノ門谷部 T5 北端礎石 (南東から)



中ノ門谷部 T5 石組状況 1 (東から)



石組状況 2 (南から)



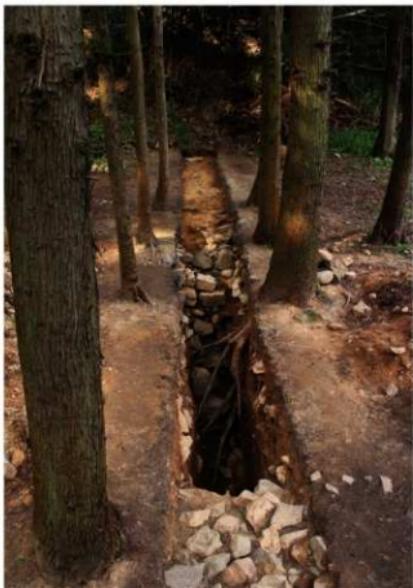
浜田町境界杭 (南から)



中ノ門谷部 T5 作業風景



中ノ門谷部 T5 検出石垣（南から）



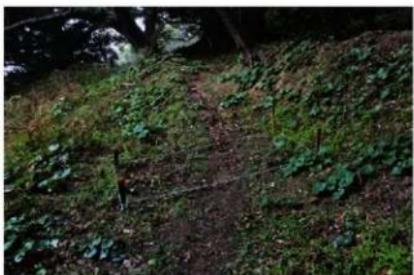
中ノ門谷部 T5 完掘状況（南から）



浜田護国神社南斜面 T1 調査前状況（西から）



浜田護国神社南斜面 T1 完掘状況（東から）



浜田護国神社南斜面 T2 調査前状況（東から）



浜田護国神社南斜面 T2 完掘状況（東から）



庭園部調査区 1 調査前状況（西から）



庭園部調査区 1 西側岸状況（北東から）



庭園部調査区 1 中嶋・池状況（西から）



庭園部調査区 1 東側南壁土層堆積状況



庭園部調査区 1 東壁土層堆積状況



庭園部調査区 1 完掘状況（西から）



庭園部調査区 2 調査前状況（西から）



庭園部調査区 2 杭列検出状況（北から）



庭園部調査区 2 碓石（東から）



庭園部調査区 2 西側完掘状況（西から）



庭園部調査区 2 中央～東側完掘状況（西から）



明治 40 年頃の庭園部の絵葉書

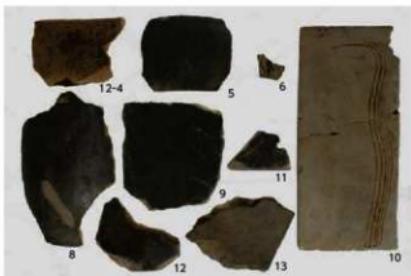


庭園部調査区 2 中嶋状況（北から）

図版 15



本丸 T1 出土遺物 1



本丸 T1 出土遺物 2



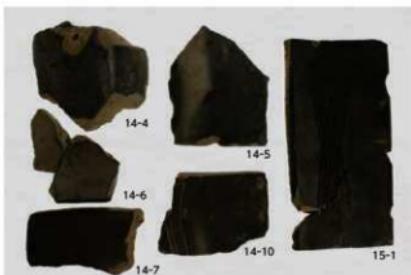
本丸 T2 出土遺物 1



本丸 T2 出土遺物 2



本丸 T3 出土遺物 1



本丸 T3 出土遺物 2



本丸 T3 出土遺物 3



本丸 T3 出土遺物 4



本丸 T4 出土遺物 1



本丸 T4 出土遺物 2



本丸 T4 出土遺物 3



本丸 T4 出土遺物 4



本丸 T4 出土遺物 5



本丸 T4 出土遺物 6



本丸 T4 出土遺物 7



本丸 T5 出土遺物 1



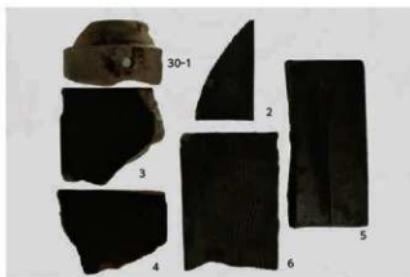
本丸 T5 出土遺物 2



本丸 T5 出土遺物 3



本丸 T5 出土遺物 4



二ノ門 T1 出土遺物



二ノ門 T2 出土遺物 1



二ノ門 T2 出土遺物 2



二ノ門 T3 出土遺物 1



二ノ門 T3 出土遺物 2



二ノ門 T4 出土遺物 1



二ノ門 T4 出土遺物 2



二ノ門 T4 出土遺物 3



二ノ門 T4 出土遺物 4



二ノ門 T4 出土遺物 5



二ノ門 T4 出土遺物 6

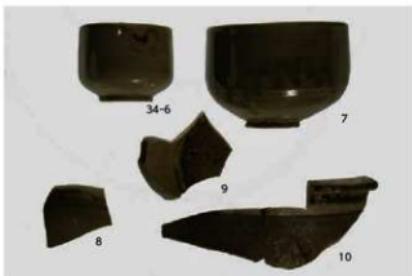


二ノ門 T4 出土遺物 7

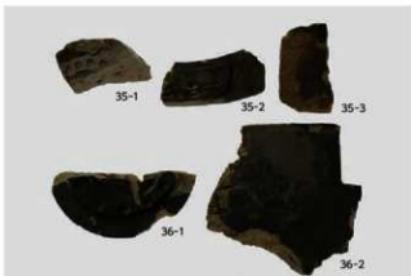


二ノ門 T4 出土遺物 8

図版 19



二ノ門 T4 出土遺物 9



三丸 T1・T2 出土遺物



出丸 T1 出土遺物 1



出丸 T1 出土遺物 2



出丸 T1 出土遺物 3



出丸 T1 出土遺物 4



出丸 T1 出土遺物 5



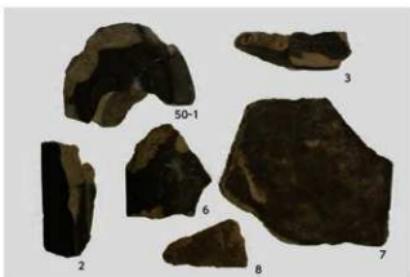
出丸 T1 出土遺物 6



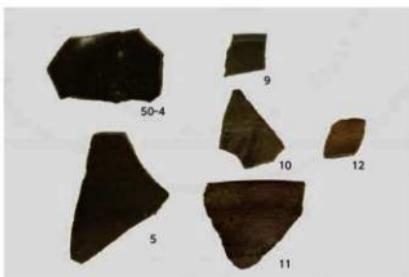
中ノ門谷部 T2 出土遺物 1



中ノ門谷部 T2 出土遺物 2



中ノ門谷部 T1 出土遺物 1



中ノ門谷部 T1 出土遺物 2



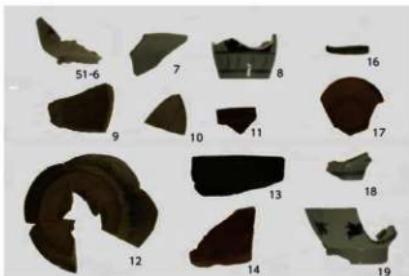
中ノ門谷部 T1 出土遺物 3



中ノ門谷部 T2 出土遺物 1



中ノ門谷部 T2 出土遺物 2



中ノ門谷部 T2 出土遺物 3

図版 21



中ノ門谷部 T3 出土遺物 1



中ノ門谷部 T3 出土遺物 2



中ノ門谷部 T3 出土遺物 3



中ノ門谷部 T3 出土遺物 4



中ノ門谷部 T3 出土遺物 5



中ノ門谷部 T4 出土遺物 1



中ノ門谷部 T4 出土遺物 2



中ノ門谷部 T4 出土遺物 3



中ノ門谷部 T5 出土遺物 1



中ノ門谷部 T5 出土遺物 2



浜田護國神社南斜面部 出土遺物



庭園部 出土遺物 1



庭園部 出土遺物 2

図版 23



A-1類A(第65図1)



A-2類A(第65図2)



A-2類B(第65図3)



A-2類C(第65図4)



A-2類D(第65図5)



A-3類A(第65図6)



A-3類B(第65図7)



A-3類C(第65図8)



A-3類D(第65図9)



A-3類E(第66図10)



A-3類F(第66図11)



A-4類A(第66図12)



A-5類A(第66図13)



B-1類A(第66図14)



B-2類A(第66図15)



B-3類A(第66図16)



B-4類A(第66図17)



B-5類A(第66図18)



上向五葉文 A 類 A (第 67 図 1)



上向五葉文 A 類 B (第 67 図 2)



上向五葉文 B 類 A (第 67 図 3)



上向五葉文 B 類 B (第 67 図 4)



上向五葉文 B 類 C (第 67 図 5)



下向三葉文 A 類 A (第 68 図 10)



下向三葉文 B 類 A (第 68 図 11)



下向三葉文 B 類 B (第 68 図 12)



下向三葉文 C 類 A (第 68 図 13)



上向三葉文 A 類 A (第 67 図 6)



上向三葉文 A 類 B (第 67 図 7)



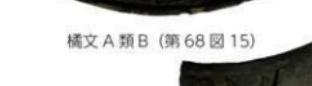
上向三葉文 A 類 C (第 67 図 8)



上向三葉文 B 類 A (第 67 図 9)



橋文 A 類 A (第 68 図 14)



橋文 A 類 B (第 68 図 15)



橋文 A 類 C (第 68 図 16)



橋文 A 類 D (第 68 図 17)



橋文 A 類 E (第 68 図 18)



橋文 B 類 A (第 68 図 19)



橋文 B 類 B (第 68 図 20)

報告書抄録

ふりがな	じょうざんこうえんせいびじょにともなうけんしせきはまだじょうあとはくつちようさほうこくしょ						
書名	城山公園整備事業に伴う県史跡浜田城跡発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	藤田大輔・渡辺正巳						
編集機関	鳥根県浜田市教育委員会						
所在地	〒697-8501 鳥根県浜田市殿町1番地 Tel. 0855-25-9731 bunka@city.hamada.lg.jp						
発行年月日	2020年3月						
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
浜田城跡	島根県浜田市 殿町	32202	L27	34° 52' 12"	132° 04' 25"	20161202 ~ 20190329	659.135m ² 公園整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
浜田城跡	城跡	古墳・近世	石垣・城門		土師器、須恵器、瓦、陶磁器		
要約	<p>平成28年度から30年度にかけて実施した確認調査報告を収録。</p> <p>二ノ門トレント4では、二ノ門の礎石・敷石・階段・排水溝が検出された。また幕末の落城時の焼土層も検出され、礎石には炭化した柱根も遺存している。遺物も二次被熱を受けており、瓦は燃しが剥落し赤褐色を呈し、陶器の釉薬も変質している。</p> <p>出丸トレント1では土壁基礎遺構が検出され、基礎幅90cm程度の控え柱をもたない土壁であったと推察される。また出丸トレント2や中ノ門谷部トレント5では、埋没石垣も検出された。</p> <p>遺物では中ノ門谷部トレント3においては古墳時代の遺物が多く出土し、城山東麓に古墳時代集落の存在が想定できる。また軒平瓦凹面に水切彫刻をもつ上向五葉文が出土し、元和8年の浅井神社の棟札の記述を見ても坂本から瓦技術を求めていたことが判明した。</p>						

城山公園整備事業に伴う県史跡浜田城跡発掘調査報告書

発行 烏根県浜田市教育委員会 2020年3月

島根県浜田市殿町1番地

印刷 弘文印刷

